

江戸名所圖會

十三

西垣文庫

文庫10

6556

13



文庫10  
6556  
13

西郷文庫



小石川

水道橋より外白山のあたり迄の惣名なり昔ハ小石川多き

細流數條あがれ故にわく号するとも江戸名勝志とてその外ある川と云名所ありとありと據あるは似たり又

此地は加州石川郡の白山の神祠鎮坐の故ありんと云傳ふもとも詳

な小石川の白山權現ハ漸くえい永祿二年小田原北条家の所領役帳に

櫻井某所領の内は小石川本所といへる地名を加へ島津孫四郎と

云人も此地中法林院松月分の地を領せり菊岡沾涼云く記せり

朕橋の下を流る所の水脈小石川御殿の南より傳通院の後柳町を流れて水府公

御藩邸の内を歴水道橋の上の方より神田川に會するその小石川の舊跡ありといへる

田國雜記 小石川といふと江の川

黄葉集 江戸よそよりくる頃小石川と云所あり

久方流月を宿の涼とも隣ありなり石川のふ

一海の海やあつこいこい

涼風や移わつてへハ小石川

道興  
准后

鳥丸  
光廣

芭蕉  
宗因

傳通院裏門



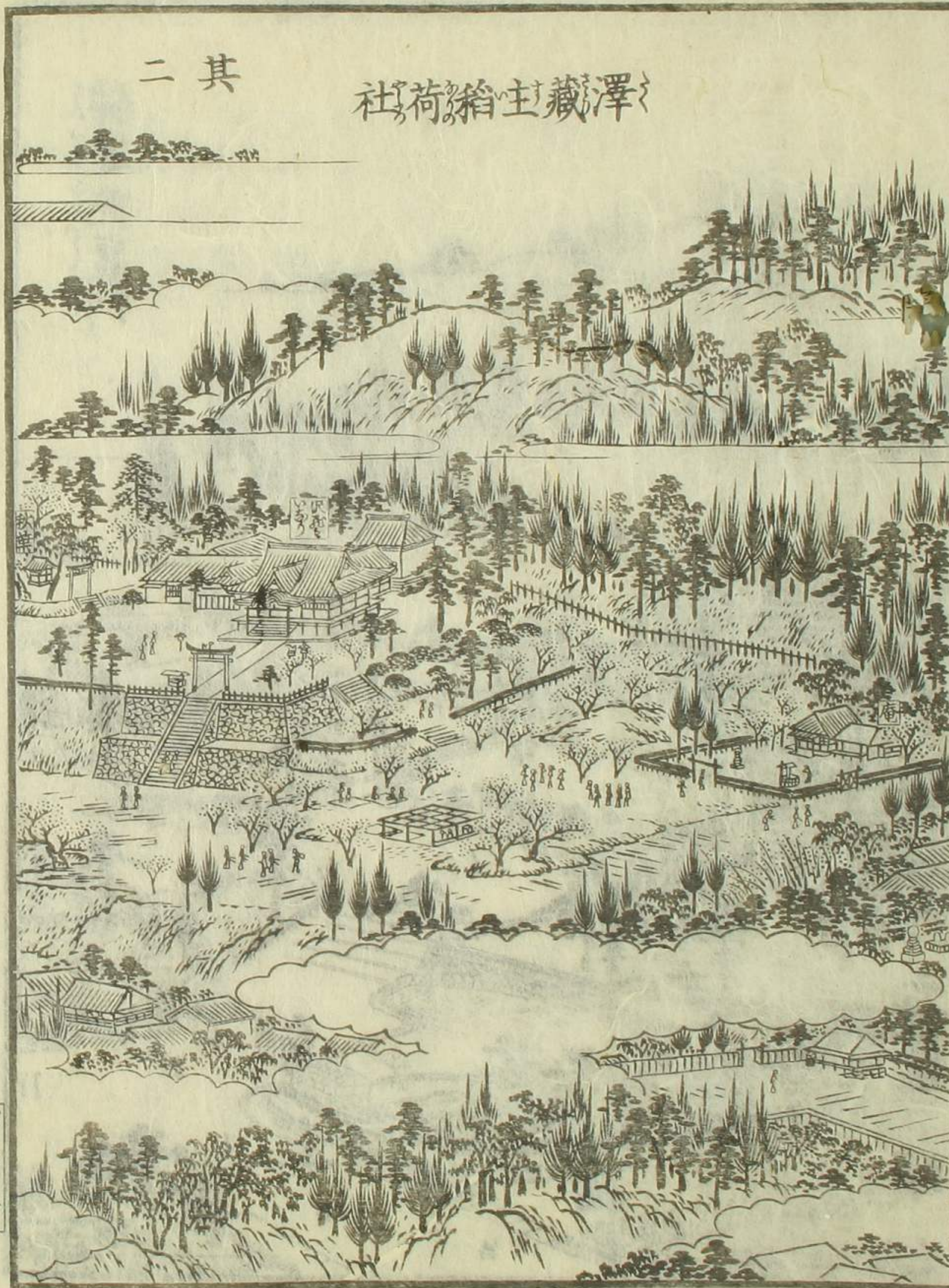
無量山傳通院

無量山傳通院 壽經寺と号す小石川牛天神乾の方二町をくりの  
 あり浄家十八檀林の一員なり本尊阿彌陀如來ハ惠心僧都の作  
 めり當寺ハ明德年間了譽上人開創せり梵刹より寮舎百餘  
 御靈屋 傳通院殿の御靈屋なり御遺言は依て御廟を建らし  
 奉る和漢三才圖會は慶長 開山堂 本堂の右ハ幡宮 同所あり天正年間一光  
 七年壬寅八月二十九日逝去あり 辨財天祠 當社ハと白山御殿の地あり白山水川と  
 文字ある石の額を得り 常念佛堂 塔中眞珠院 新念佛堂 同瑞真院  
 別當ハ景久院と号し 常念佛堂 塔中眞珠院 新念佛堂 同瑞真院  
 論をとり後ハ稍荷ハ勸請 常念佛堂 塔中眞珠院 新念佛堂 同瑞真院  
 大黒天 寺中福聚院あり菊岡沾京云く初井と稱し其土中より此尊像を得り  
 橋磨侯の構の内とありありとあり極樂水は混せりあらん彼井も又同一屋敷の  
 中ありありの所ハ井泉ありありとあり極樂水は混せりあらん彼井も又同一屋敷の  
 縁起云く當寺ハ安置の大黒天ハ三國傳來の靈像なり大黒多門辨天等の三神  
 一體の尊影なり 孝徳天皇の御宇高麗國の大匠錄來の土古とりの本邦に  
 携來りて近江國蒲生郡ありありとあり明和年間豊譽靈應上人感得しとあり  
 安置せり甲子日恭詣群集せり堂の額ハ福聚院とあり當山第二十三世如空師  
 の筆 經堂 正面ハ聖教窟の額をかけ内ハ明和の一代蔵經 無縁塚 享保六  
 全部を収む故あり當山の法寶とありとあり貴とあり



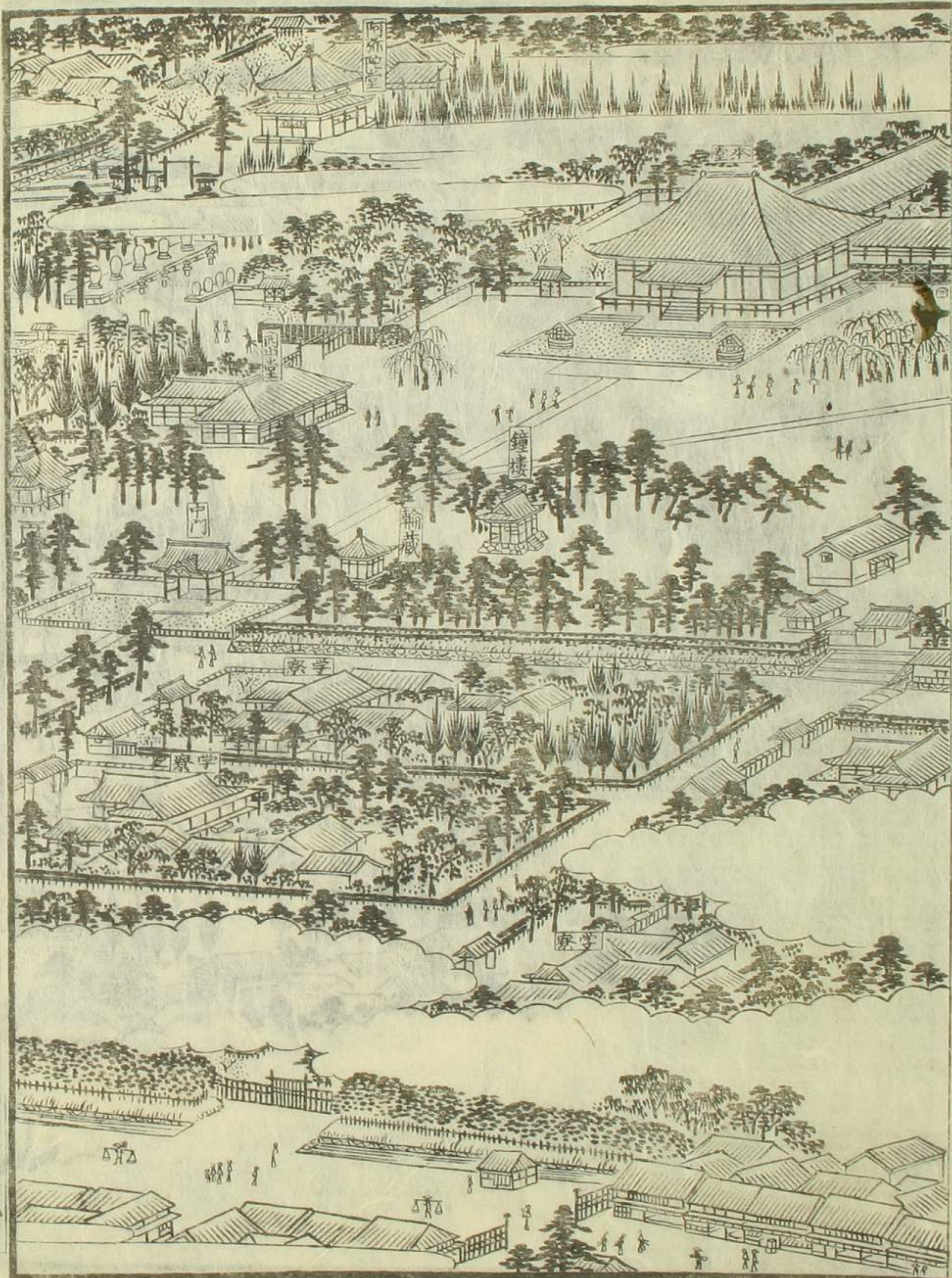
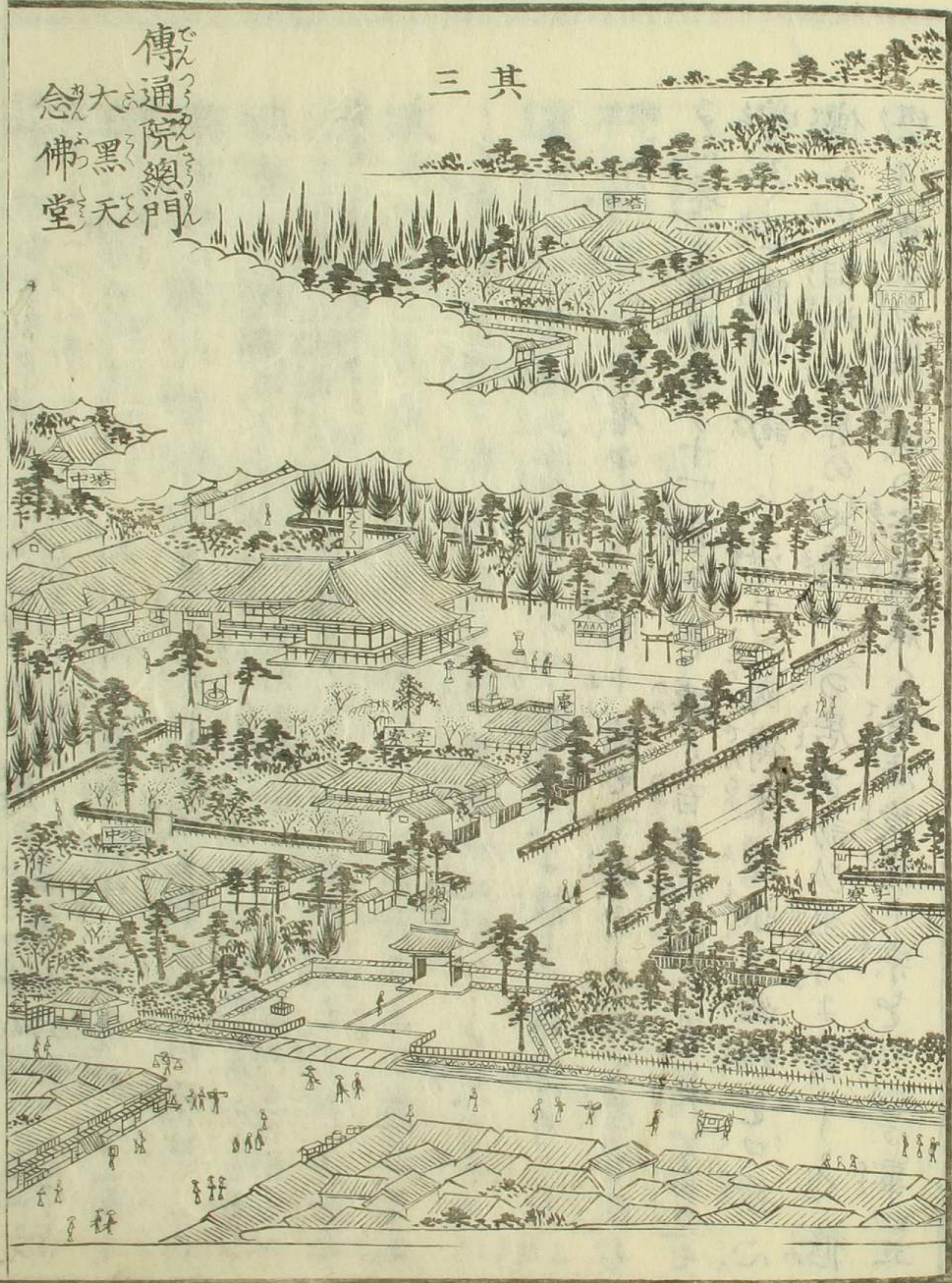
其二

澤藏主翁荷社



傳通院總門  
念大黑天  
佛堂

三其



四  
百九

回録の時當寺に入りて焼死する所の男女三百八十餘人の無聲蛙理談のいふ開山上人墓所なり一堆の塚となり上は堂と建て稱名の音と絶じむ開山傳曰釋聖罔字ハ酉蓮社了譽と當寺の姓ハ聲なりとあり後開山傳曰釋聖罔字ハ酉蓮社了譽と号を姓ハ源氏常州久慈郡岩瀬の城主佐竹氏の花族白吉志摩守義満の子なり滿或ハ光ニ作る父母岩瀬明神ハ祈求して曆應四年辛巳正月二十五日出生を後瓜連の常福寺十八世眞譽上人其誕生地の地ハ五歳のとき父義満戦死を采邑を敵の草堂を闢き誕生寺と号く爲ニ棄つる資財ハ賊の爲ニ掠めらる故ハ女子山ニ隠れ落魄して寒暑を歴る事既ニ三年其後其母此兒をとして父の菩提の爲瓜連の草地山常福寺の了實上人ニ投して難染せしむ時年八歳聖天性聰睿中々一聞十悟を十歳中と始て學を試むるハ速ニ通習せり十一歳中と博く百家内外の書籍を自見を嘗く蓮勝師ニ謁して淨土三國傳來譜脈の幽妙を口授心傳を又相州桑原の定慧上人の居を訪ひ坐外ニ寓しして修學ハ竟ハ白旗一派の宗義咸く傳法授戒一宗を弘むる事四五

箇年白旗ハ寂惠上人所住の地の名なり以て宗名とせ道俗化を蒙る者甚多一師年四十六常陽小還る時ニ實師齡已ハ八旬則罔師をとして常福ニ主たりし年七又應永二十二年乙未の冬武州小石川の畔ニ閑地をトし一宇を營修今の傳通院傍ニ清泉あり今の極樂水則元祖の舊跡ニ準擬してその水を吉水と号し師無量山ニ住を更終ニ六年一夕微疾を憂ハ安然として沐浴淨衣一辭世の偈を書きて云く放行把住滿八十年即今端的知不識日輝東山月西天矣書畢て端坐合掌一口ニ宝号を唱へ西へ向ひく奄然として寂を昔ニ應永二十七年庚子九月二十七日世壽八十師常ニ坐其影的爾として相映を此故ニ世ニ稱して生平撰述の書ハ牛ハ汗一丈藻ハ煥然として微を窮め妙を極む世舉る師ニ十徳の目ありと又和歌ハ頓阿法師ニ傳受し古今比序注十卷を製屯

光圓寺  
阿彌陀  
 如来  
 安置  
 あり

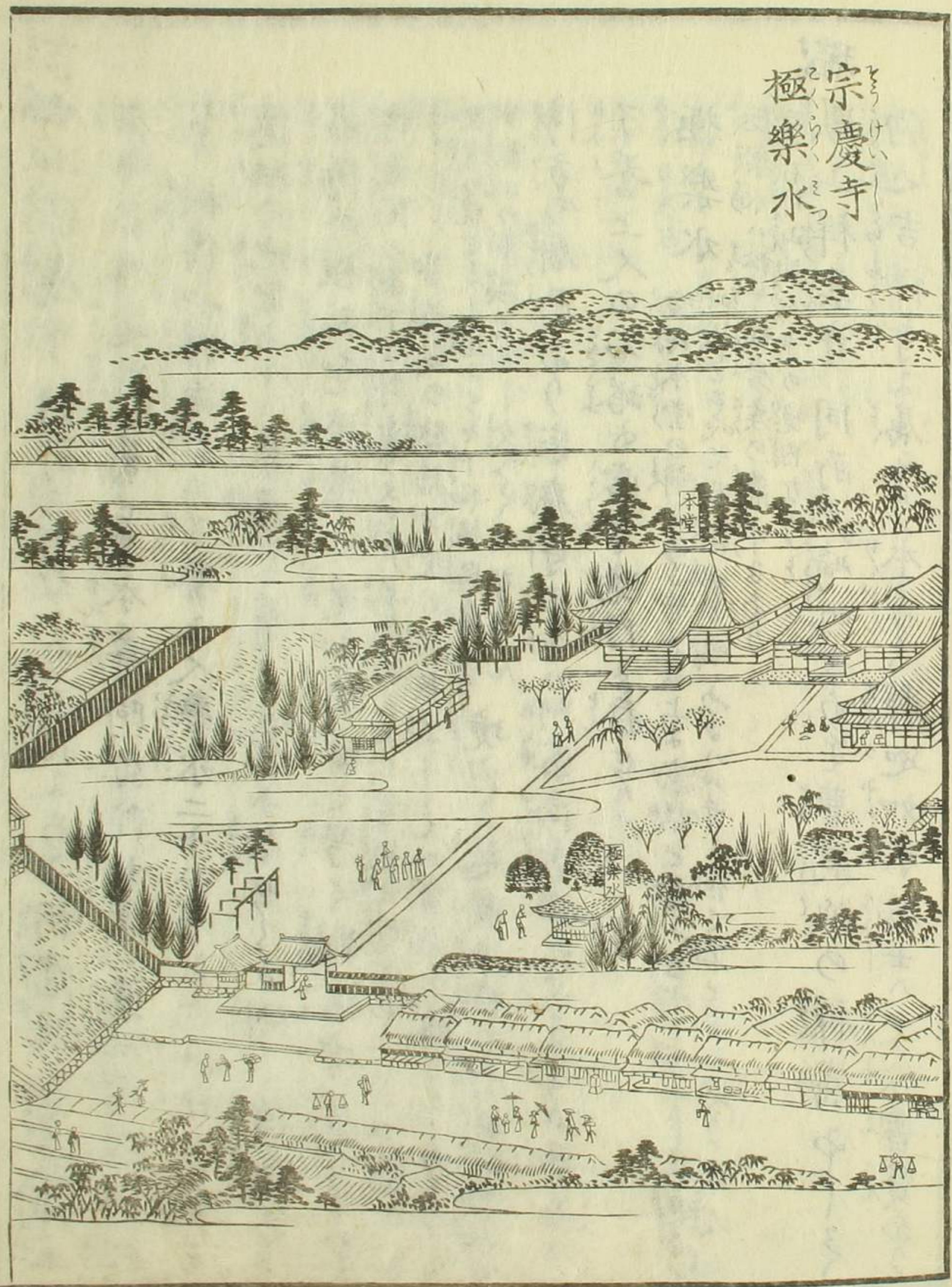


法器豪英ゆゑに道德ハ終古小隆盛ハ一と聲ハ宇宙に高くと  
 謂ひべし緇門の柱礎浄家の棟幹なるをのびりと  
以上了譽上人傳の  
 摘む  
 當寺ハ浄土宗流の一派ゆゑに所化學道の談林なり学業を  
 勤むる輩聚螢映雪の功積て眼を經論の面よはし〜五重  
 相傳の窓に前ゆゑ五念修行の悉地を求め三心具足の床のうへ  
 わち 住 不退轉の法義を期む

中臺山光圓寺 醫王院と号は傳通院の西二町あり久保町と  
 云ふ所の浄業の精舎なり傳通院の開山了譽上人當寺を  
 興復あり  
上古の開山ハ行基大士とを了譽上人の時浄宗は更なるなり 本尊阿彌陀如来の像ハ惠心  
 僧都の作あり  
當寺を中臺山と号するを此地舊中臺村と云ふある由縁起ハ云ふなり  
 本本薬師如来 同寺よ安を本尊ハ行基菩薩の作り〜一尺の  
 立像なり慈母薬師女の御影を摸し〜故ハ女體ありと云ふ

毎年四月八日十二日閑扉結縁せむ  
 縁起云天平十三年辛巳行基菩薩歳四東國の群類を化度  
 せむと先南紀熊野權現へ叅籠あり歸路傍に杉此  
 大樹あり此を像材と佛像を造立せん其末を伐り誓て  
 云く善此より佛意を協ひない此木我小先より有縁の地に至る  
 至ると云く彼所の谷川は流さず夫より東國へ赴き此地に  
 至るまで彼靈本あり入江に漂着せ  
 江河なり仍佛意を尊と慈母の為則東方に向ひ香華を捧げ禮  
 拜なり信心の誠を盡しあふ然るは面親薬師女金色の光を放  
 ちて顯れあふ依り行基菩薩件の杉の本木を以て此本尊を  
 模刻し此境に一字を営んで安置せり又六道流轉の衆生を  
 救へる末本を以て六所六所の弥陀像を彫造し六所に分ちあり  
江戸六阿弥陀と稱するもの懸あり

宗慶寺  
極樂水





吉水山宗慶寺 同所三町をり西北より朝覚院と号し浄土

宗より傳通院に屬せし本尊阿彌陀如来ハ惠心僧都が作

なり相傳ふ傳通院の了譽上人應永二十二年乙未此地に至り

隱栖の地をとり草庵を葺くあり居せしる側は清泉あり

洛陽の祖跡を追慕し是を吉水と号く則當寺是なり衆

傳通院の条下は詳あり又江戸名所記に云く昔龍女形をあらはし了譽上人ハ

附會の説あり恐らくを下谷懺隨意院の境内に越後少將の御母公阿茶の

妙龍水の事蹟を混へ交へて云なり

了譽上人の石塔も當寺境内に存せり

極樂水 境内本堂の前は井を云上は家根を覆ふ吉水と号するもの是なり

極樂水ハ松平播磨侯の藩中あり

瑞鳳山祥雲寺 同所戸崎町にあり曹洞派の禪窟なり

駒込吉祥寺は屬せり本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢あり

寺記云當寺ハ天文元年癸辰遠山隼人正創建の精藍なり

小田原北条家の分限帳に遠山隼人佐江戸平川を領せしとあり同一人なり永祿

六年甲子正月八日北條國府臺の合戦に討死せし人なり當寺ハ靈牌あり法名ハ月溪

正圓居士と當小永祿七年甲子寺成り浄光院と号し當寺過去帳ハ

永祿三年庚申二月九日没し花陰宗順大禪定尼と稱し此尼ハ遠山隼人正の室中

北條上總介の女なりと云く後浄光の文字禪ある故小室永の願今の如く祥雲寺と

改む 吉祥寺第二世大川安充和尚を請く開祖と云云 當寺創

今の市城内和田倉の辺あり吉祥寺其頃ハ同し辺あり今ハ吉祥寺ハ駒込

引移る當寺も國初以來鞍河臺に引こ小石川金杉より移れ終は又今の地を

賜りて寺院を引たり由大明心越 茨木春朔墓 門内右の方鎮守稻荷祠の

禪師撰る所の當寺花經の銘に詳あり 延寶八年庚申正月八日没し慶安法

樂を彫り酒徳院解翁傳枕居士とあり又左は辞世の和哥二首を鐫る春潮ハ慶安法

頃の人なり酒井家の儒醫家三浦氏の親なり 延寶八年庚申正月八日没し慶安法

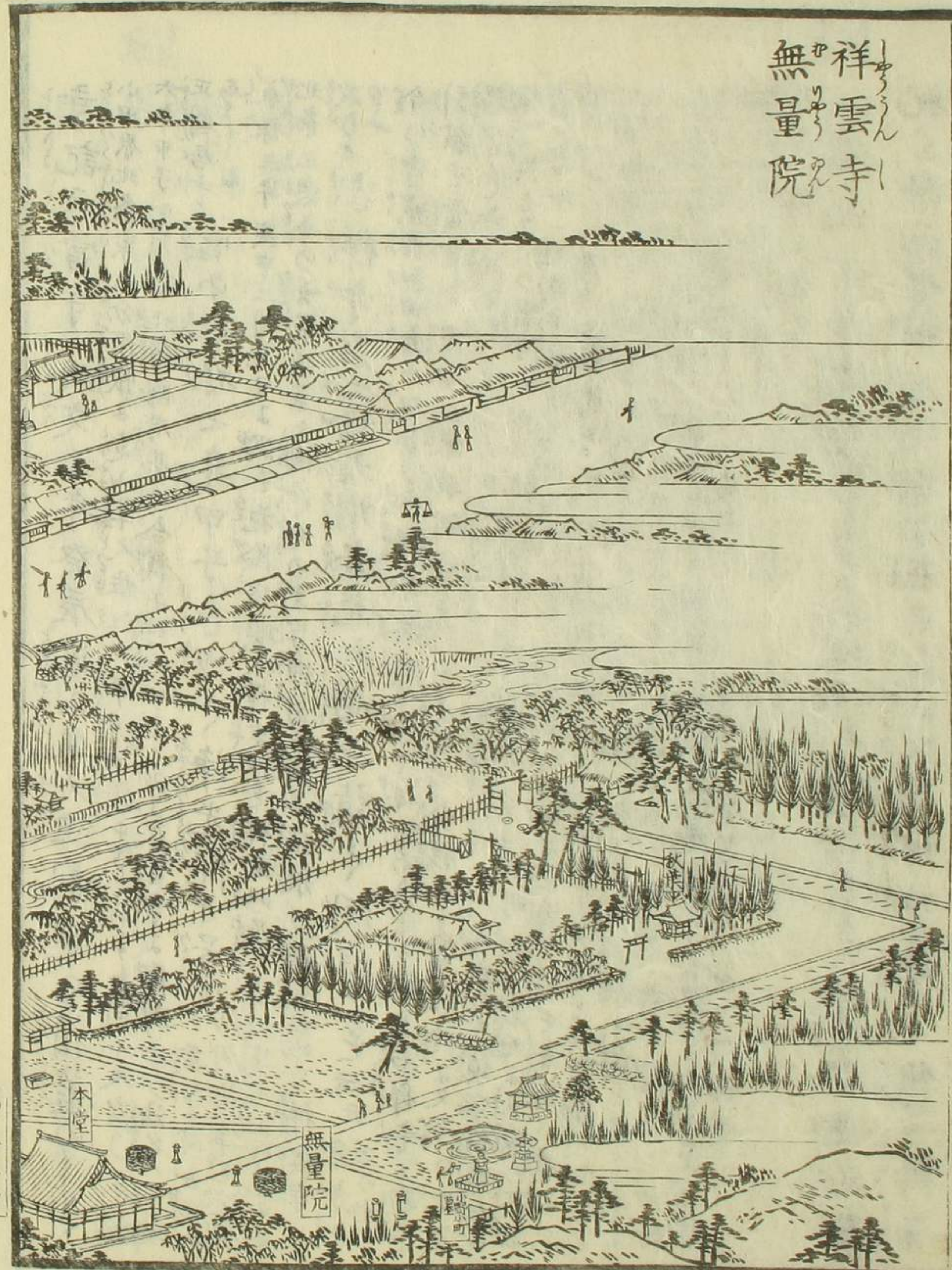
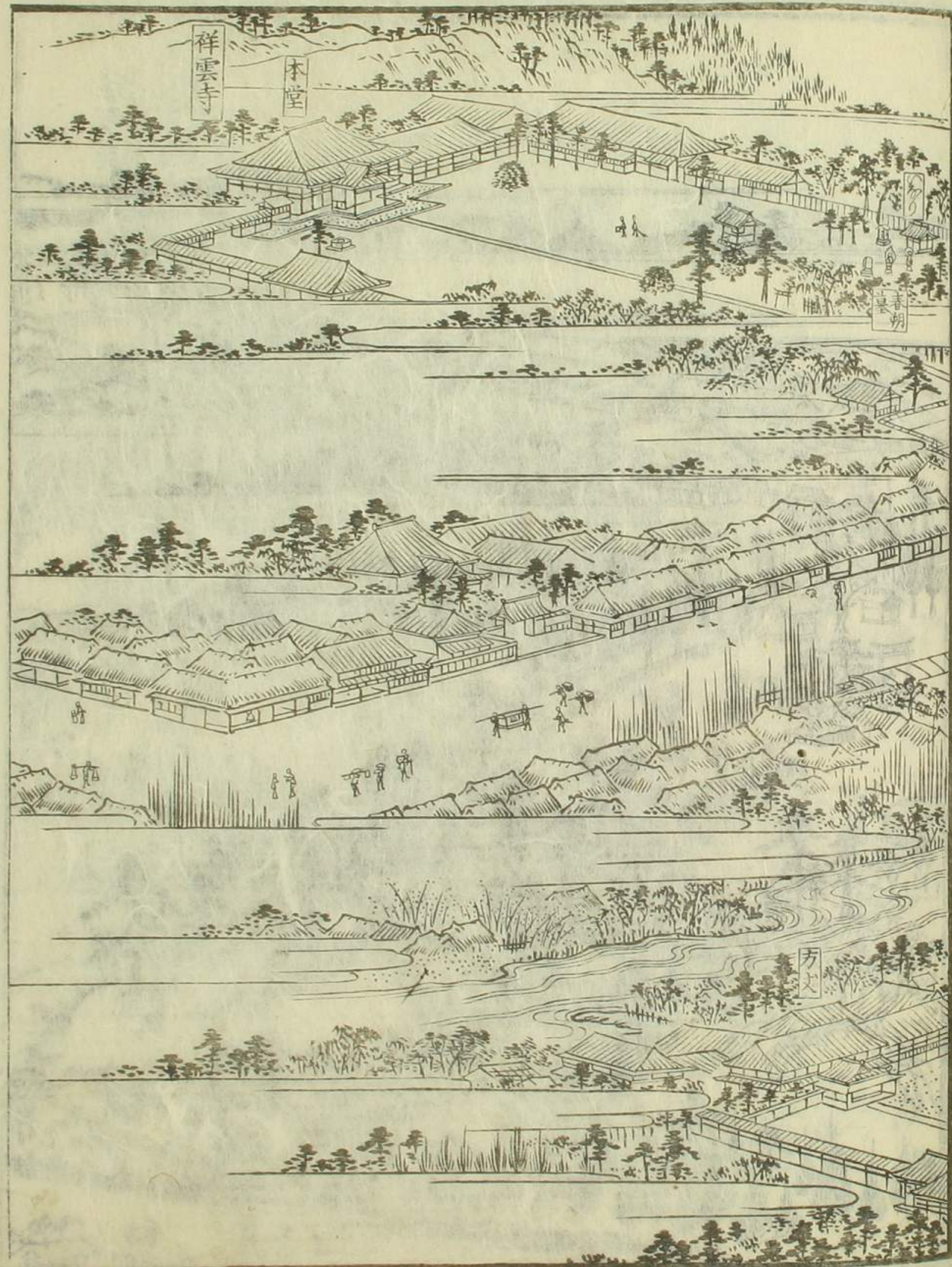
地黃坊傳次と云始江戸の大塚に任後鶏鼓が産み移る生平飲酒は長し同し延

原は住る池上太郎右衛門底深といふ醉客と酒戰せし戲編なり當寺は所の石碑ハ

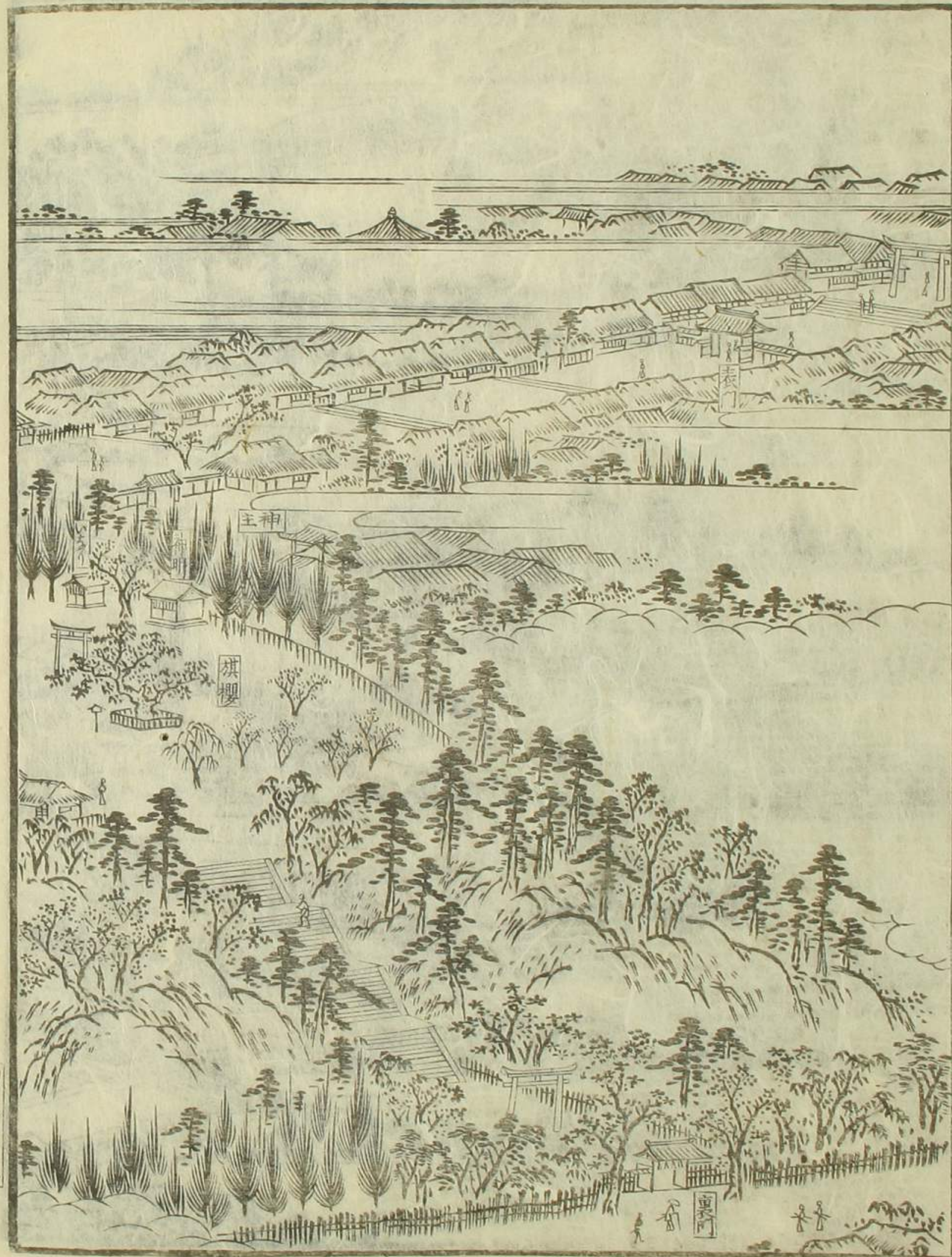
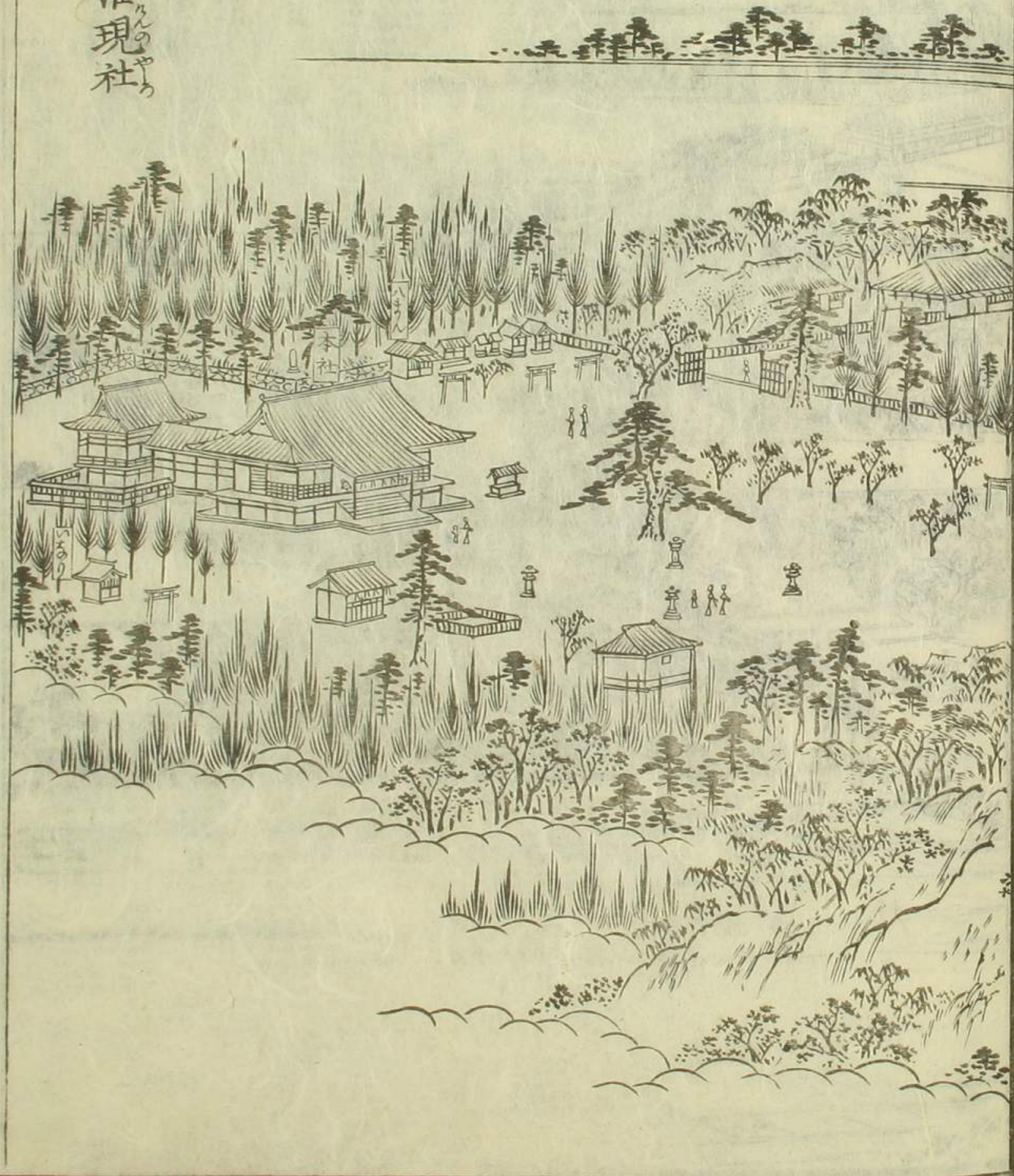
酒門の高兼菅住口といふ人造立せし遺骨を葬せし墓ハ谷中妙林寺にあり

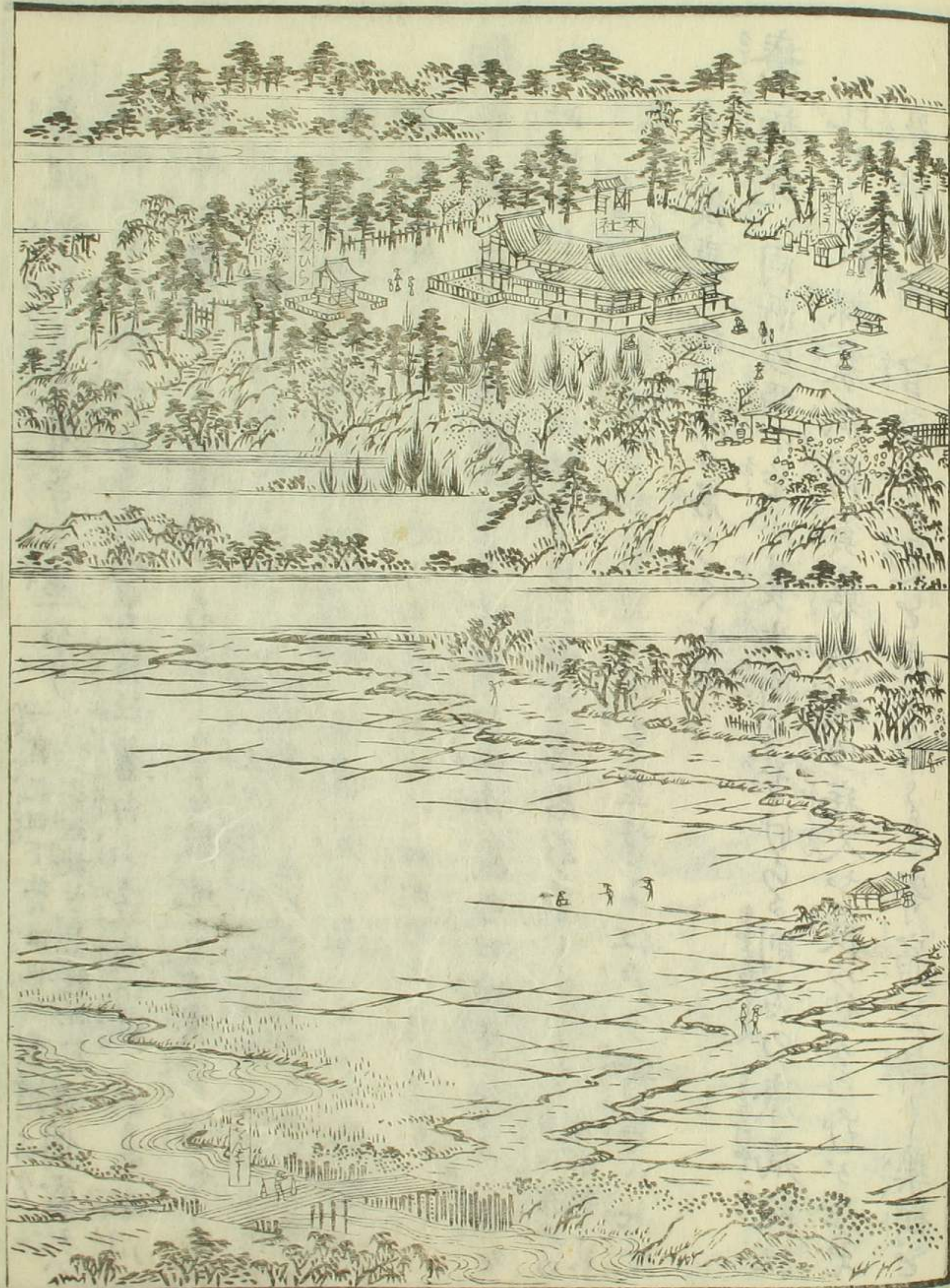
白山神社 同所指谷町にあり小石川の鎮守中々神主中井氏奉

祀を祭神賀州石川郡に在る白山比咩神社は同し伊弉册尊

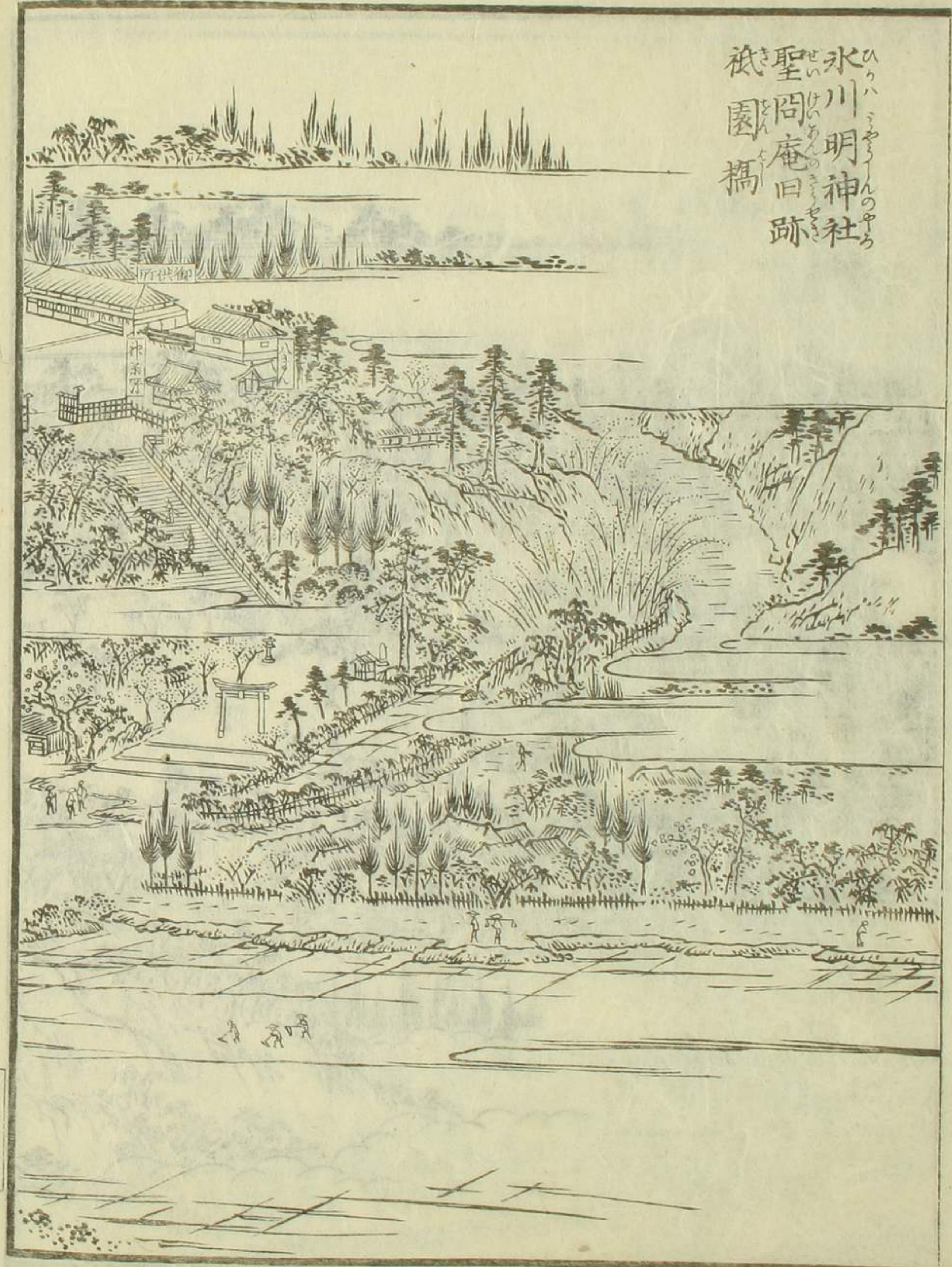


こいし川の  
白山権現社

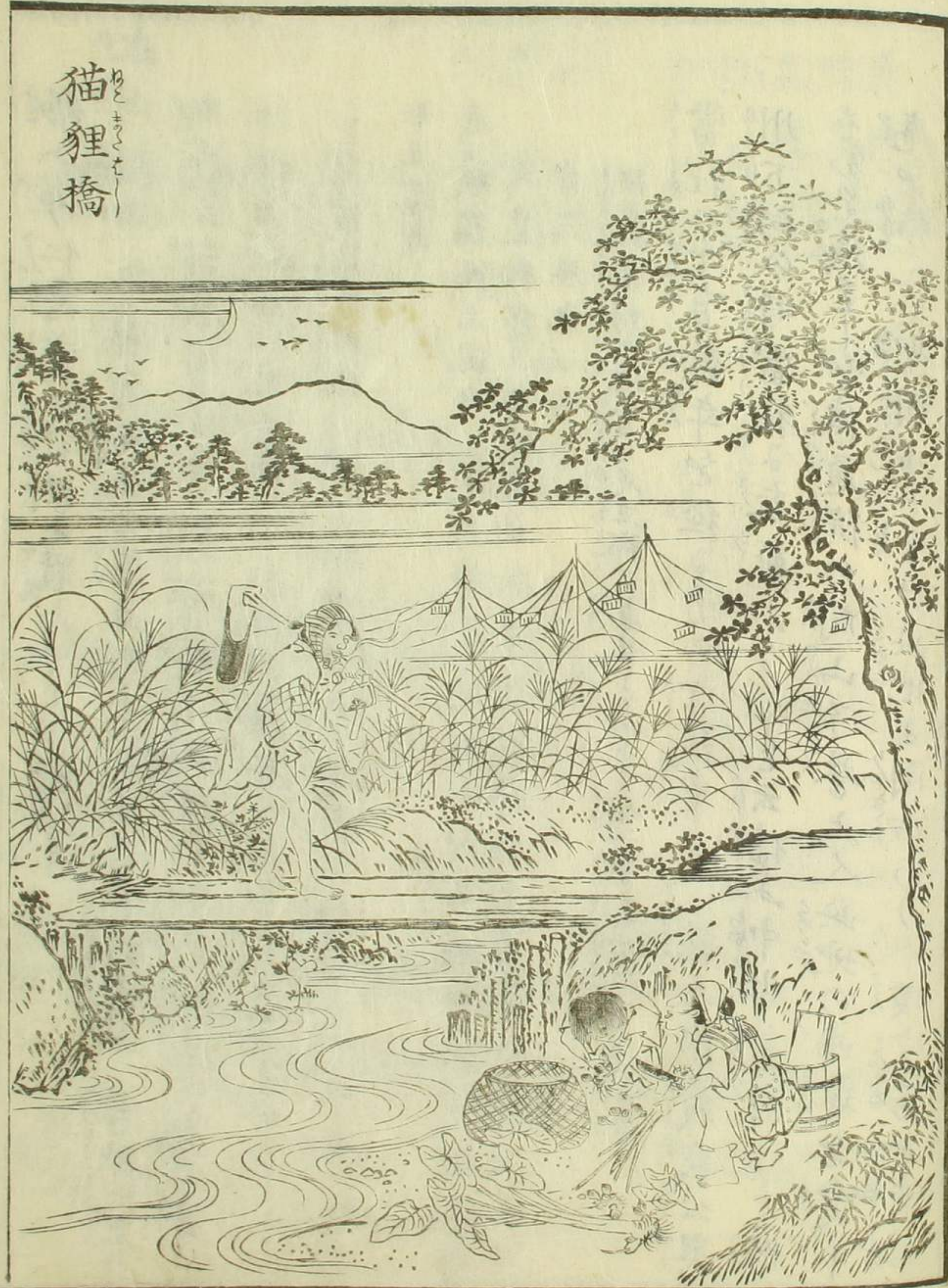




氷川明神社  
 聖園橋  
 跡

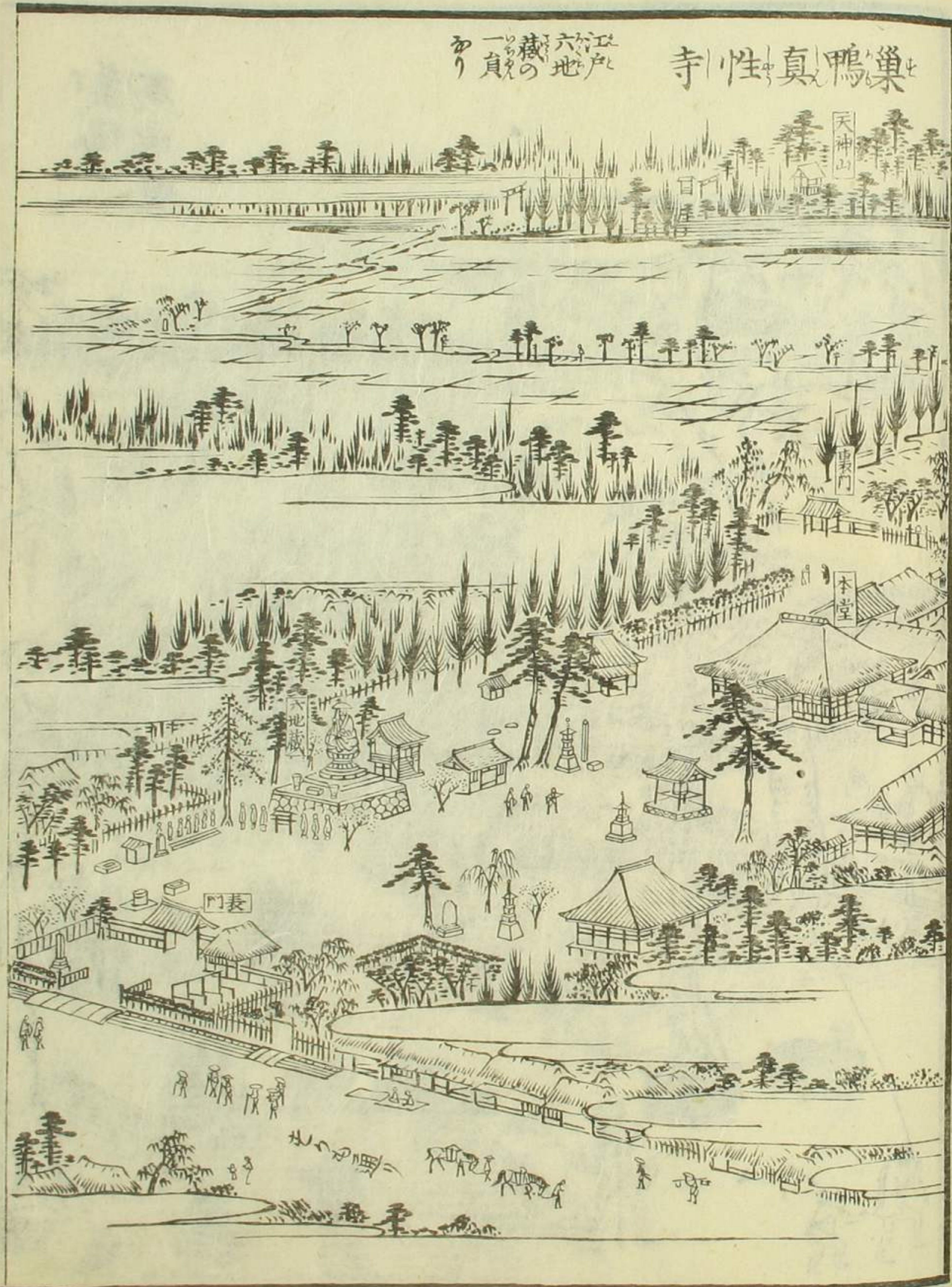


猫狸橋



菊理姫泉道守者等三座あり一宮記曰下社ハ伊弉册尊相傳當社ハ  
 元和三年の勸清なりといへる當社舊白山沙殿の地ありて氷川  
 明神女體宮と共に並びてありといへる彼地ハ沙殿宮作せし  
 一頃今の地へ遷座ありしと云神社畧記云此神旧白山沙殿の地ハ鎮座ありて  
其原始尤久一神本ハ松繫松と云無比の天樹あり  
 詳あり文舞宮も今傳通院の内あり所の弁木天懸祭禮ハ九月二十一日なり釣樟此  
 番本と依りて製する所の弓箭を以て此地の土産とせし  
 御薬園 同所の西南ありて所謂白山沙殿の旧地是なり古々  
 此地ハ白山氷川女躰等の三神の宮居ありしとなり白山推現の  
神本本は此  
 敬の松も此地ハ此邊を初音里と字を里彦ハ江戸の時鳥ハ此地  
 存せりといふより發声も故より名つくと云  
 療病院 同所の西ハ並ぶ養生所と号けり則古の療病院に  
 比せしれ鯨寡孤獨貧窮無頼の病人を救はせりむむがた免  
 享保年間 官府より是を建せしめと寄宿を許し藥餌を

江六蔵一の地 寺性真鴨巢



賜ふ所仁惠實は百世不冠たりといふべし

氷川明神社 同所西北の方五町をかりふあり相傳ふ 孝明天皇の

御宇に鎮座なりと云く祭神武州大宮の氷川明神に同一昔ハ

白山帝殿跡の地ありし白山権現と共に地を替とせらるし

あり當社ハ此地に遷る極樂水宗慶寺の持中として祭祀ハ九月

十日なり

武藏國風土記曰 足立郡巢鴨郷氷川神社觀松彦香殖稻

天皇御宇三年戊辰所祭素盞鳴尊大己貴命奇稻田比咩

合三座也云云

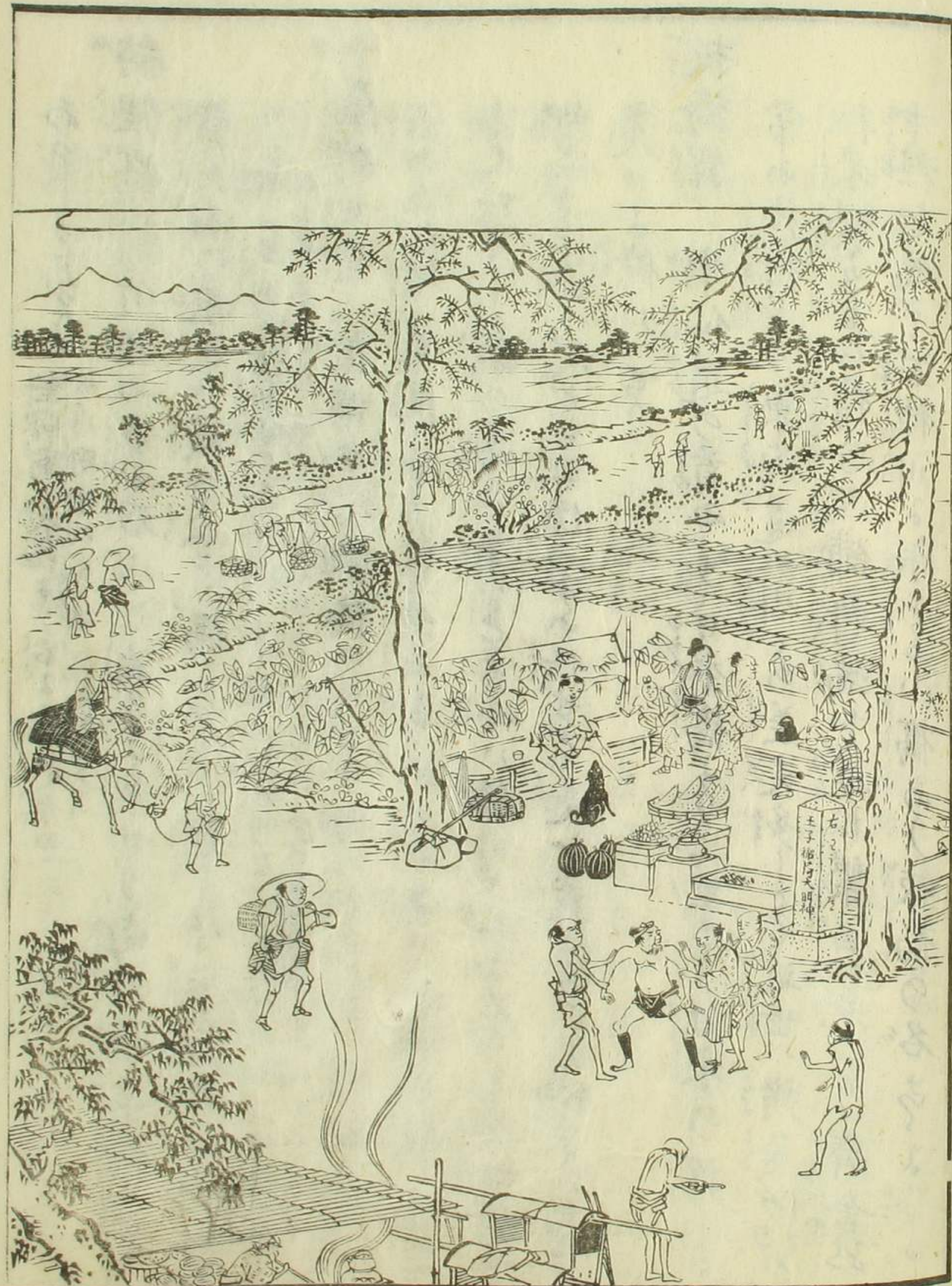
按此巢鴨の地昔ハ足立郡に屬せし似たり今ハ豊島郡の内に入たり

當社ハ千有餘年を経る所の宮社ゆして八幡太郎義家公奥

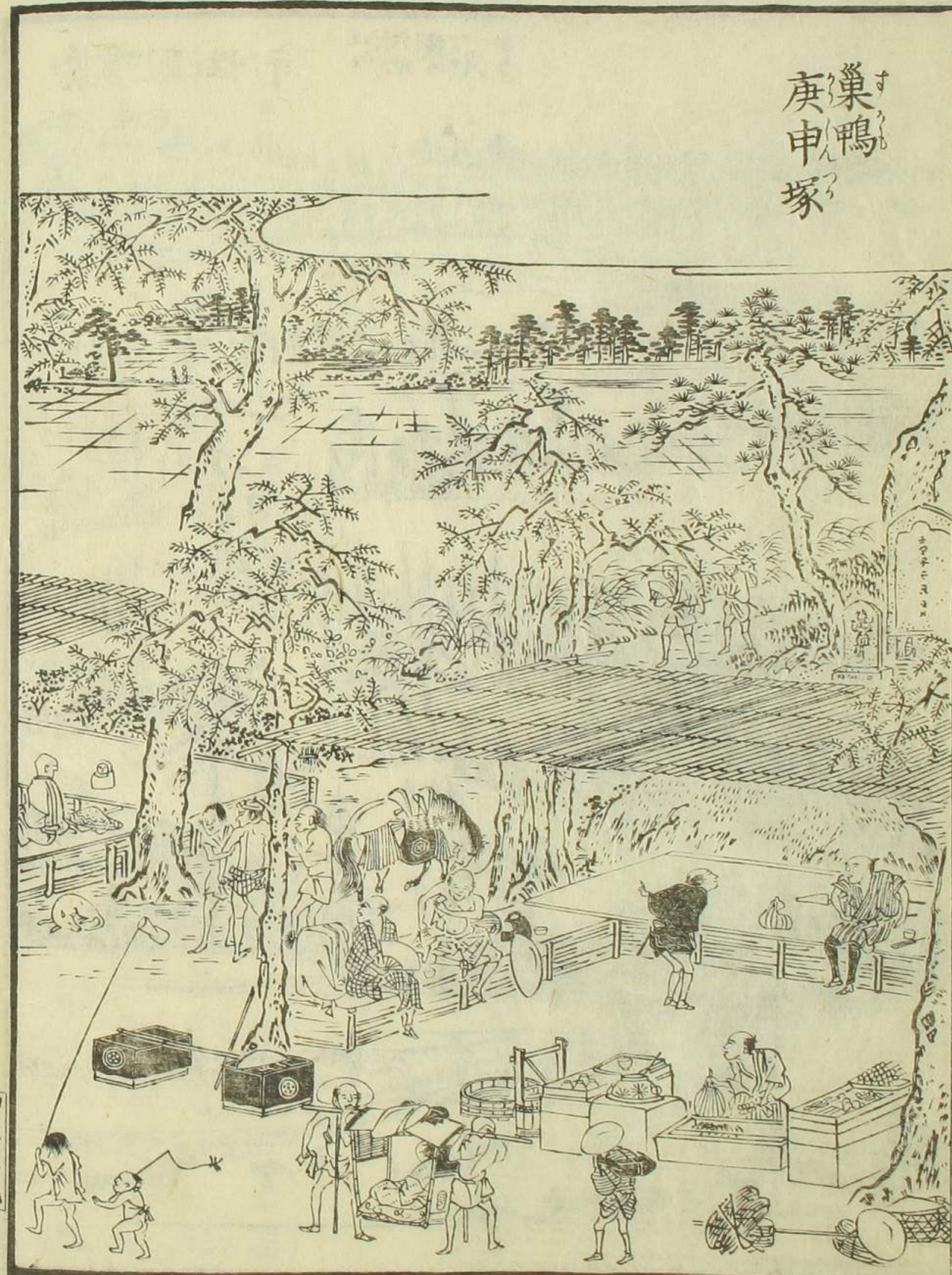
州下向の時當社に叅籠ありしと云傳ふ中古荒廢し其形

をわし残しと傳通院の開山了譽上人此地の幽邃を愛し

庵を結んで聖岡庵と号け此地に閑居ありし頃宮居を重修



庚申  
鴨塚  
巢



あらしとあり 聖明庵の本社より右ありて今ハ

猫狸橋 同所西の方小石川の流も架せり南向亭茶話云く

昔大木の根木の根を以て橋よかへて架したる故に此名ありと云

十羅刹女堂 巢鴨本村藤橋の川より南の方ありて別當ハ真言

宗中へ福蔵院と号し里老云昔此地ハ鬼子母神の像も安置

してのりし賊の爲に奪つと云今ハ雜司ヶ谷ありて其説是非

知るべしと云傳ふるに任せと是を載するの神ハ九月

十八日ハ修行せり

板橋驛 中仙道の首より日本橋より二里あり往来の驛客

常ハ絡繹と東海道ハ川の差支多くと近世ハ諸侯を初め

往来繁々も傳舎酒舗軒端を連ね繁昌の地と驛舎は

中程を流る石神川は架する小橋あり板橋の名ありと發る

板橋ハ上下に分てり此地を下板橋と稱し上板橋ハ練馬

と稱し此地を板橋と唱ふる義経記より小田原北条家の所領役帳に

板橋又ハ板橋と唱ふる義経記より小田原北条家の所領役帳に

板橋原 都々上下板橋と稱する地を指て云ある一此地と云

廣々たる平原なり中古治乱記ハ貞治六年丁未四月二十六日

鎌倉管領足利左馬頭基氏逝去を其弊に乗し芳賀入道

禪可子息伊賀守高貞同嫡子八郎高政等鎌倉を押寄ん

と一應安元年戊申正月五百餘騎を引卒し越後國を進

發あると同日武州板橋原に打つる此由鎌倉へ聞えしが

執吏上杉憲顯其身ハ鎌倉を守護し子息兵庫頭憲將

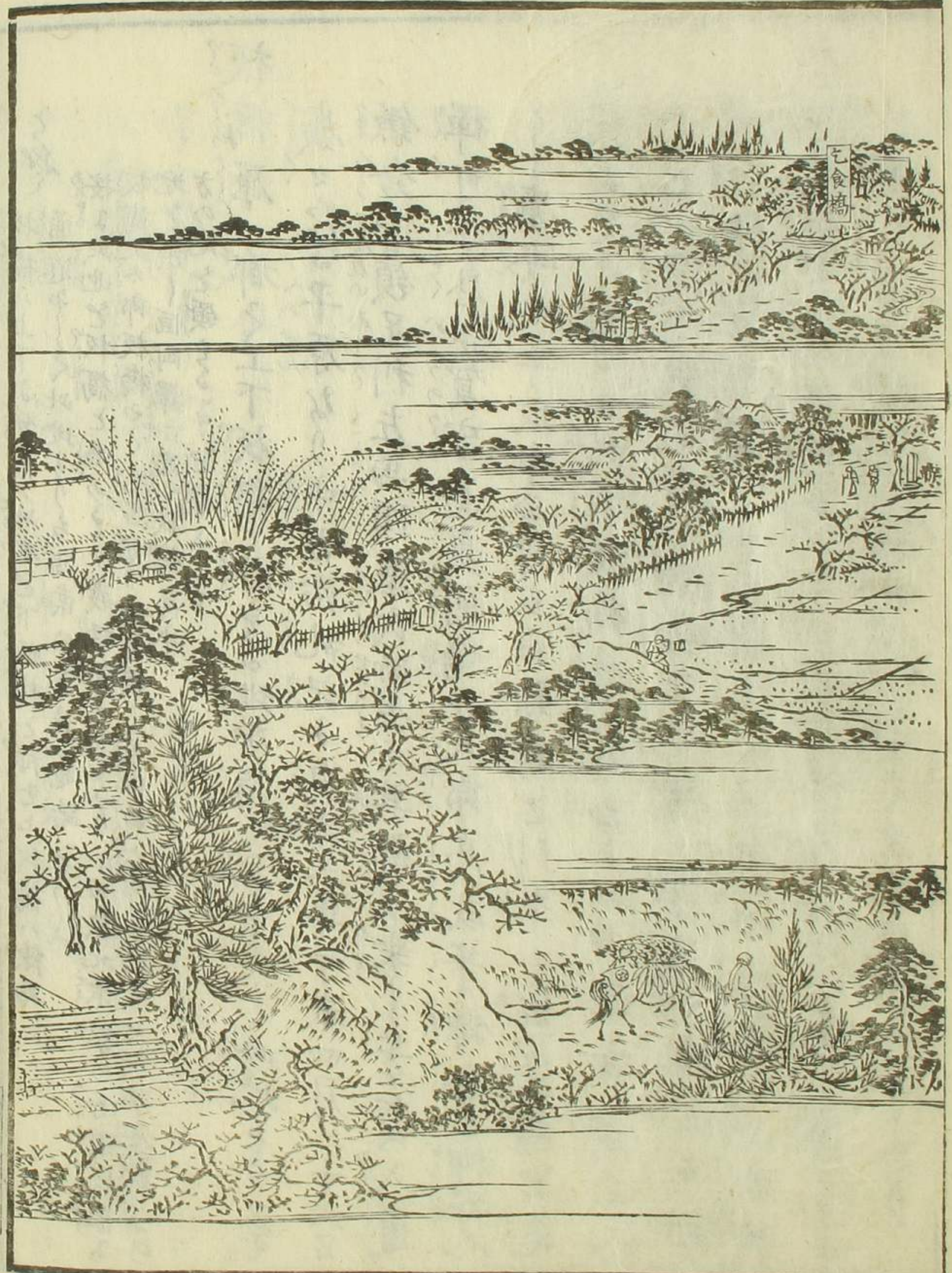
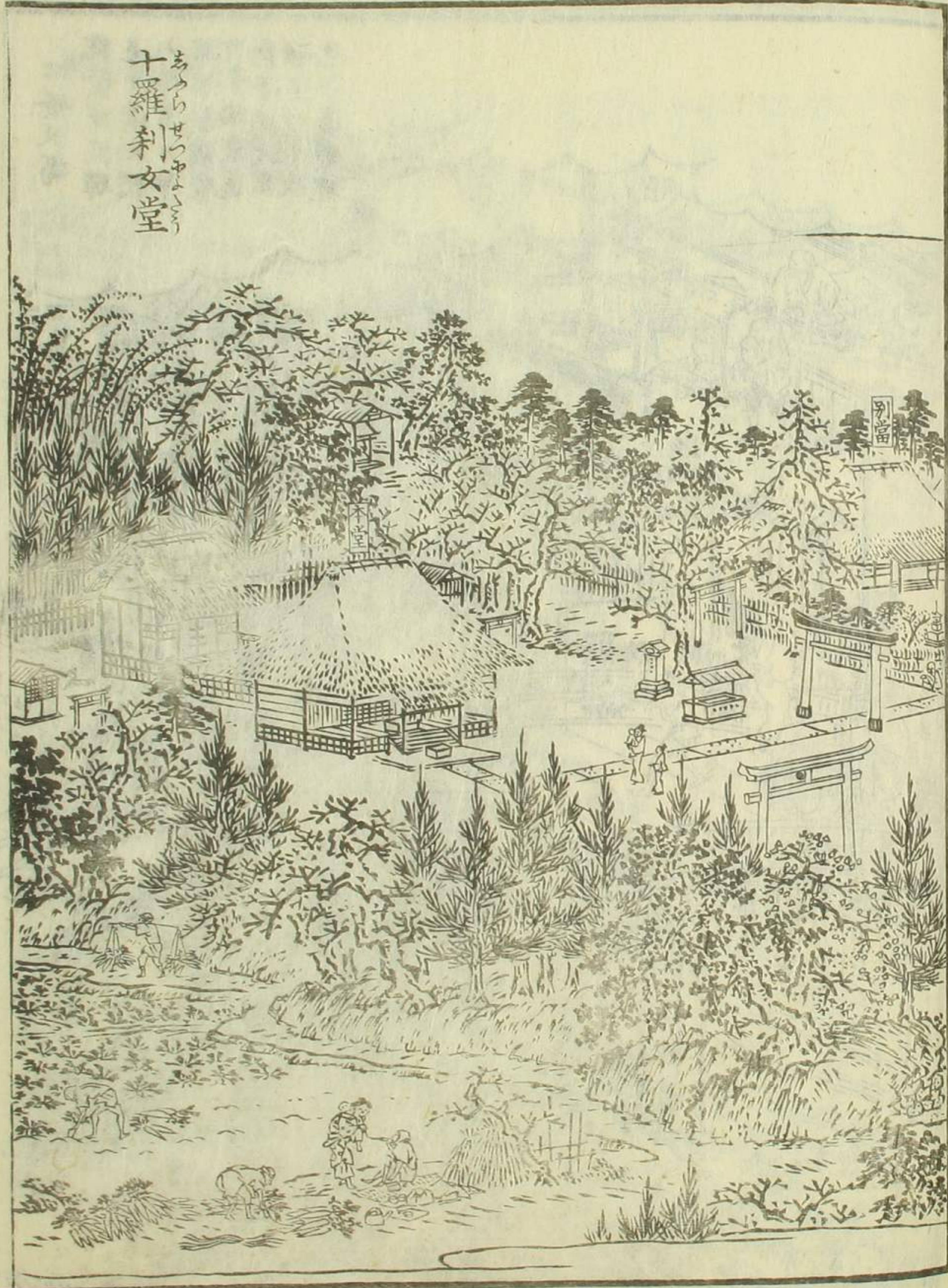
同兵部少輔能憲等を大将とす千葉介直胤小山朝明

以下其勢二千餘騎是も其日武州洲賀茂といふ所陣とす

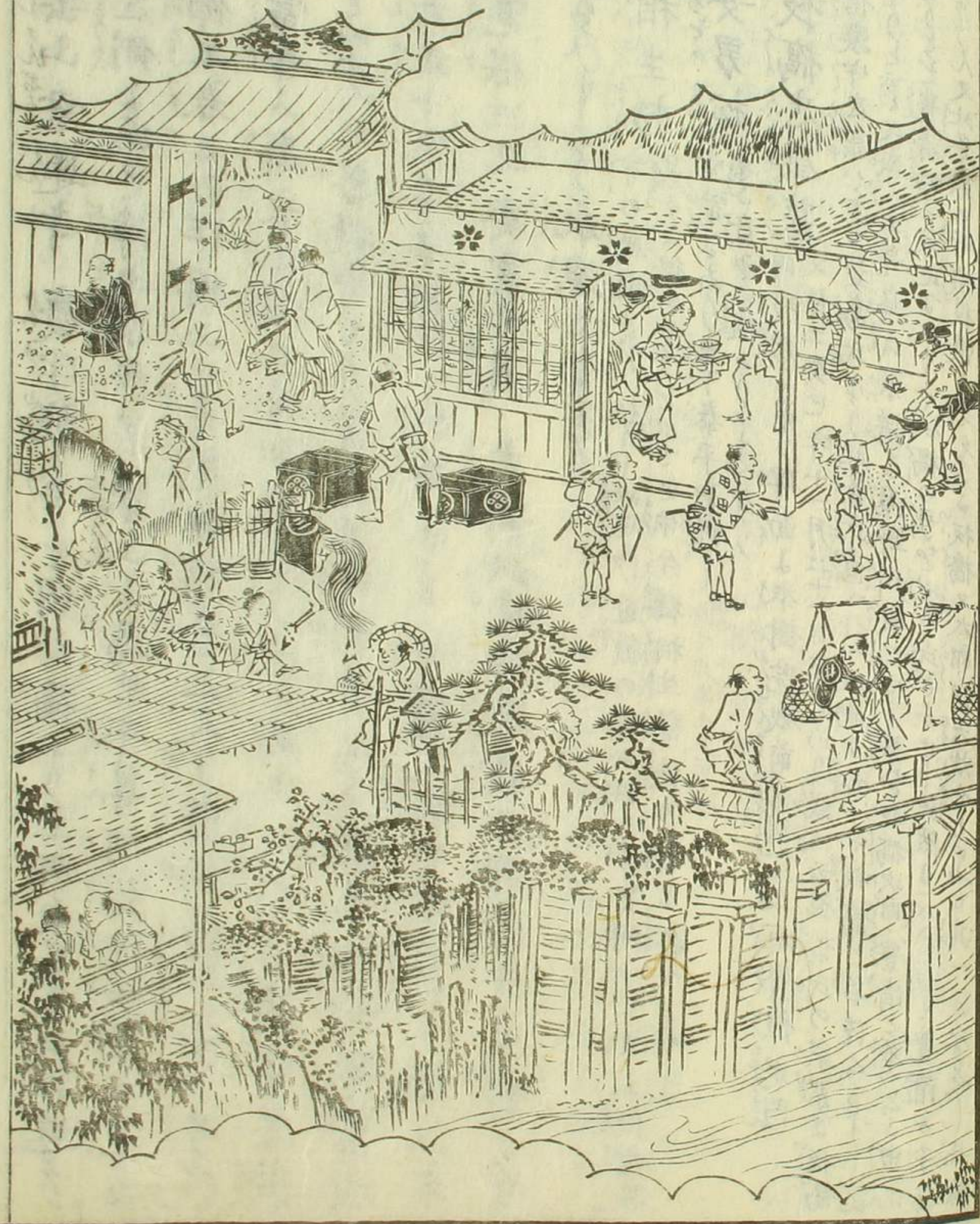
千葉小山が手勢五百餘騎を引分る王子の森に置とあり



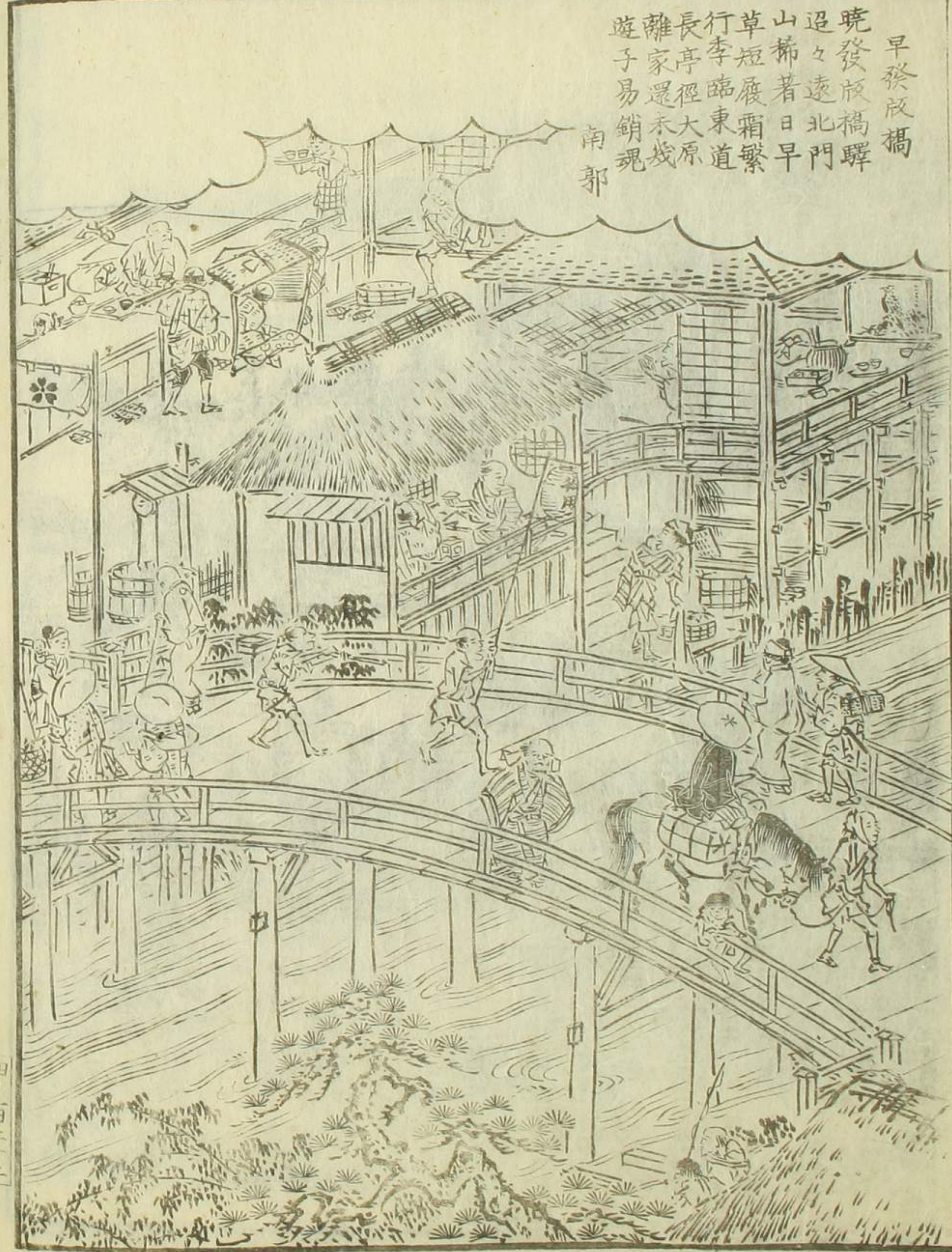
十羅刹女堂  
あつりせつにょどう



板橋の驛



早發版橋  
曉發版橋驛  
迢々遠北門  
山梯著日早  
草短履霜繁  
行李臨東道  
長亭徑大原  
離家還未幾  
遊子易銷魂  
南郭



孤雲山乘蓮寺 慶學院と号を同所橋より三町あまり 此方道より

左側より浄土宗の縁山は属を本尊阿弥陀如来の像を

佛工春日の作開山ハ英蓮社信譽上人了賢無的和尚と号に

當寺ハ應永年間の草創中此地の卿主板橋信濃守忠康

といふ人の菩提寺なり當寺五世明譽上人龍宅和尚現住の頃

天正十九年辛卯 御當家より守護不入の朱章を賜ふ又

寛保三年癸亥の夏 大樹此辺涉遊獵の時當寺に憩せ

あひより永規となすなり

相生杉 寺の後園ありむく 此辺涉遊獵の頃此杉の号を向らせり住僧答

女男松 堂前あり天下泰平を祝

板橋忠康墓 同境内あり碑面よ本樹院殿前信州空山有賢禪定門

信濃守忠康ハ豊島氏なり北条氏直仕此地住板橋氏の家系は板橋

せりと云又或人云豊島氏系譜は滝野川長門守弟を板橋次郎豊清と名つる由記

なり又北条家の所領帳見え板橋又太郎同大炊介といふ其一族なる一其餘

小田原記ハ大永四年三月十三日北条氏綱と上杉朝興と合戦の時朝興板橋をきり  
引退く此時板橋の某兄以下言死まとも同ト氏族の人あり又同書ハ天正元年十月  
下旬下總國宿の城主茶田中務大輔佐竹一味ハ此の地を企む小田原より氏政  
出陣し関宿へ取詰合戦あり頃小田原方武州の石濱の城主千葉次郎城方の物頭菊間  
國書といふ者組て落葉次郎討死を此時石濱の千葉家女子がかり此の地の下知  
宮内以捕支配あり彼与カ衆ハ板橋肥後守板橋の城主なり  
松戸越前守ハ赤塚の城主なり此肥後守又同ト氏族の人あり

木下稻荷祠 同一驛の端を街道より左の小路を入る智清寺と

云浄家の寺は安置元和三年丁巳當寺中興心蓮社法譽上人

輪宗和尚感得せられし神像なりと云相傳ふ豊臣秀吉公

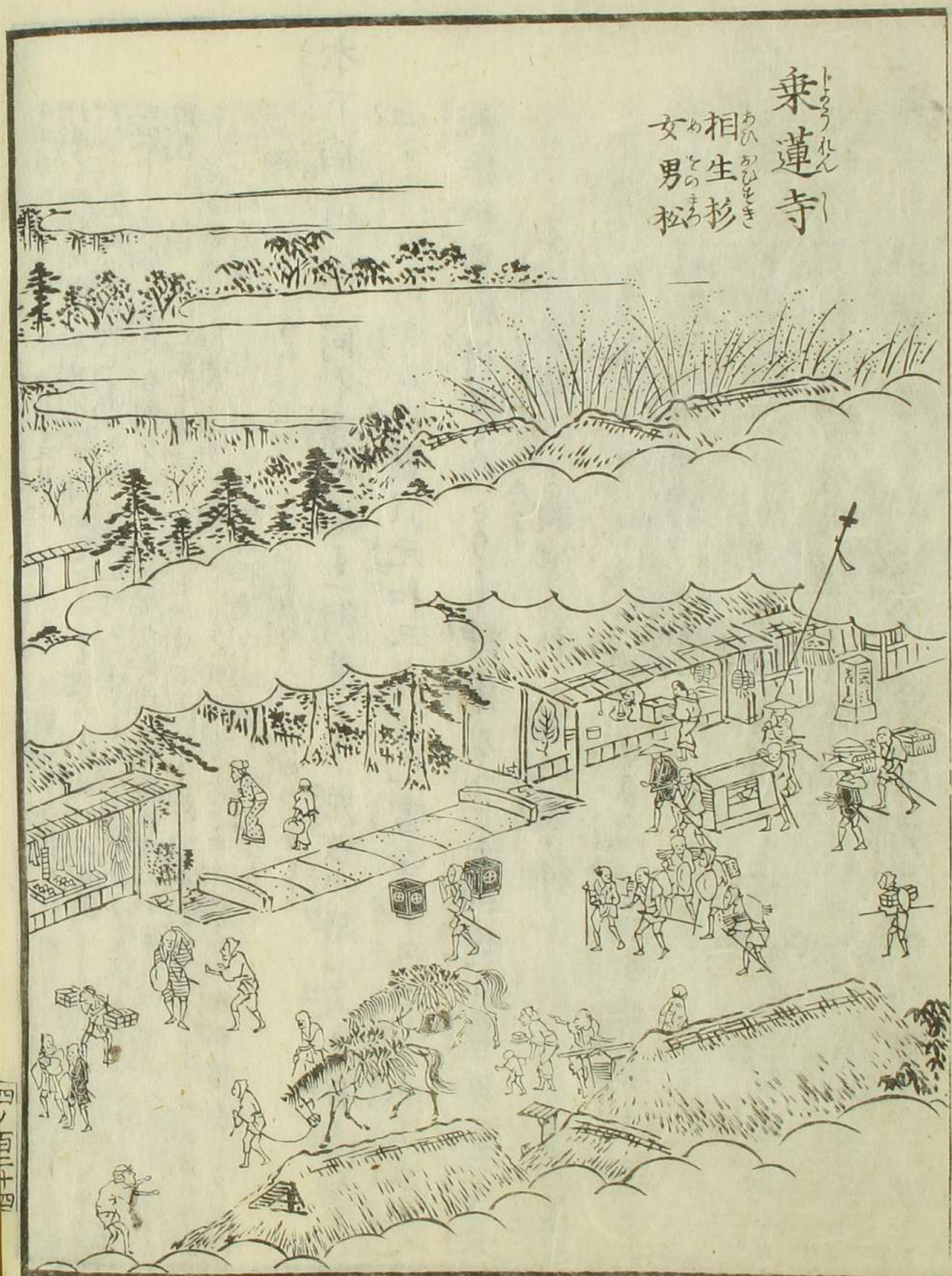
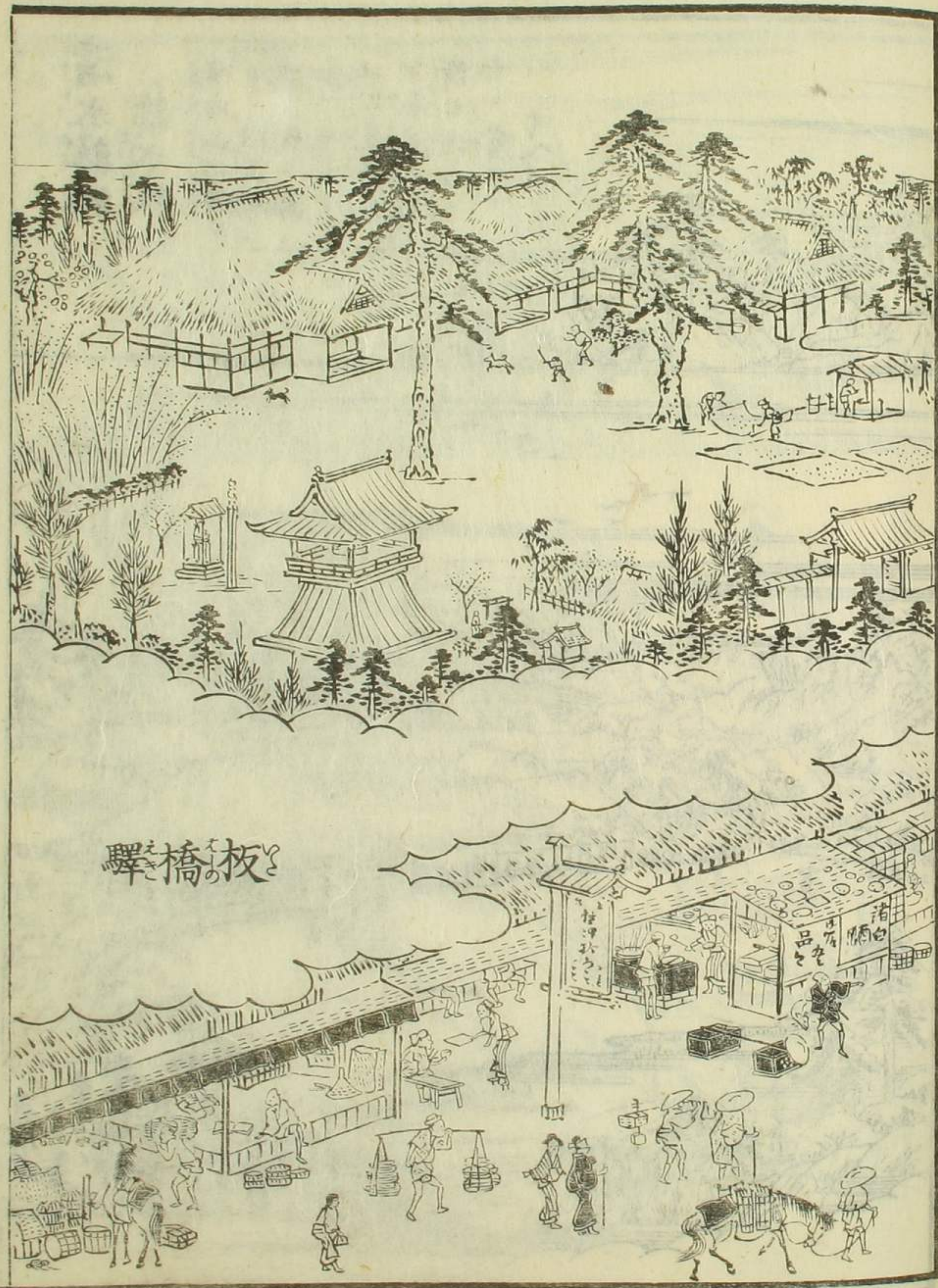
のまご木下藤吉郎と称せられし項此尊神を崇信しあひ既ハ

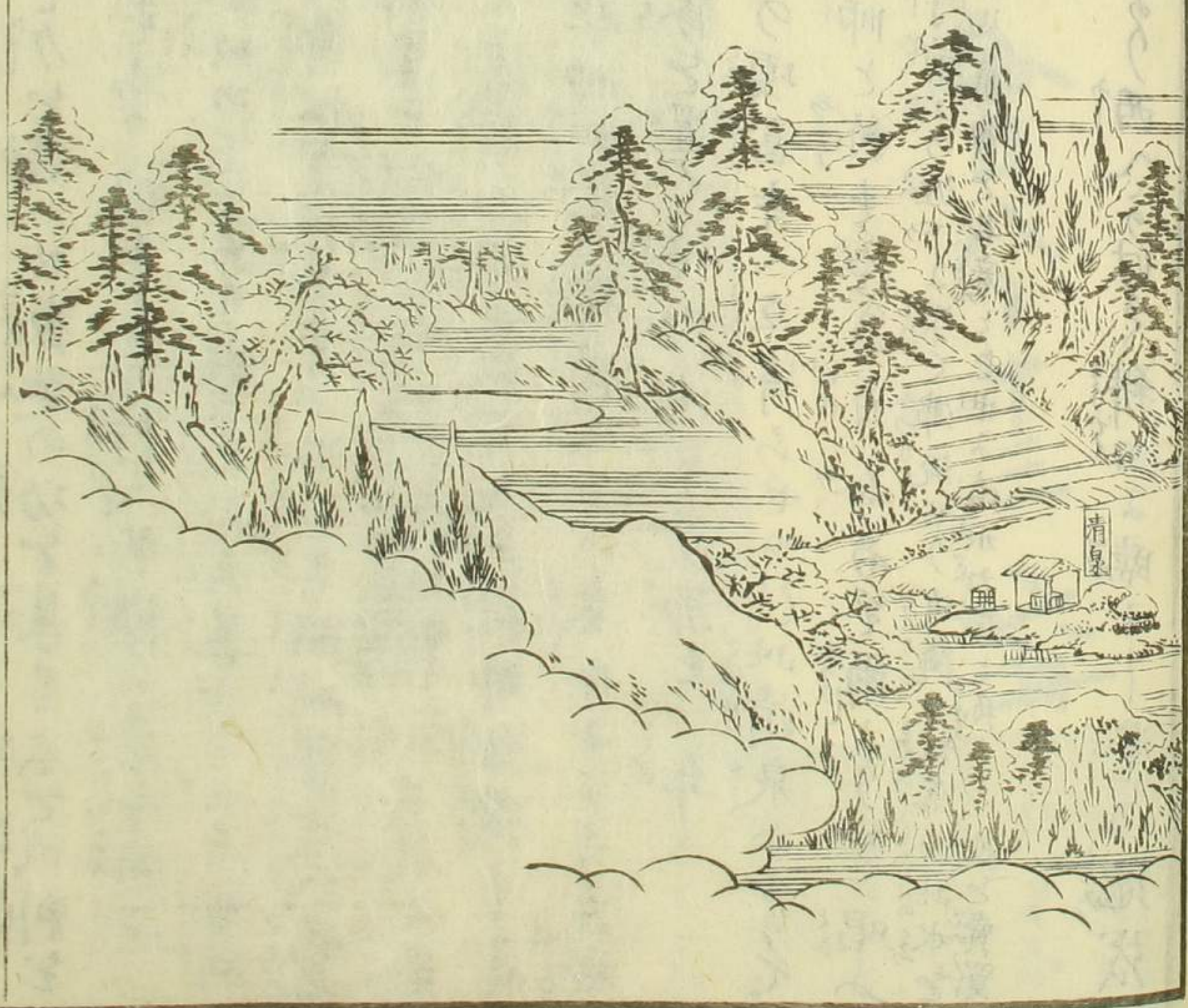
して天下の武将とありあめを以て世は木下出世稻荷と称し

清水坂 志村あり世は地藏阪とも号く舊名ハ隱岐殿坂也

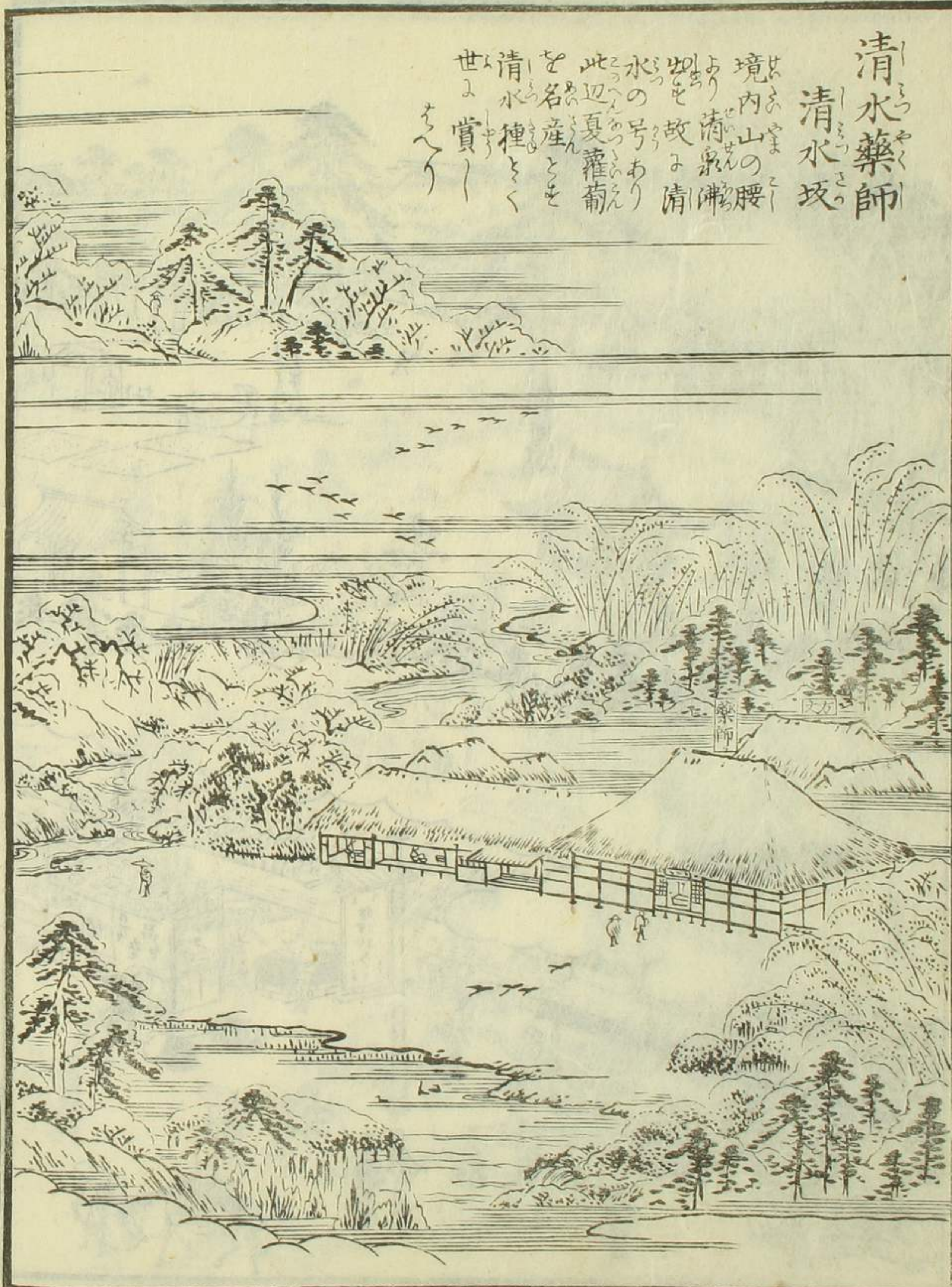
呼べし昔隱岐守何某開る故ありといふ此の熊野宮の此地嶮

岨中て往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺に住守





清水薬師  
 清水坂  
 境内山の腰  
 あり清泉の  
 池を故み清  
 水の号あり  
 此辺夏蘿蔔  
 を名産とせ  
 清水種とく  
 世に賞し  
 たり



直心和尚僧西岸と力を戮いせ勸進の功を慕ふ本を伐荆を  
刈く石を疊く階とをあつひつしより行人苦難の患を道す

清水薬師如来 清水坂の下よりあり醫王山大善寺と号し曹洞

派の禪林やと芝の青松寺に属せり永正年間此地の農民新見

善左衛門とよる人閑基を 善左衛門法名を清雲大善庵主と号し其後元龜

年間に至り青松寺の雲崗和尚の法孫在天禪師住職しとく

法燈を掲ぐ本尊薬師如来ハ聖徳太子の真作中とく左右

股壇は十二神将の像を置く境内清泉湧沸を一年

大樹此地は遊獵の項當寺へ立寄りせぬ此清泉ふありて

此本尊を清水薬師と称せざる旨命あり雨ありかく唱ふ

るしとく 此清泉ハ寺前山の涯下は悉て沸流せり此隣の村落皆此水を

千葉家城趾 同所より西へうけく耕田は臨し一臺の地也

指くいへる今も空塹の如き形所くは残る

此地の南の方を中臺といひ又西の方一里計は小

西臺と云地ありて何れも城營の舊跡たりといふ

熊野権現宮 同所清水坂の上より三町をかり西の方涯續たり

社の後ハ涯に臨し松杉等の老樹鬱蒼たり就中樟の大樹ハ

周圍三圍は餘れも當社ハ往昔千葉氏城内の鎮守たりといふ

今ハ志村の産土神とす 土人此地を隠岐殿やしきと字を今奥の

院と称する地は石の小祠あり十四五年前此地を穿ちて古鏡

二面と刀一振とを得たりと稱しされど其故をあらざれば崇

あつるを恐る元の如く埋蔵したる事あり 寛政六年志村の里正

補し華表を石や又上の宮の地は 別當ハ新義の真言宗中々三次山

六百三十五株の杉を栽り 延命寺と号し中野法仙寺は属せり

延命寺の鎮守を三次権現と稱し往昔 此地の城主千葉隠岐守の家臣三次某の

霊を鎮るといひ傳へ

一夜塚 同所西南の畑の中より此地を前野と号し相傳ふ小田原  
 北条家の時千葉家の城を攻落さんとて寄るの軍兵此地に  
 於て一夜の間は炮坐を築き城へ向けく此塚上より大発炮を  
 放ち竟小城兵を焼討しせしむ

西臺山圓福寺 熊野権現宮より二丁をかり西南の方西臺村より  
 曹洞派の禪刹なり芝愛宕下の青松寺は属を本尊ハ拈華法  
 釋迦如來座像一尺四五寸あり行基菩薩の作なり或は  
 佛首をかり行基の作る所なり全躰ハ後人の作なりとも又り太田  
 道灌入道の開創なり越生龍隱寺第五世雲岡俊徳和尚開山  
 たり雲岡開基も所の當寺ハ旧河越にあり頃ハ龍隱寺に末寺あり  
 今寺領二十石を附せる當寺ハ永正年間の古文書あり其文  
 左のごとく

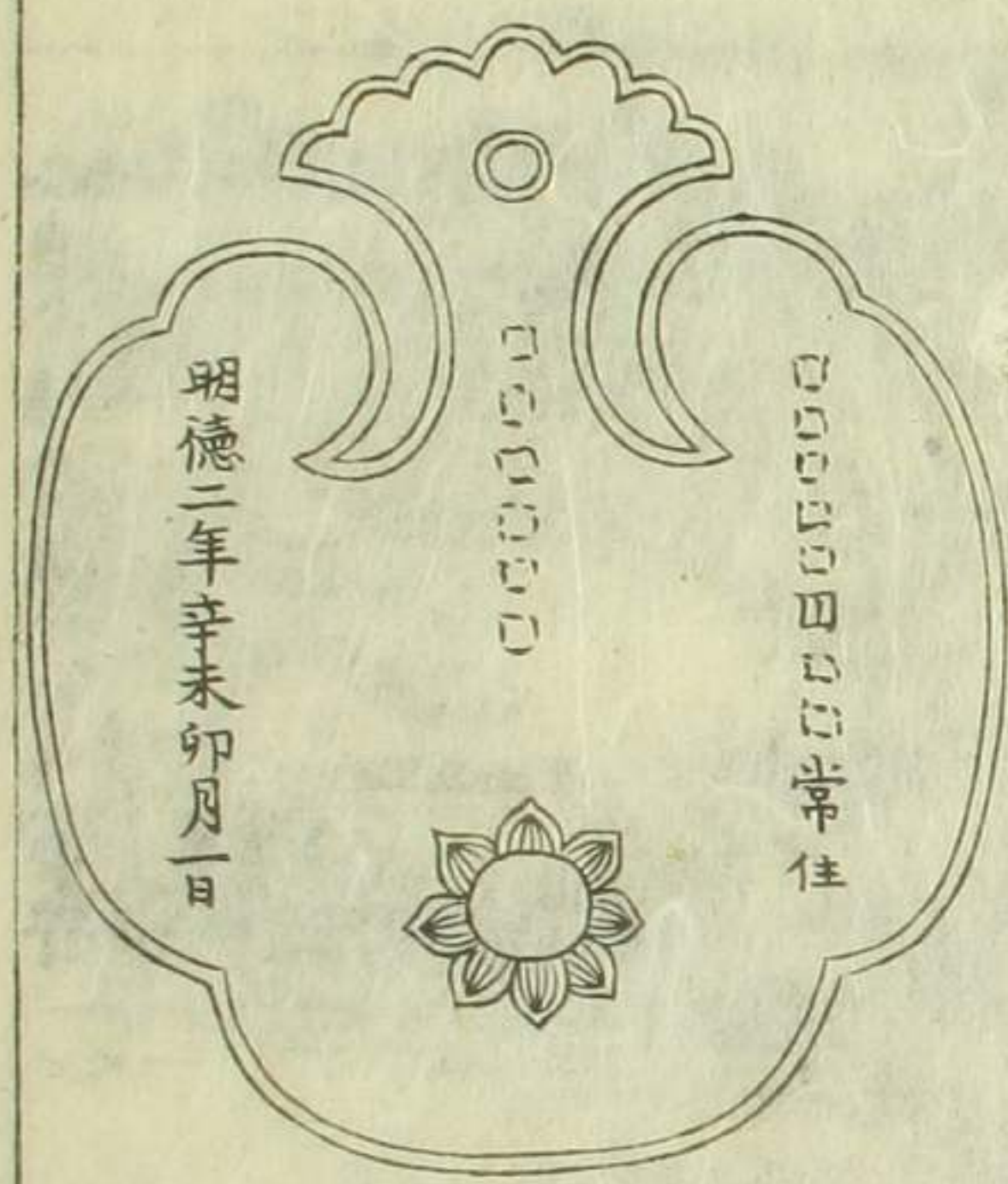
志村西代に内小系三郎が原後再面し留る

為宗安公次福寺に永代奇進中作又以前  
 後勅解中時寺に面し留一枚書を中ハ  
 貞貞一絡し如作為後日奇進中状也別

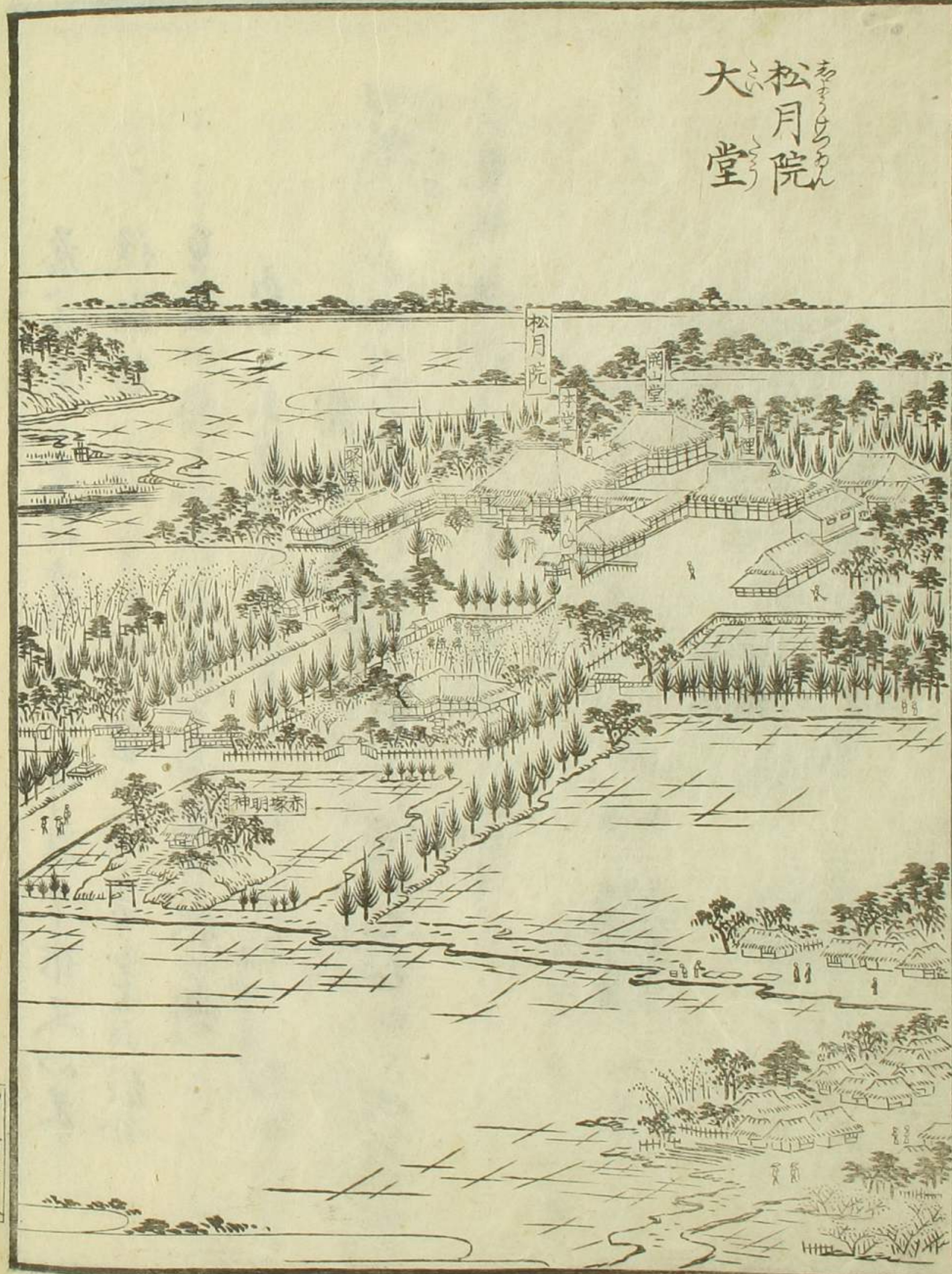
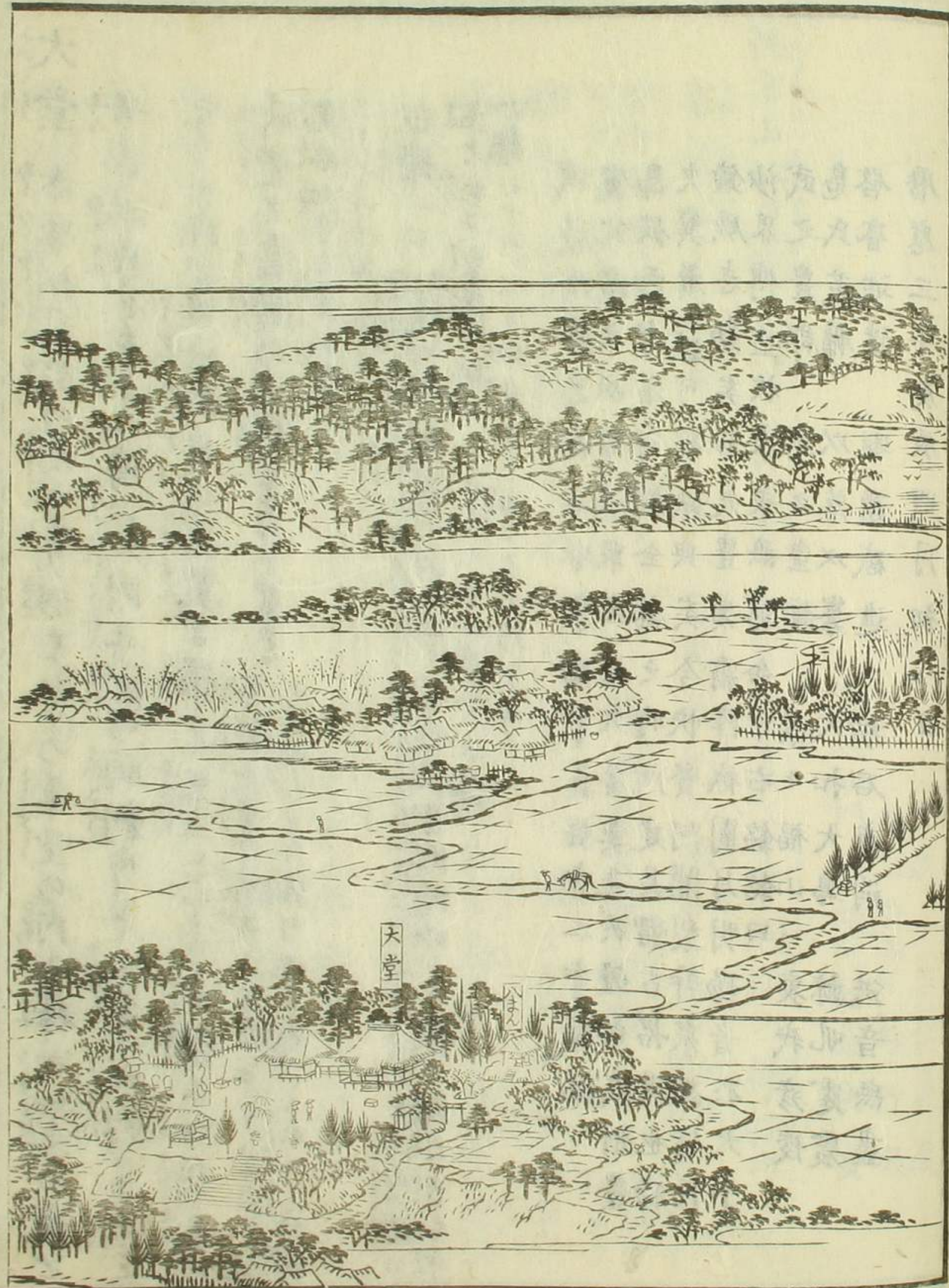
永正十年癸酉十二月十三日  
 由田彦六  
 老母

圓福寺

往僧志村城山の辺農民の地ハ小系面と字する田畠ありハ此多田氏の  
 遺趾なりと  
 古雲版庫裡に掛るあり其形左の如く



長一尺三寸五分  
 中一尺二寸五分





大堂

赤塚松月院の南あり形をかりの草堂の内小釋迦如来の像を

安く本尊とて土人傳云大同年間の開創より上古八大刹なりと

なりされど後世教度の兵燹に罹り焦土となりて僅小此釋尊の

浄堂と舊鐘の残存なりと

真福西寺の舊跡と

古鐘一口 堂前あり長九尺五寸をかり口の二尺二寸あり

世壽七十云々以上鐵倉志より

武蔵州豊島郡赤塚泉福寺真福寺二寺鐘銘

驚沈潜之幽蟄破衆生之大夢莫先於鐘也武州豊

島彼西寺者前朝全盛之時所建具體古招提也獨

欠箕蕪之器可謂缺典矣今快賢阿闍梨幹衆緣鑄巨

鐘厥志勤矣若夫豐嶺霜降祇園月明揚音於大千

沙界傳蓋於未之重鎮命崇右福山曰哀我彦俊

武之豐郡州以落以饗劫石有消洪音無盡

息氏范瀟遐通感進大和鳴鯨吼霆震

啓昏迪迷遐通感進劫石有消洪音無盡

曆應三年庚辰四月初八日

筆執 三位親慶  
大工平次五郎行次  
勸進沙門治部阿闍梨快賢

萬吉山松月院

同所北の方通りより右あり曹洞派の禪林あり

常會地なり當寺八千葉介自秀開創の佛刹といひ

當寺卵塔の中は文明の古碑あり然るに開山と曇榮和尚と号し

文明より前草創あり寺院あり一佛殿の本尊ハ釋尊中々作者と云ふは脇士ハ文殊普賢あり

堂前左右ハ木犀の大樹あり禪堂衆寮方丈庫裡ハ左右ハ並ハ

魏然と當寺ハ自秀の靈牌と稱するものあり松月院殿

南州玄參大禪定門千葉介自秀永正三年丙寅六月二十三日

とあり又其室の靈牌といふもの龍興院殿了室覺公大妙延德

元年己酉九月十五日とあり墳墓ハ卵塔の中大松樹の下あり

古き五輪の石塔三基並び建ち中間ありもの尤古く蘇

苔滑なりと右ありもの自秀の名ありと後世造を儲たりと

地はゆるくたわあるところを則其室は墳墓あり

赤塚明神祠 松月院の門前より所の一堆の塚上は櫛二三株あり

其下は小祠を宮と白山権現を勧請を土人云此塚の樹木等をも

觸るるやある時ハ必崇ありとく尤恐怖せり按上世高貴の人を葬

したる荒陵なり

武蔵國風土記殘編曰 荒墓郷 荒墓神社

武蔵國 豊島郡 大化二年丙午所祭後田彦也 神貢五十束 三字田云云

按赤塚ハ荒墓の訛ありん 欽東鑑ハ赤塚左近同蔵人資茂といふ

十羅刹女宮 同所北の方より真言宗常福寺別當あり

田遊祭 毎歳正月十三日此地の農民當社は詣りて後常福寺に集會し夜ハ

此祭事ハ初飾を掲げ九三斗ありありあり夫より搗所は餅を以て教品の農具を  
造る物あるものを陸英といふ本を以て製し牛馬の鞍に至るまで皆残らば造り終  
の後其具をうぐさ苗代より始り苗を挿し至り實熟し刈取に至る迄の間  
耕しうぐさ等をもく農業者はわづらひハ一ツとて浅く刈り其字はを  
尤鄙俗のありりと以て古失はばと愛せし是を勤者は悉く名あり  
ヨナソウイナソウと稱するを老人の形をなせり安女といふハ婦人の假面なり

太郎次といふを後田彦の假面をかきり尺を節次節と号するを何れも鎌を  
携へてありヨ子ホウと云ハ藁をこき製する婦人の形なり并當をこきせり  
其帯は引出し飲食せり未は至り九万町の稲一万町ハ鎮守へもぬせ去年の稲を  
截し積今年の稲ハ庭に積めといふを終りとす

按九万町の稲一万町ハ鎮守へもぬせといふは古の井田の法よりあるなりん  
今當國近在の農民の里談はわづらひと云ふあり其故を問は耕田の中尤  
中間上この稻を公よせしを唱へんといふも前より井田の遺風なるべき  
死かありぬ文字中井は作らむよく井田の意はわかあり

千葉家古城趾 同所西よりあり岳をのみ土人城山といふ今官林と

なり頂は畑ありされども空塹は形杯其終は残り迂城内城と

覚しし所を殊に今も城壕の形ありく水を湛へしと鎌倉大

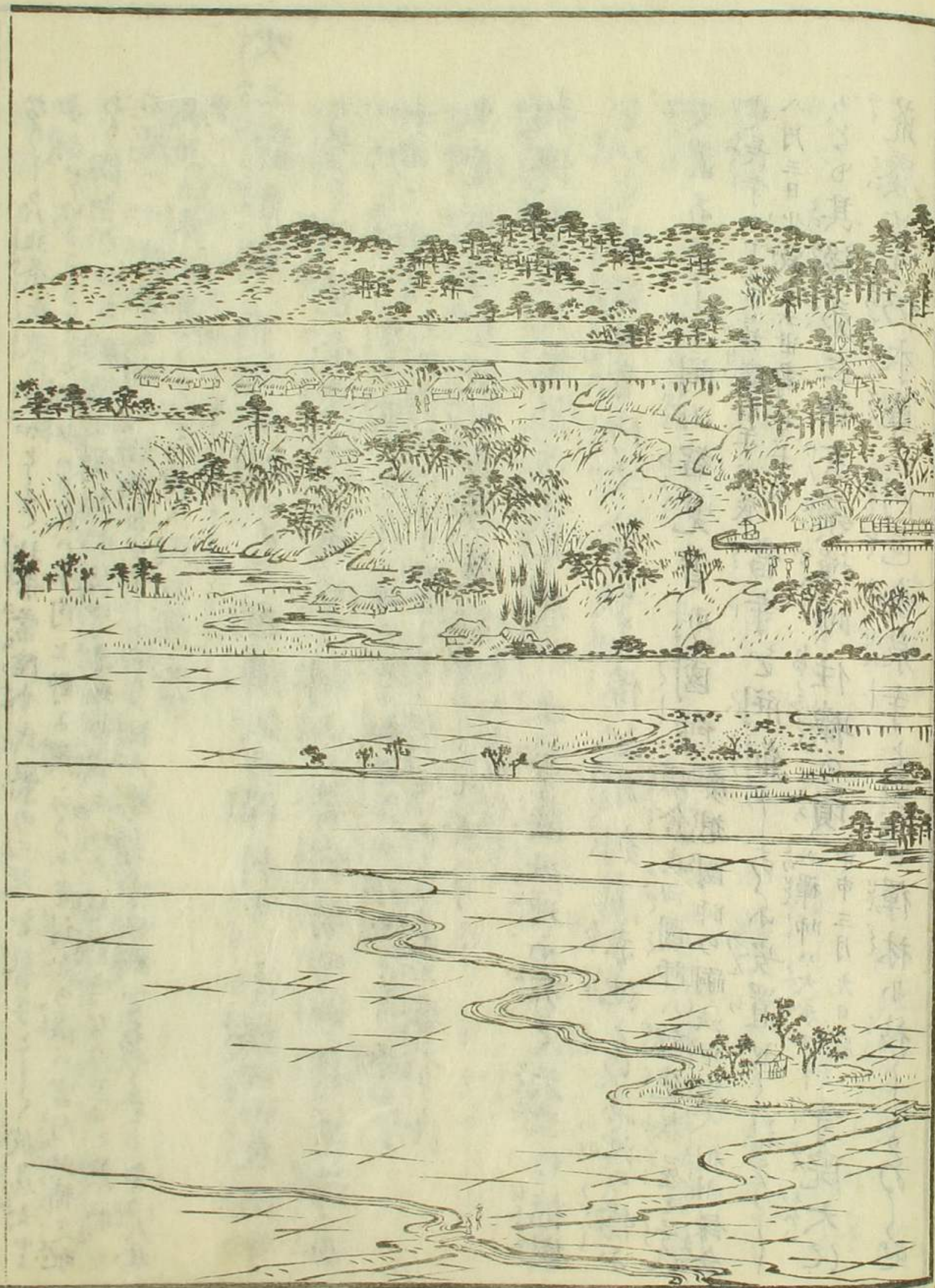
草紙小康正二年正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城

し實胤ハ武州石濱へ落行自胤ハ同く赤塚へ移るとあれバ

此所を自胤の居城なる必せり按松月院の開基とす所

所の自胤も此自胤の氏族あり

按松月院 鐘施財の人名の中は當邑春日氏の人多し土人云く春日氏ハ  
千葉家の末裔なりとく殊に此地は其氏族多く今春日平右衛門といふ  
人の家は古文書ありといふ又田原記ハ天正元年十月下旬下總関宿戦ひの  
時武州石濱の城主千葉次郎諱死を此時石濱の千葉家女子をとり



なりし北条氏政の下知とて北条常陸介氏繁の三男を養子とし、彼息女と  
妻合せしむるも幼少なりし本内上野に預けし上野守の孫に宮内少輔支那  
あり彼与かおむ枝橋の城主肥後守赤塚の城主松戸越前守なりと云、然時を  
石濱の千葉家の城主幼少ありしゆり松戸越前守此城をあらうとす、か、ん、次  
御弟五卷平塚か、び、弟六卷石濱及び  
弟七卷市川の弟下等とありせしむる

吹上觀音堂

下新座村あり臨濟派の禪刹なり、福田山東明寺

と号を同邑金泉寺に属せり、開山ハ普明國師中興、淨西

和尚と稱す、當寺寛文十二年の鐘の銘に勸進普明淨西とあり縁起は

本堂本尊聖觀世音菩薩立像ハ長八寸行基大士の作なり

相傳聖武天皇於天平年間行基菩薩此地に於て天竺の掠樹

を以て聖觀世音御丈八寸の像を彫刻し赤池とあり池の傍に

安置あり、開山智覺普明國師鎌倉志曰國師ハ妙葩春屋と号し

建長寺五十五世嘉慶二年戊辰此禪師ハ大永四年當寺を開創し甲申三月九日寂寺院大に

荒廢せり仍本尊ハ同邑金泉寺といへる禪林に移しあり

一ヶ元禄年間信州より以門淨西なるも此地に來り、頃

脚痛あり、行歩かむひぐく、金泉寺に止り、あり、夢中

靈感あり、其痛全快し、此本尊の加護なるを、を、

報恩の爲當寺を再興し、又新ハ御丈二尺三寸の尊像を彫刻

し、前の靈像をバ新き佛髀の胎中ハ籠りてあり、

なり、然、往、安永五年丙申十二月十日夜二更の頃觀音堂の

内陣より出火し、火焰盛なり、衆人近寄り、あ、つ、ど、か、き、ハ、既、

火中ハ埋れ、然、小唯左の法と右の法とを焦の、

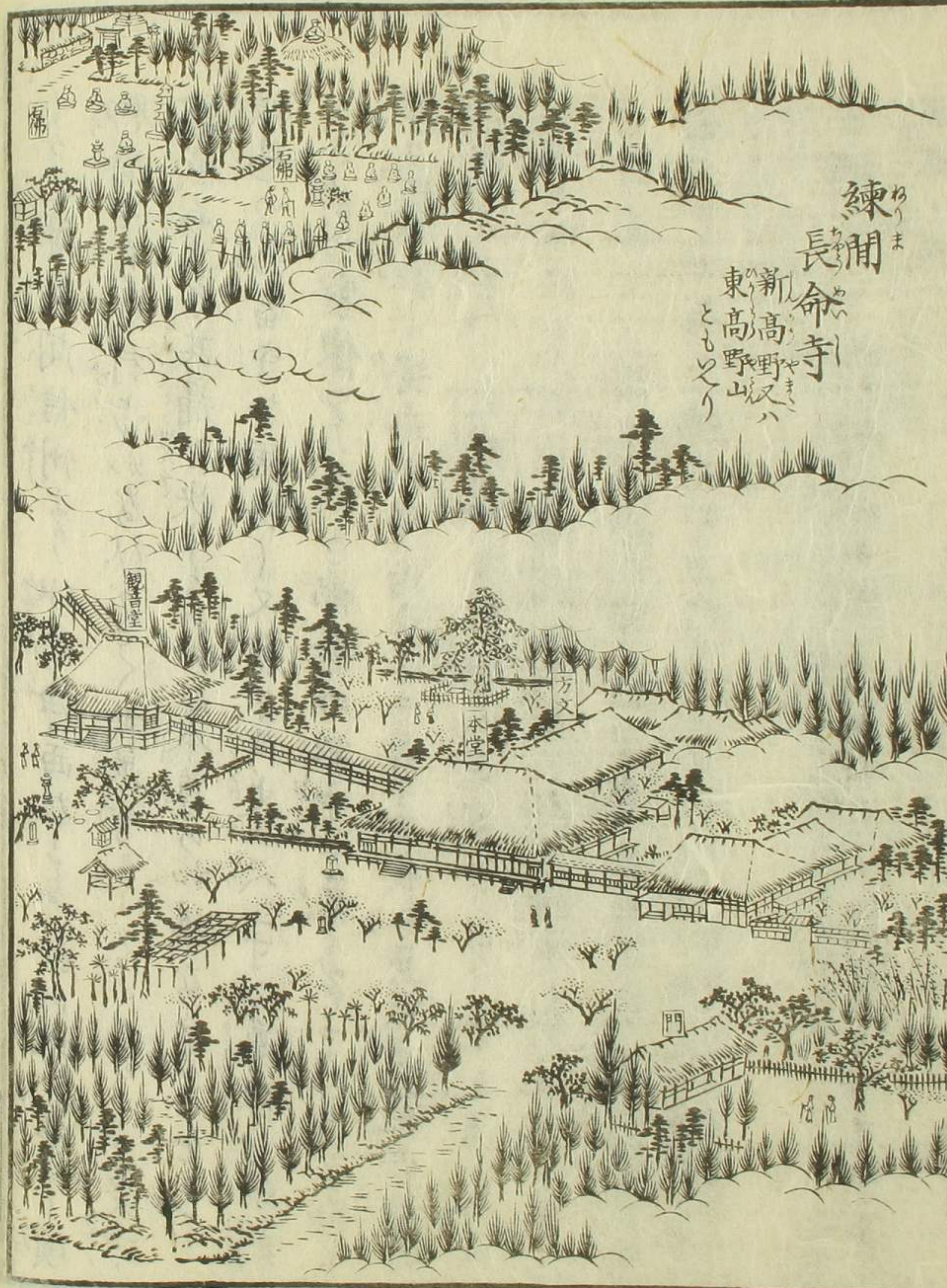
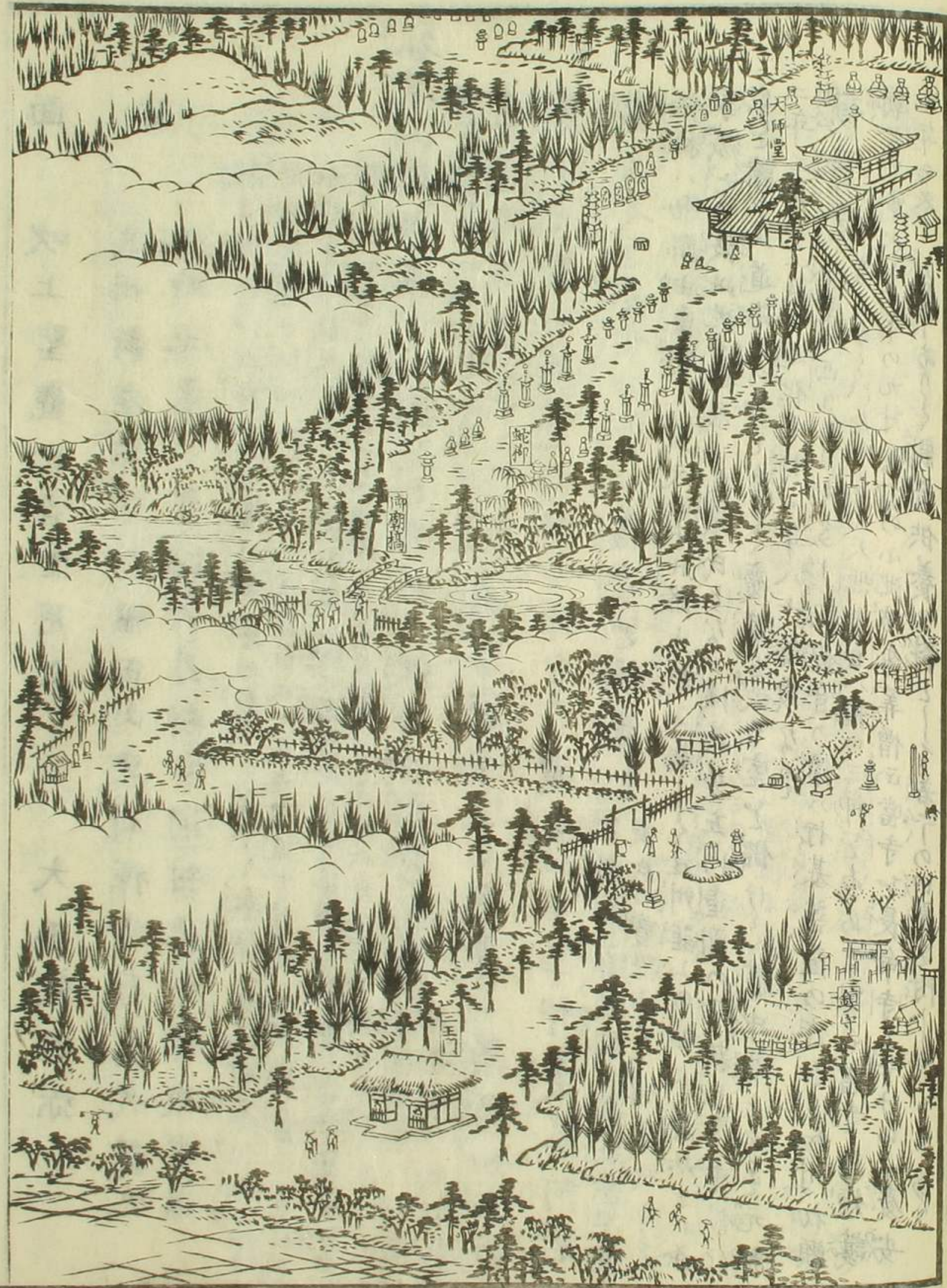
全髀恙なし、同邑ハ伊三郎といへる農氏あり、夜明て灰中を

探し、本尊を得たり、

同十六日に至り、

古鰐一口、渡り六寸五分を、厚サ二寸餘あり、正保三年丙戌十月觀音

其銘曰く、



面 吹上聖觀世音堂用之

大工飯田弥七

背 武州新座郡下村福田山東明禪寺存貞代置之  
于時元龜二年癸六月朔日河村弥二郎殿寄進

谷原山長命密寺妙樂院と号に上練馬谷原邑あり

永祿二年小田原北條家の所領

像と安置を慈覺大師の作なり慶安四年辛卯慶弐阿闍梨としる本食の沙門當寺を閉基也

阿闍梨ハ伊豆國の産北條早雲長氏の曾孫也増島氏も北條

俗稱ハ勘解由重明といふ天心中北條氏規も屬し豆州葦山の城は龍居也北條家滅後此地小退居して農民となつた其弟左内重國の子新七郎重俊に

二年三月十二日遷化を時年八十餘歳なり觀音堂の西あり多面觀音の像ハ行基菩薩の作あり和州初瀬

元年の冬台命あり觀音供養の料として若干の田園を附しあり

鐘 同所あり銘文ハ

大師堂 本堂の西北數百歩あり是と興の院と稱せ今本堂より大師堂まゝの

塔邊の増島氏累世の墳墓あり又此堂の四隅ハ五重の宝塔立十三佛十五塔

今ハ概失し樹林鬱蒼弘法大師の法影を當寺開山慶弐阿闍梨感得の靈像なり

寺記云開山慶弐阿闍梨紀州高野山より入るより五穀を斷本

實を食ひ阿觀禪念をありけりその年ある一夜大師夢に

告く曰く我昔諸國化度の時讚岐國ありて自像を作ると

其像ハ今同國多渡郡劍の山といふ地の人家を存せり汝が本國

我山は遠く急ぎゆく彼像を得汝が舊里に安置し此山を摸く

あふ恭詣なりけり婦女子等のあふ結縁せし然時を吾山よ

登る小等しけりといふ遂に阿闍梨其地に至ると靈像を

感得し舊里の一宇を營く是を安置し是當寺阿闍梨化  
寂の後も志を繼其子重俊新荷土を催工商をうけが  
諸堂を營紀州高野山大師入定の地勢を摸擬して永く衆生  
化縁の佛場となせしをありしを世東高野山又新之聖  
唱へしを重俊の嗣平大夫重辰よりを重修し諸堂舎と修復を  
其季子幼より三室を修し九歳の時より剃髮得度  
當寺昔の東光觀照等の子院ありてまづ諸堂舎輪煥り  
覺を並べ實に野山の份をなせしもの年や火災罹りて徑  
營悉く烏有とあり依元祿中再建ありしもの旧觀を復せ  
りありしを今ハ其十が一と存せるもの

龜頂山三寶寺 密乘院と号を上石神井村ありし真言宗の道場  
して頗大刹あり法印權大僧都幸尊應永元年甲戌に創建  
たりと往古ハ勅願の地あり故勅書數通を藏して慶長十一

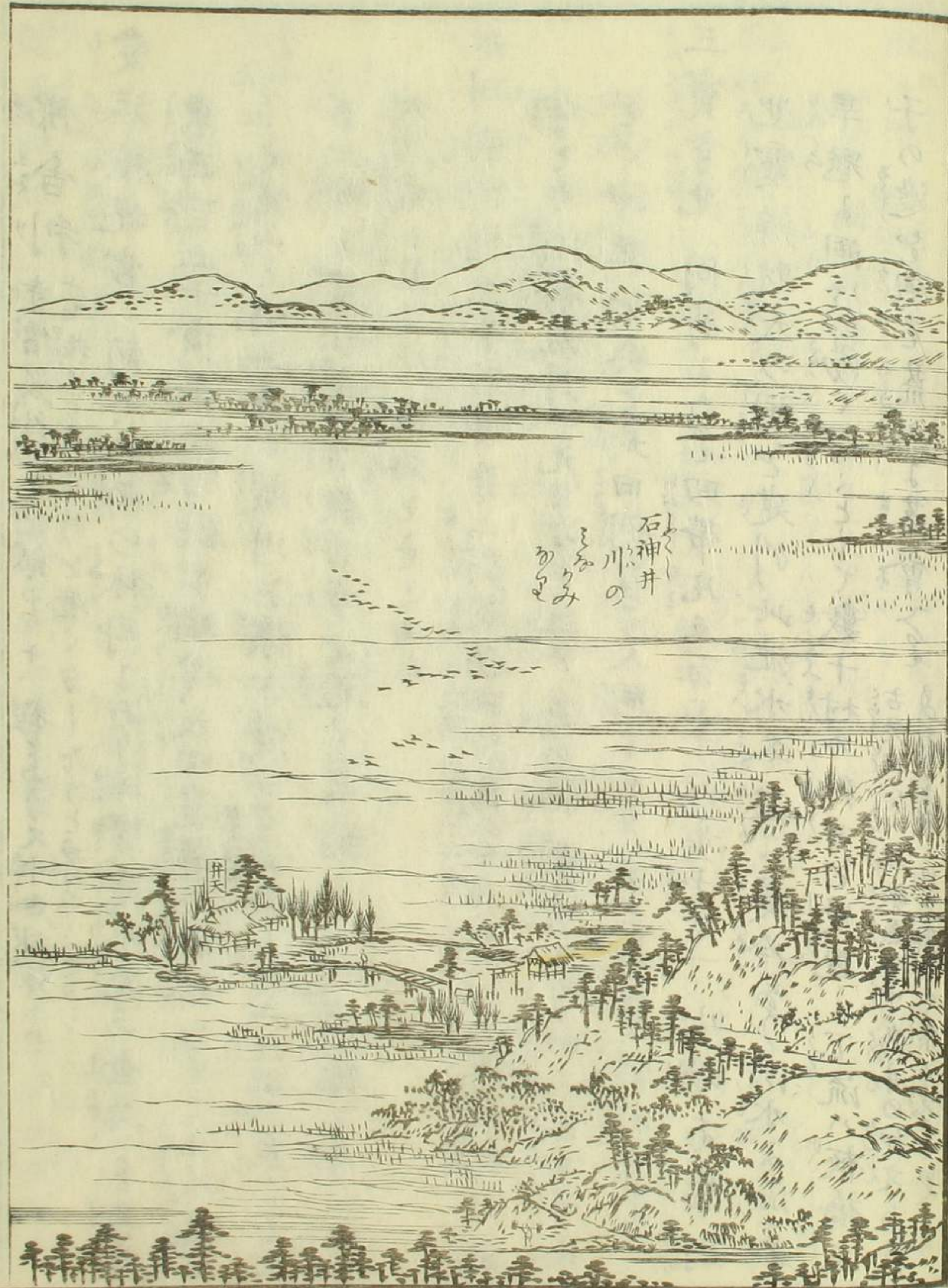
年丙午當寺第十世頼融上人檀主尾崎出羽守資忠といへる  
人と共力を勸せ寺院修復の功を全して當寺ハ則尾崎氏第  
宅の旧趾なりといへる

本堂 本尊勝軍地藏菩薩 傳形ありて馬を乘りたる影なり

其夜本寺住持の夢中告て曰く我願くハ化を垂て六趣の衆生を救はんといへり  
と乘りたる所の馬ハ猶く小止むと云ふ住持は既に至り堂中に拜すりて其夜火起り  
彫造したる馬を上に乗せしを三回其福を受けしと云ふ即ち消しり故に火消し相荷と稱するをいふ  
千體地藏堂 表門の左ハ幡宮 同右

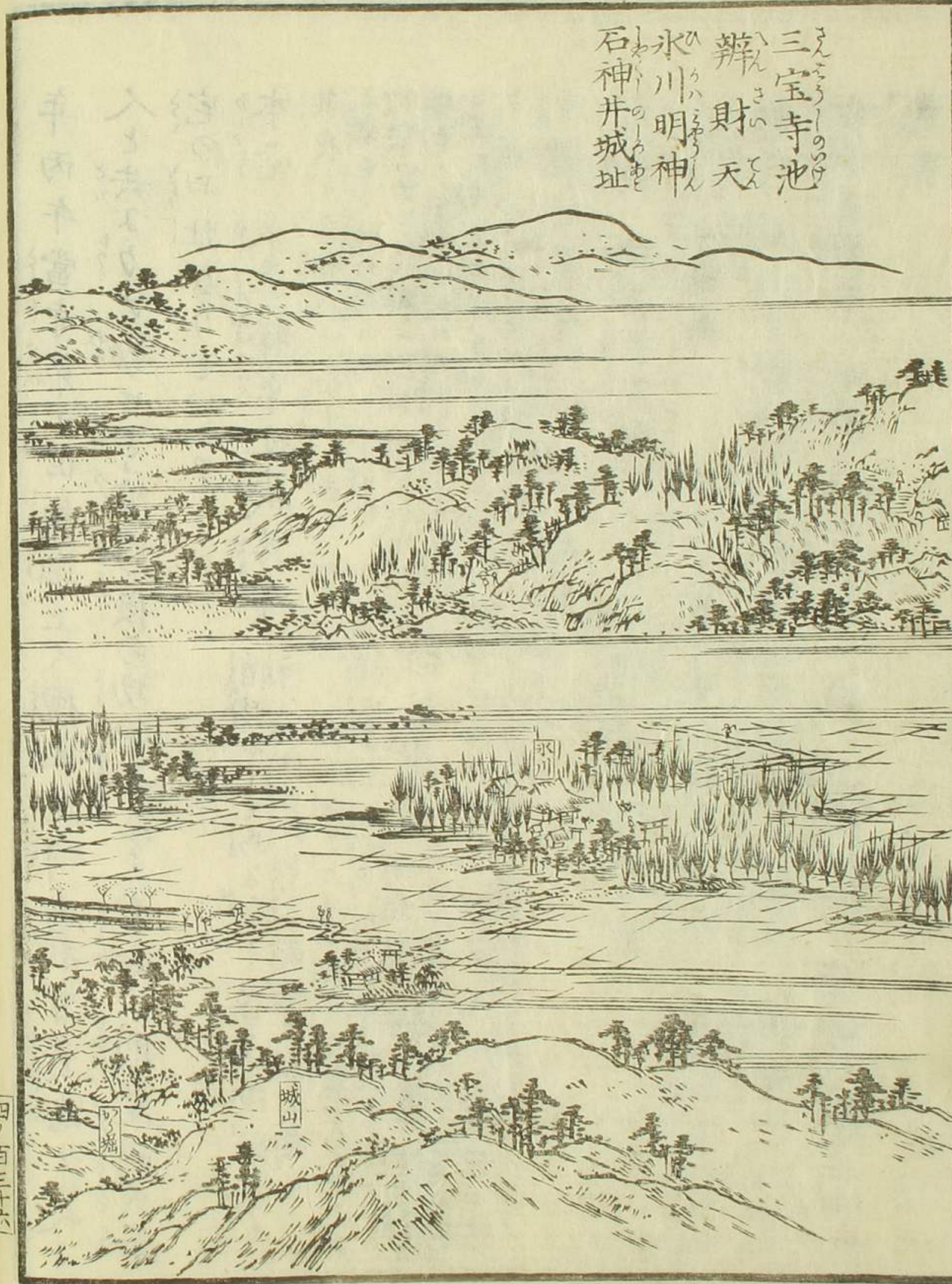
寺寶 後奈良院勅書一通 正親町院勅宣一通

小田原北條家氏秀證文 當寺第七世尊海法印大僧正官勅許之  
證狀 同八世賢珍法印權僧正官勅許之證狀 同當寺住職  
勅許之倫旨 北條氏秀制札 同乙松制札 同岡入道江雪老  
制札



石神井  
川の  
あそび

三寶寺池  
辨財天  
氷川明神  
石神井城址





佛舎利 寺僧の往古の記録を十一粒とあり又中古歌録の中

愛宕権現宮 同所西南の林岡にあり三寶寺本尊の垂跡を其地

東西百五十歩南北百餘歩相傳太田道灌の城跡なりと土人の字

城山と唱ふ前小瀬川を懐き後小瀬井を負ふ北小瀬ありと

富士峰を望む南の方數百歩を過く直塘あり道灌塘と号く土人

云江城に至るは直路と云と云云

氷川明神祠上下石神井二村及び田中關谷原等以上五箇村の鎮

守とて例祭九月十九日なり江戸芝の神明宮より社人巫女等来

三寶寺池 同所ありと回帶凡五百三十餘歩中一小嶼あり則

池靈辨財天の祠を建川此池水冬温夏冷あり洪水は溢るを

早懸と酒は湯と汗として數十村の耕田を浸漑し下流は板橋王

子の邊を廻り荒川は落會へると古云く此池教魚の中鳥井の印文あり

照日塚 同所あり嘗て相傳ふ當寺岡山曾在京の頃八月十五夜雲上座外に侍り

此塚に依りて感ありと照日上人の墓ありと云く詳かき

石神井城址三寶寺の池の傍にあり其地北小池水を帯びたり大手と稱

此城は住といふと或人云豊島家譜に豊島三郎兵衛泰友が子三郎兵衛道泰景

の跡を継ぎ武蔵國足立郡新倉豊島五郡を領し石神井の城に居りて依り

下は載たり如く文明九年四月十八日太田道灌の命で落されより廢城となり

北條家の分限帳に載り

按じ石神井の地は豊島山道成寺といふ寺あり土人傳へく是は古城跡なりといふこれ

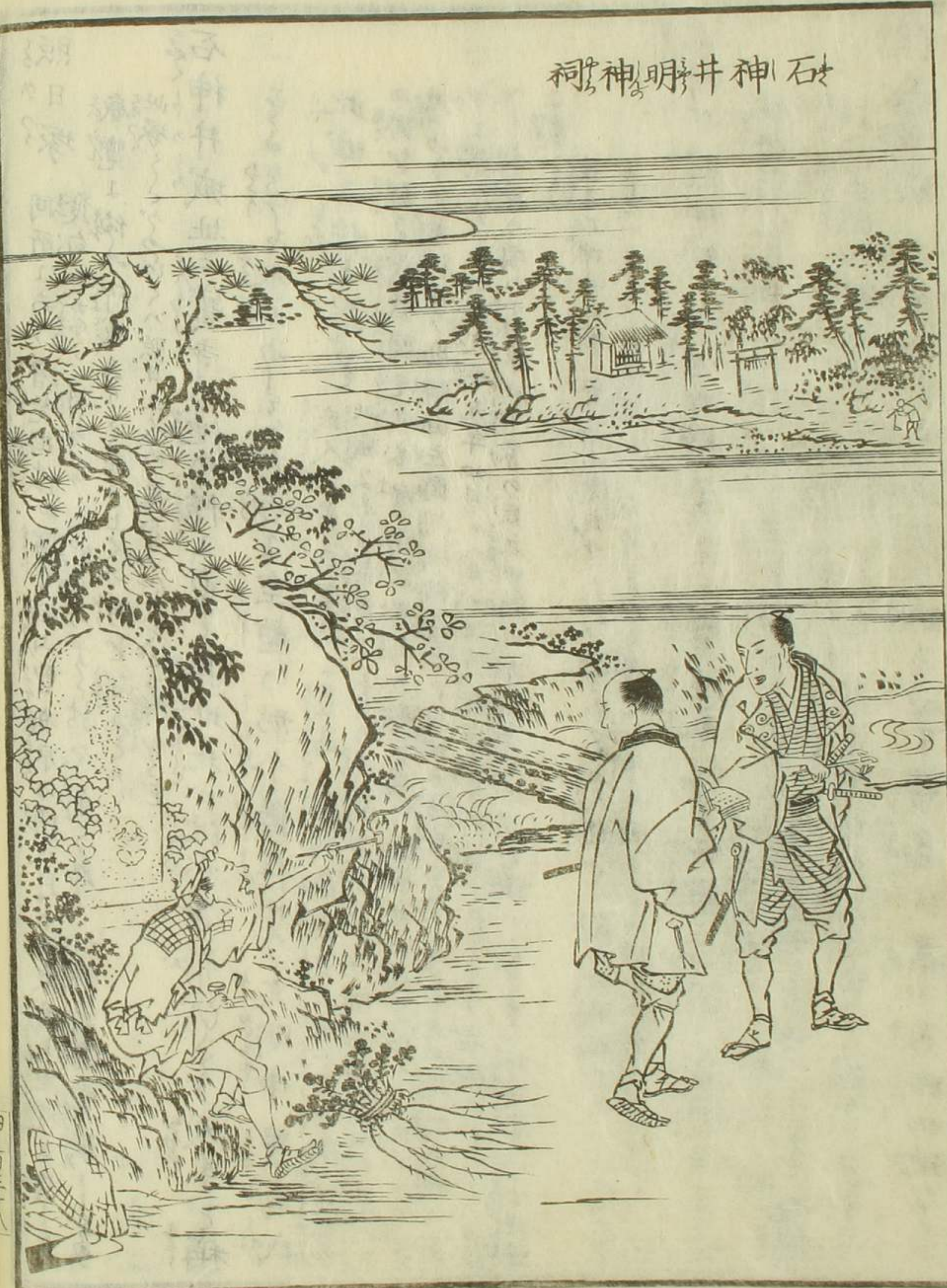
石神井明神祠 石神井村にあり三寶院奉祀を神體ハ一顯の靈石あり

往昔井を穿とく其土中は是を得たりと云く

依石神井の地名あり起ると云く

練馬城址 上練馬村愛染院の側にあり豊島氏某が居城の地なり

石神井神明祠



先の石神井の城跡の条下と合せしむるに永祿の頃ハ小田原北条家の  
 臣中村平次左衛門江戶練馬より豊前方の地を所領の中に加へ又金曾木  
 頼也練馬を領する由北条家の分限帳より見ゆ可なり同書ハ鳴津源四郎と  
 記する人の所領のうちに豊島清光寺分練馬あり有之と注せり  
 鎌倉大草紙曰 文明九年正月十九日の夜頭定憲房定正三人小勢  
 ありて上杉方申合上野へ打越 大勢を催し景春を退治  
 せしむるに太田道真を殿とす利根川を渡り那波の莊へ引退景春  
 一味の族より武州豊島郡住人豊島勘解由左衛門尉同弟平左衛門  
 尉石神井の城練馬の城を取立江戸河越の通路を取切云々又同書  
 曰 文明九年四月十三日道灌江戸より打つて豊島平右衛門尉が平  
 塚の城を取巻城外を放火して歸る所は豊島が兄の勘解由  
 左衛門を頼る間石神井の城練馬の両城より出攻来れば太田  
 道灌上杉刑部少輔千葉自胤以下江古田原沼代家と云ふ所ハ馳向ひ  
 合戦し敵ハ豊島平左衛門尉を初として板橋赤塚以下百五十人  
 討死す同十四日石神井の城へ押寄責れば降参して同月十八日小

罷出對面しつ要害破却せべき由申あぐり又敵對の様子よんえ

立野舊跡今指所一か... 新座郡に屬し引又村の南に

隣に館村と稱する地あり是れ其舊跡なり  
自り古名をうしり中古に至りては又引又  
多知をも多天と稱し字をも今館村と史あり  
川白子の邊迄の地まへ古の牧野の旧跡ありと云依り考ある小  
其地水濱し地勢尤馬を牧便よりし土人の説頗據ある  
似り 同名の地足立賀美又大江戸の西の方地は練馬竹馬澤内牧  
馬馬川引馬多 今馬多と 馬引澤駒林野牧 今野馬 等の地名多きも  
牧野又因り證かりし

拾芥抄曰 年中行事部 八月二十日 牽武藏小野御馬 中略 二十五日 牽武藏

立野馬 同書曰 石川田比 立野 小野 秩父 已上武藏云々

公事根元曰 八月廿日ハ武藏國小野御馬四十足をひく。其外秩父の御馬  
廿足立野の御馬十五足毎年よめてしり云々  
後撰集 兼輔朝臣左近少將よるていへる云々

新勅撰 以とをてハ短風を... 藤原 忠房

續千載 花露所のつに雲ハ秋露の玉... 入道 太政大臣  
續後拾遺 今もまのふにふる... 新院  
夫本 強人の玉を... 冷泉 太政大臣  
同 指處其立野の原... 公朝  
同 事物... 有重  
伊平家奇合 善悪... 通平  
古今六帖 あり... 貫之

膝折里 新座郡に屬す江戸より河越へ至るは街道中々白子と

行程一里驛站あり所澤よりを良し當り其間三里あり

北条家の分限張六郷殿所領とあり中々河越内膝折世貫文とあり

田國雜記 例の例地を漲しく日行ふなり

商人をのりてそん孫の布は御多を備ふあり

此和哥の脚氣と詠せられし家筈或は家器は作ると正字と此地の農家古来より飯器を収める具なりと云禮記の誦小筈ハ食を盛の器なりと云

家筈を脚氣よりかされし秀句あり

宗岡宿 引又の宿より北の方内川とありを隔て向あり

引又の新座 此地ハ古の奥州街道中々其頃相州鎌倉への通路あり

今の中仙道上尾浦和等の地より入て宗岡引又及び野火留の南を

折る清戸の邊より多摩郡の府中へかき今の大山通道との

徑て鎌倉へハ移しとあり 此地は用水あり引又の宿の中を流る内川の橋

榎と通も宝永の頃秋元侯川越を領せられし頃農耕の助とて野火留の用水を

たりといふ此故は土人字して

りろは掘り稱せり 此の岡といふ所を通るをへり

田國雜記 夕煙あらしむ多とせたり家前くのむの宿 道與 准后

内川 水源ハ多摩郡秩父郡等の山谷より發する所中々入間郡に

入る川越の北を東流し引又と宗岡の西を梁瀬川の水流と合

内間木の南を流る荒川は會するところをまぐ内川と稱せり

荒川ハ入間郡の北の際を流れ此川宗岡引又の間に至るを

川ハ其南を流るゆゑ内川の号あり 此川宗岡引又の間に至るを

引又と十五間ありあり引又の方ハ船路運送の地中々

江戸迄凡九里計あり

十玉院 南城山ハ幡寺と号し宗岡より十八町程を隔て西北の

方下南畑村あり本山派の修験中々本尊不動明王立像一尺

七寸脇士二童子ハ一尺斗ふし共智證大師の作ありとあり

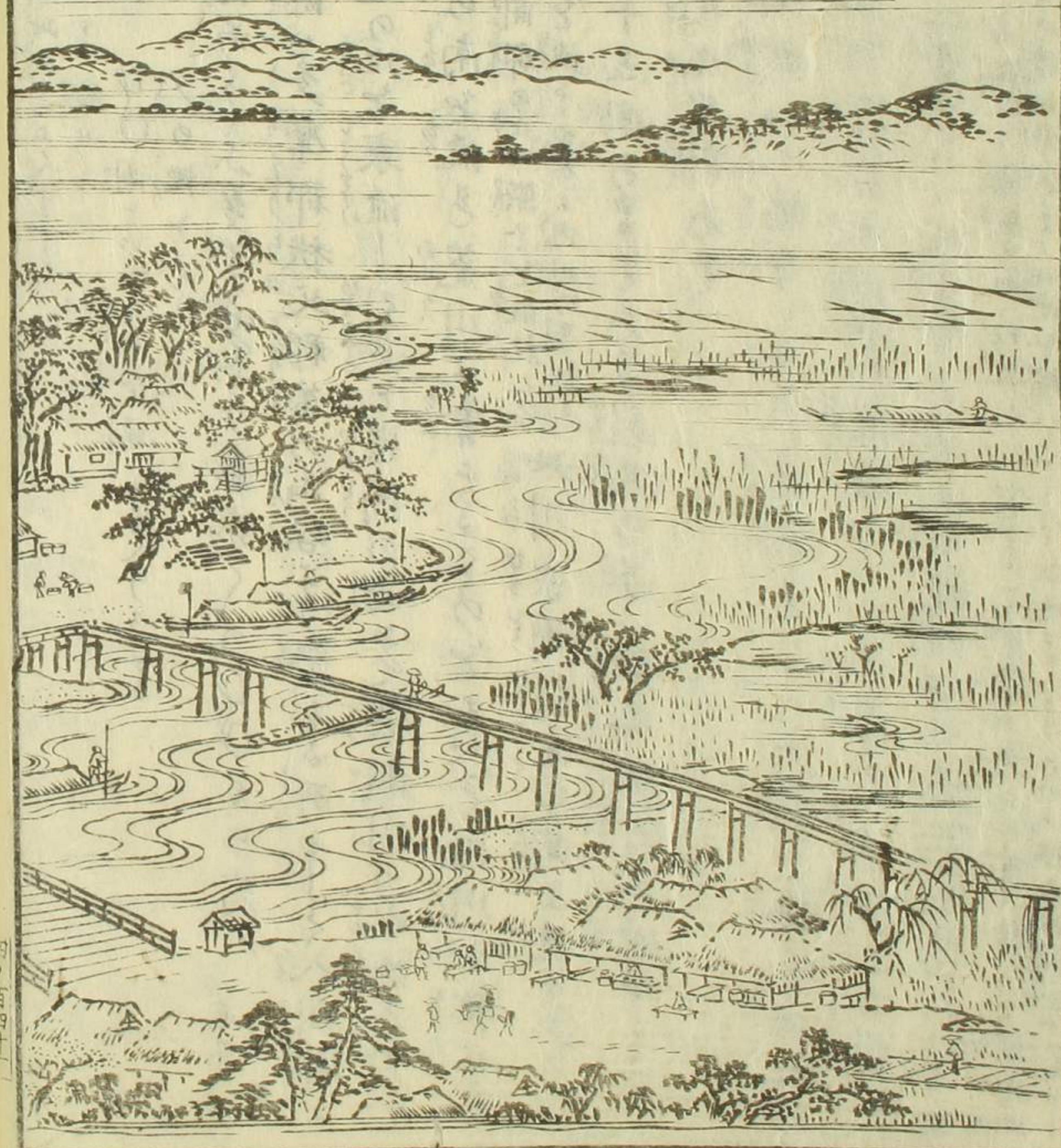
此地ハ難田 此地ハ難田 此地ハ難田 此地ハ難田

宗岡内里川

此地の領主  
御名波通背  
又と  
岡の地へ  
通の地へ  
助とせし  
項四八段小  
掛あり  
ありけあり  
とあり

田園雜記

むの岡と  
通りまへ  
らつたの



煙を

夕煙

そそり  
そそり

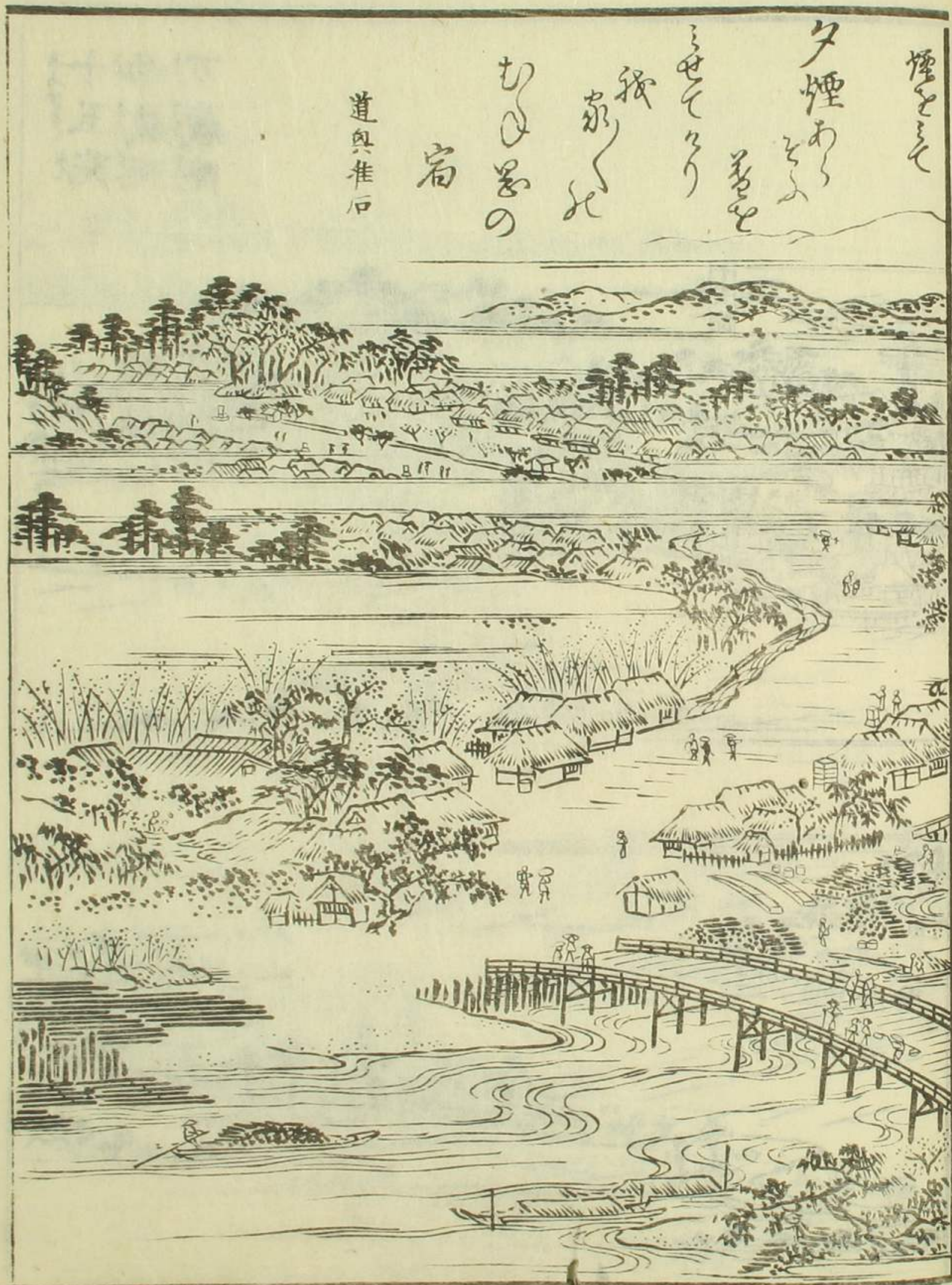
我

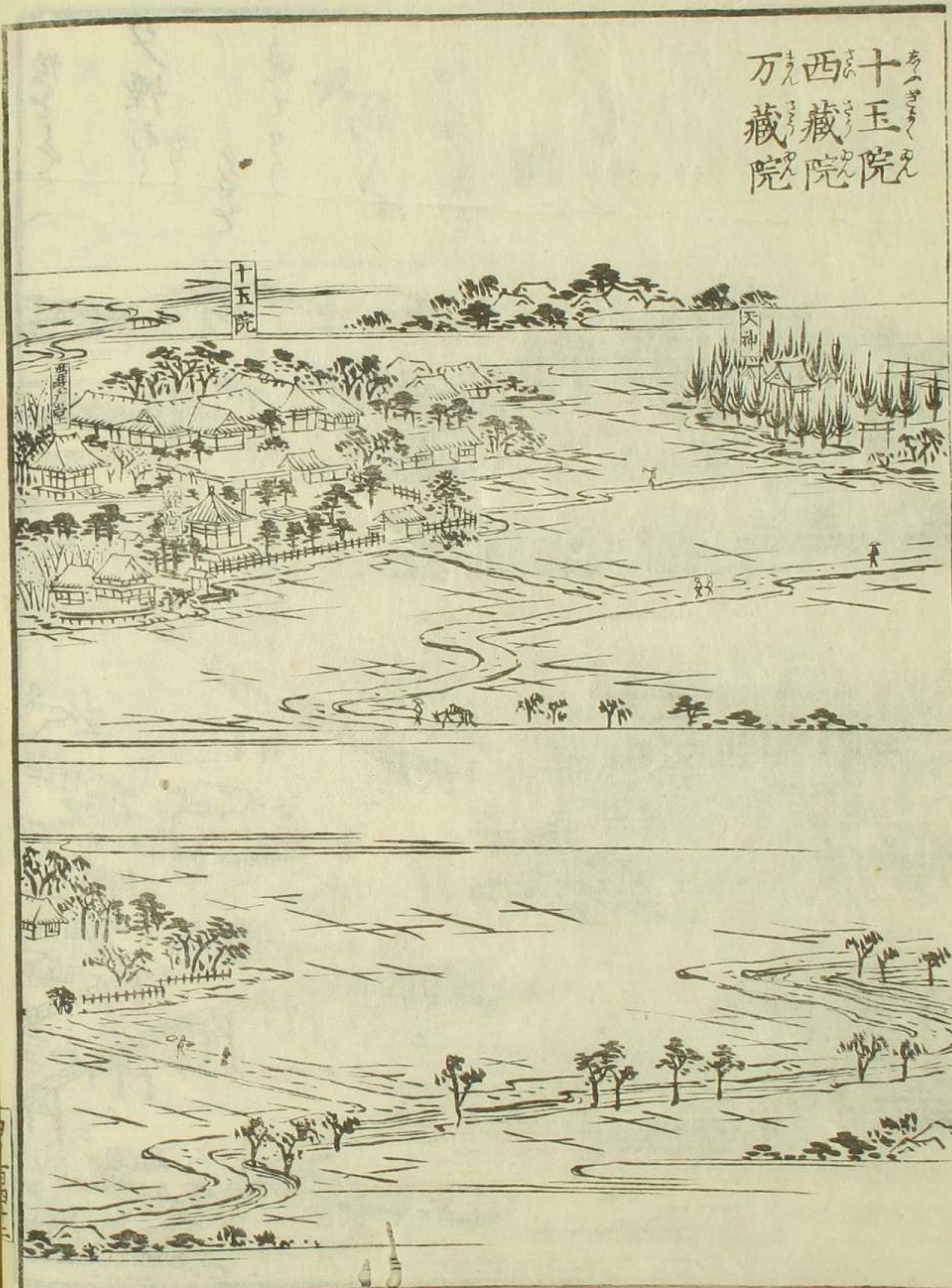
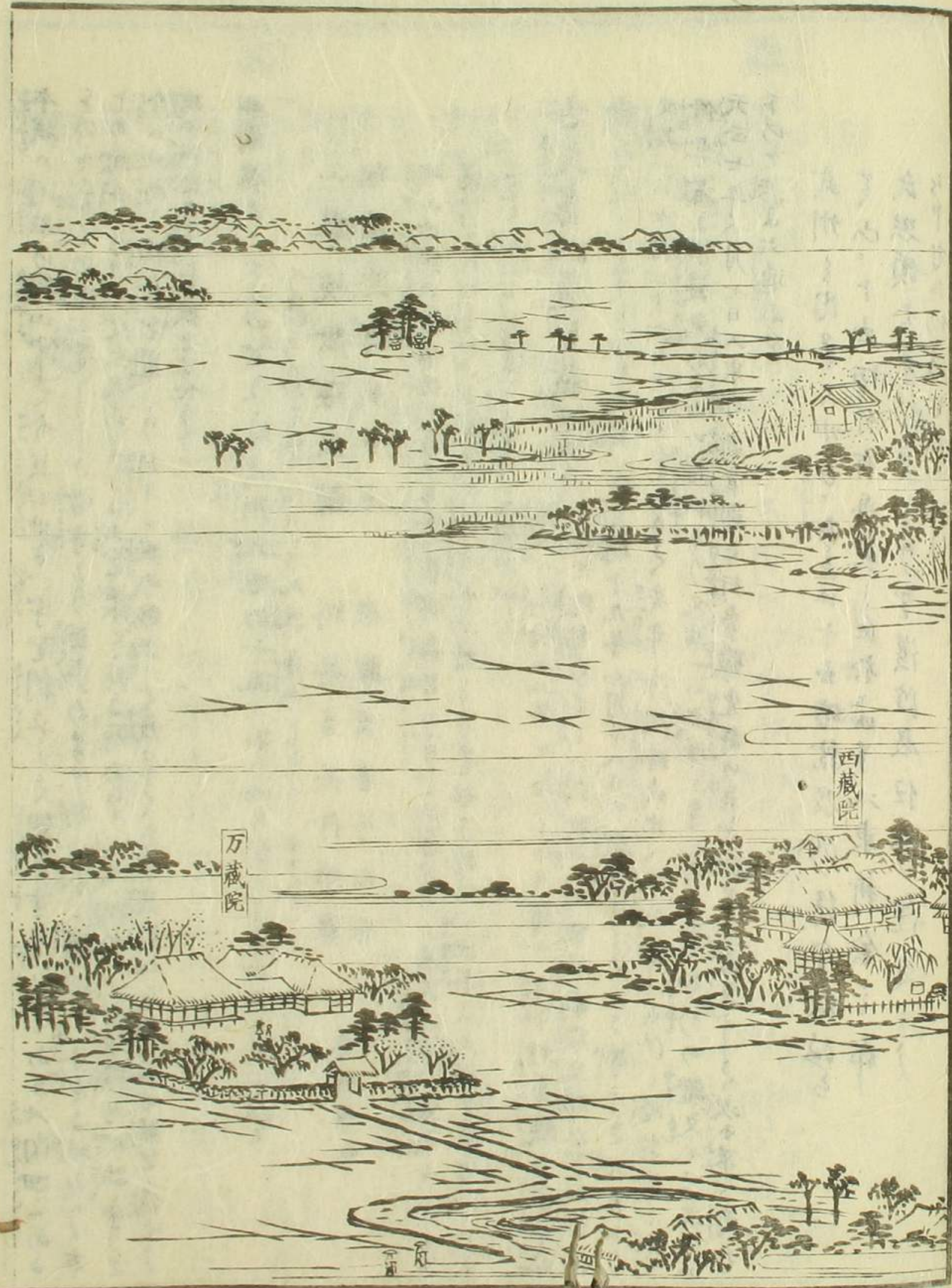
家

むの岡の

宕

道與桂石





本城ハ河越の山中今其旧地一宇と創立し観音寺と号しあり此南畑あり  
とのわたりその跡と覚し當寺より百歩あり西の方には櫓下と号する地あり方  
十五間あり一丈三尺ありの跡と覚し土人相傳へ古の櫓の跡ありと  
今ハ此所は稲倉を置り此下は畑の跡なり残りあり其餘は空堀の形と存せり  
故に此地の字と城とをいふ

回國雜記 さしをてさく武州大塚の十五ヶ所へゆくは江山のくさひ

山攀峻險海波瀾 到處多其行路難  
疎屋終宵風雪底 凍雞嘆夢月西寒  
道興准后

按此紀は西とあり高麗郡藤井のりて云ふべし又武人云大塚の十五ヶ所  
はけくかきこるを十五院古水子村ありと水子村のり地名は太塚と云所ありと

古文書六通を藏せし  
其一ハ文明十二年七月二十七日清平年中行事職の事申請  
違ふべくすと云又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上等き文義あり

又其一ハ七月二十六日と云又其ハ文明十九年正月十八日の證文中より上等き文義あり  
修学館は准提免ある由の證状なり又其一ハ文禄三年八月十五日知りの證文に又其一ハ  
天正七年八月七日入東郡新倉郡年行事職免許の旨を記せし證文に又其一ハ  
とのと共六通あり

武州之内有る水子おまひ十五坊然及以迄今叙はる  
其山ト云坊可有再興はむは東新倉三郡  
氏照領分年行事を撰院及任抄流文

天正七年庚辰二月三日 氏照判

十五坊

難波田彈正舊館地 十五院の地を云  
難波田今南波田或ハ南畑と作る此地  
水損の患をいかりし終官府の  
免を得る文字とありたりと云

朝興の家人より同國松山の城を守りて天文十五年四月廿日  
河越の夜軍は燈明寺口あり古井へ墮入る横死せり  
今河越の南中は遊行二世上人真教坊開創せし古刹あり

東明寺と号する其旧跡なり燈と東とを考る  
彈正忠の墳墓と稱  
墓碑は日蓮大居士とありて天正  
五年丁丑四月十六日と銘あり

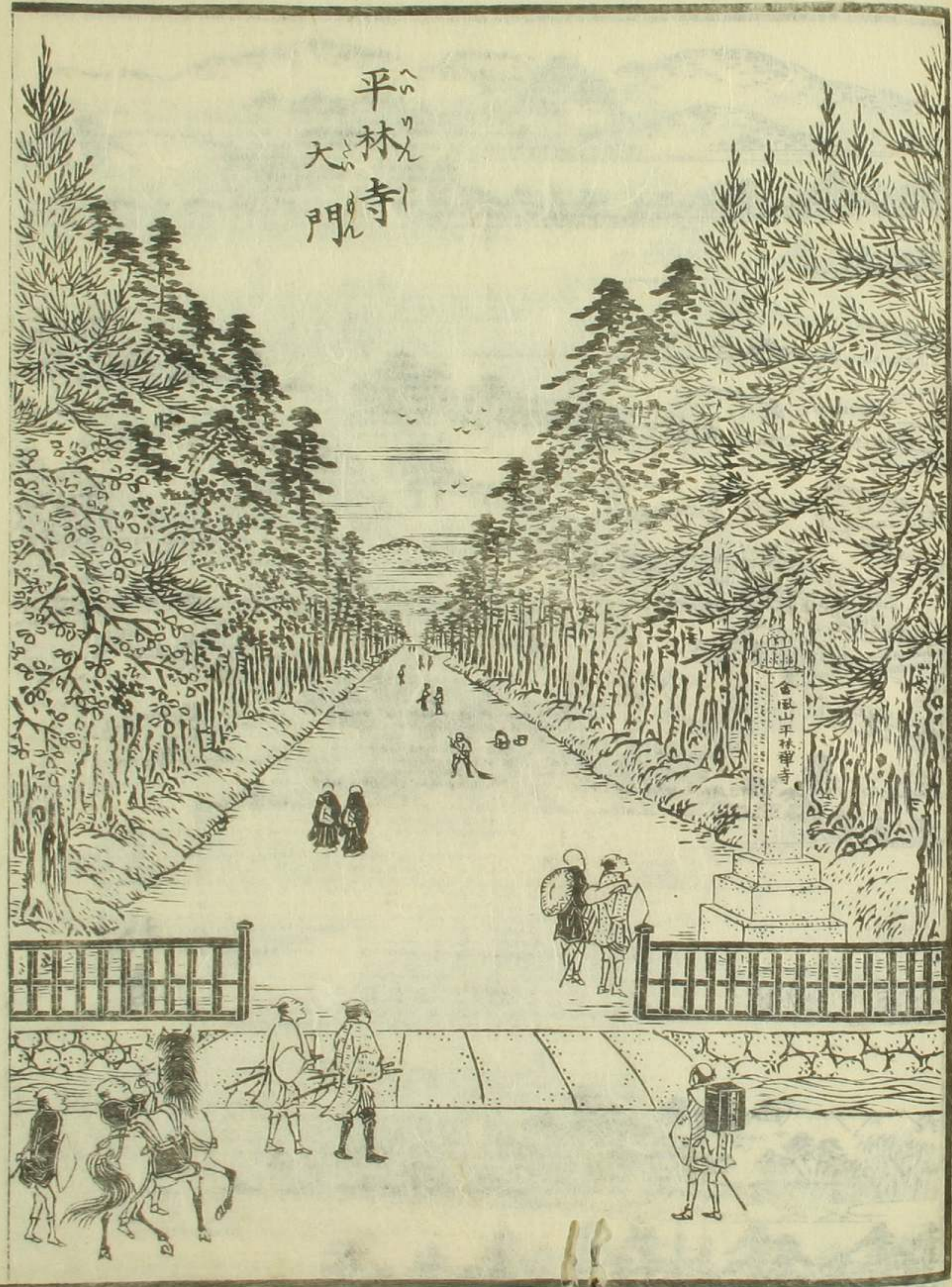
其氏族の墳墓なり  
藏院 同所十五院より四町半西にあり本山派の修験より東廓

西 山觀音寺と号する正觀音ハ座像身長五寸八分弘法大師の彫造

中へ古大師此地に至る頃靈夢は依くらとを造り入と云  
傳ハ此堂宇ハ新造なり應永年間古谷七郷の領主中筑後守







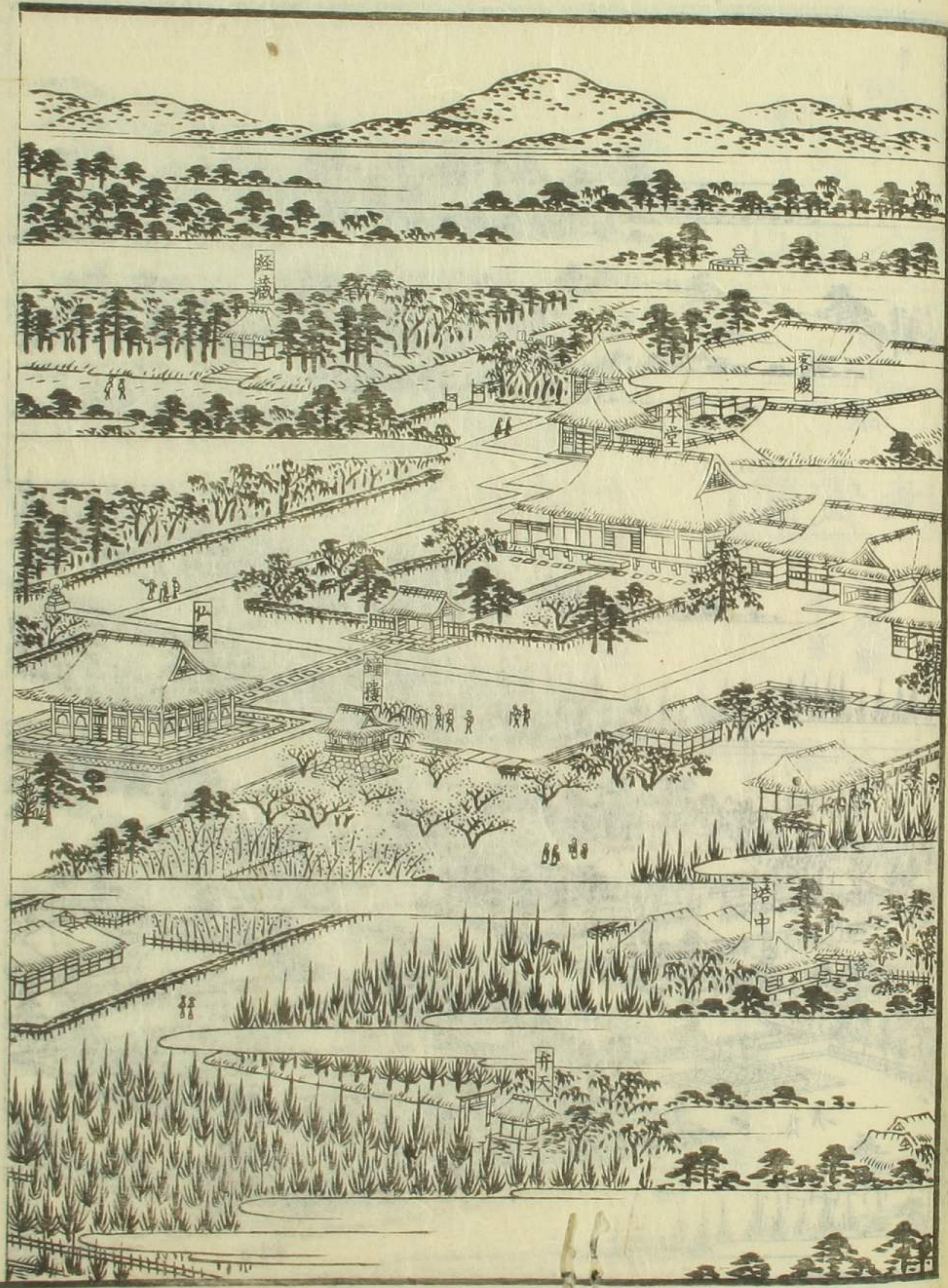
平林寺  
大門

より此塚をのひとめと名つけしなり。一石の人まじり  
 伝ふ事也

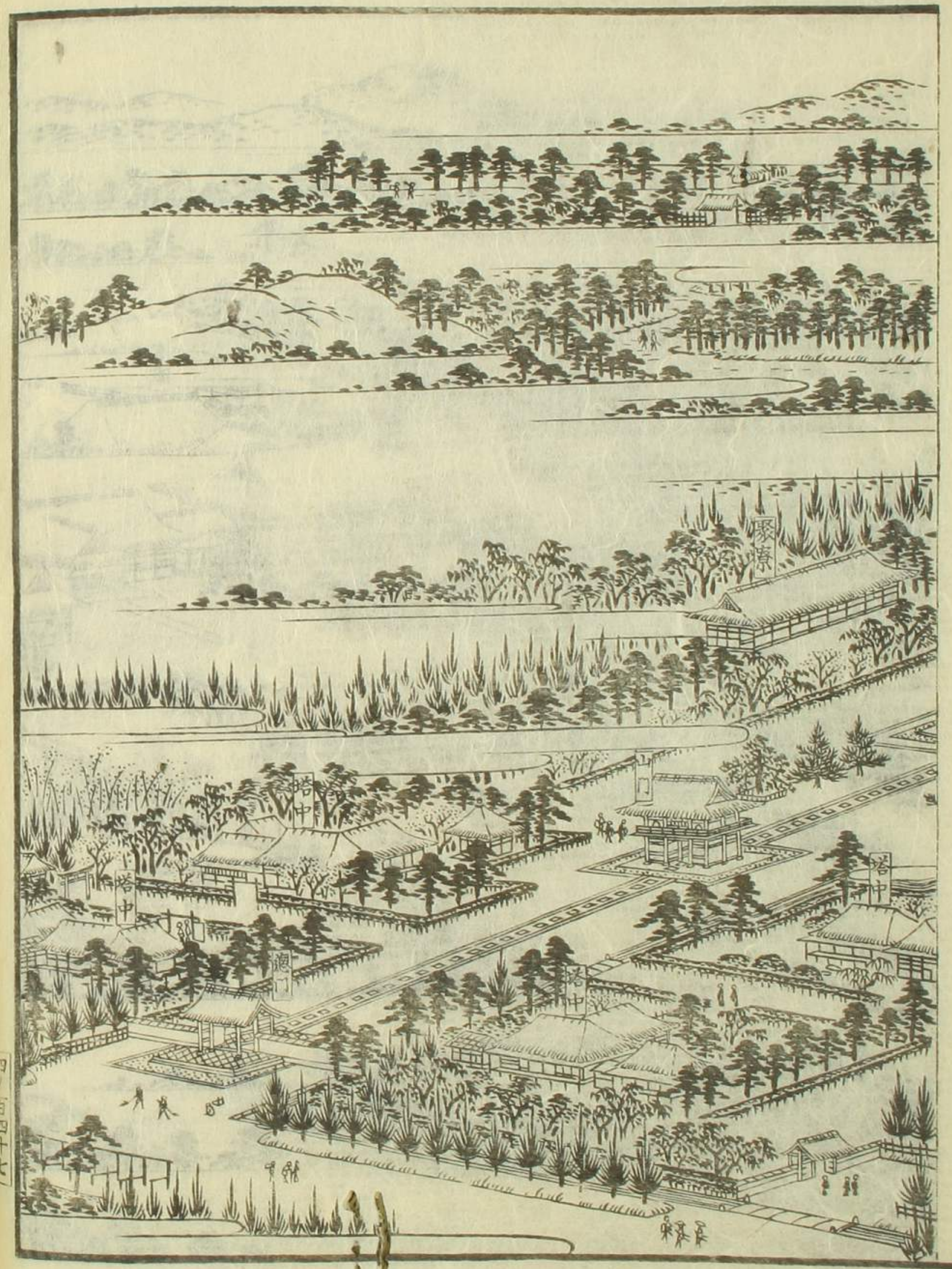
乃塚 道與 推后

按青ハ火田とのひく原野ハ火を放ち草を焼く肥種を下まを焼畑  
 としひひあり今杖父郡地ハ信州者小焼野蕎麥とりのあるハ則是  
 たりさきと其火の盛あす至りてハ人家ハ焼野火止の岩あるあらん今平  
 林寺境内ハ九十九塚業平塚など稱せるそのあるも同一たがひなる也  
 林寺号を唱うるハ伊勢物係小因りて後人のまうけりしやあらん

金鳳山平林禪寺 養心院と号野火留街道より八町程東あり花浴  
 妙心寺派の禪林なり 古ハ大徳寺 岡山ハ石室善玖大和尚  
 の法嗣康應元年己巳中興ハ雪堂大和尚と号也 九月二日寂 其先同國  
 九月二十五日寂云 足立郡岩附ありしと寛文三年 石院和尚 此地ハ移  
 旧地ハ岩附あり今金重村及び 寮舎四字あり  
 平林寺邑杯唱く地こもなる也 此佛殿ハ岩附より  
 佛殿 本尊釋迦如来 此佛殿ハ建るに  
 山門 佛殿の前あり 樓上ハ十六阿羅漢の木像を置けり  
 此山門ハ岩槻ありしと傳ふに建ると云



平林寺



同額  
筆石文  
筆

金鳳坐

惣門額  
同一筆

凌雲閣

客殿額  
同一筆

弓林禪寺

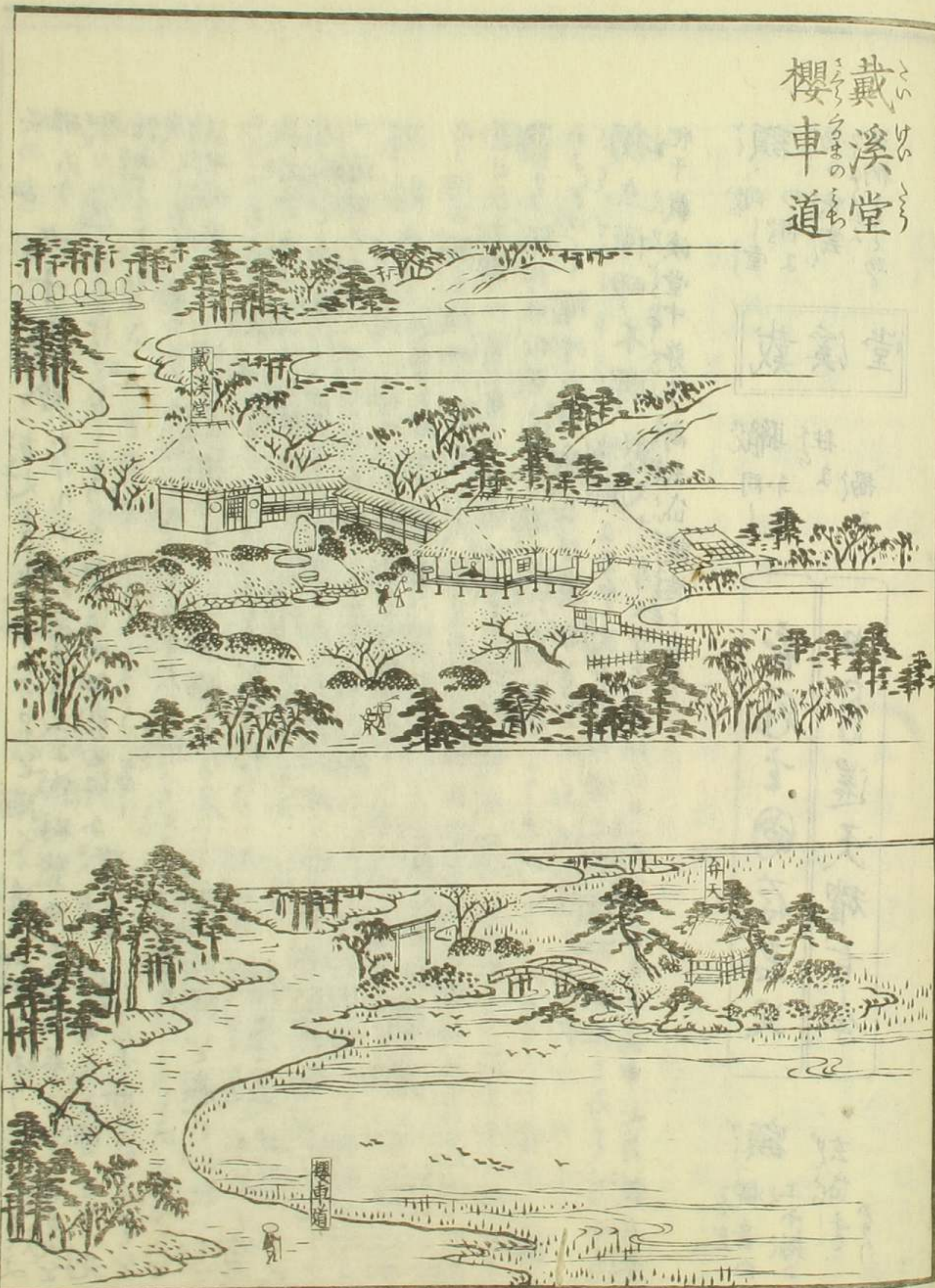
鐘樓  
佛殿の  
前あり

額近水臺  
松平豆州侯筆

鐘銘

大寺吉日千本國武州崎西郡岩桑莊金鳳山平林禪  
 寺良之徒無催崎西之郡若山檀越參州平頭郡  
 吉壽參同雄源家英氏族有大河內法林宗無鐘祥  
 菴寄與鳳山其功德也堆其山心感命冶鐘慶  
 鐘以敷家門之榮者幾萬年矣祝銘曰岳餘慶  
 猶根清淨鮮百八提諸眠前檀越不孤德兒孫億  
 耳曙光樓閱外明月寺門前檀越不孤德兒孫億  
 天年時元和九年癸亥九月十三日雲峰宗怡誌  
 兆于時元和九年癸亥九月十三日雲峰宗怡誌  
 寺者同州在若築城之西寬住山比丘雲峰宗怡誌  
 載寺同州在若築城之西寬住山比丘雲峰宗怡誌  
 外微火鐘樓延寶甲寅之西寬住山比丘雲峰宗怡誌  
 幕病諸天和樓延寶甲寅之西寬住山比丘雲峰宗怡誌  
 全該日制及壬戌之辨不遂命治再鑄者有丙辰且  
 切乘祖越初度之願輪永保寺門中興之基業祝

戴溪堂  
櫻車道



云劫石有消日洪者無盡時遠也大也  
 武州新座郡野火留莊金鳳山平林禪寺  
 吾鳳山嘗有梵鐘一口其型小而且有  
 復之觀茲有知庫全德微志深檀興有  
 歲之夏振錫提疏普募有緣體存如護  
 華舊與樓不同再贊圓成野銘詞賦偈  
 之梵音大而器頭圓成野銘詞賦偈  
 維時響徹西明三年龍次遍野  
 西江山比且東嚴禪海誌焉  
 和泉守藤原政時

當寺開山石室和尚住山之頃  
 江都金重村金鳳山寺  
 那藤原中務丞政行慶雲禪寺  
 左近將監朝貫保屋山城守修理  
 兵部將監朝貫保屋山城守修理  
 上總守朝貫保屋山城守修理  
 養心庵

の古九十九塚

此の古九十九塚... 戴溪堂... 櫻車道... 戴溪堂... 櫻車道... 戴溪堂... 櫻車道...

戴溪堂

聯... 戴溪堂... 櫻車道...

衣冠古國存君父  
日月還天耀古今

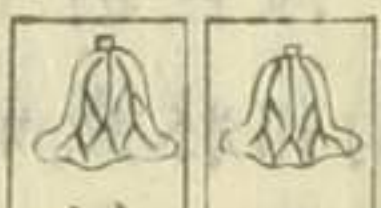
額... 戴溪堂... 櫻車道...

元竺古先生

戴溪堂中... 觀音大士扁額... 享保元年丙申... 七月穀旦... 高玄岱置

梅も昇主

同... 普照... 國師... 梅も昇主



五夜禪燈三昧火  
萬年藤几乙枝香



觀音の前... 左右子揭... たり天間... 衲自題と

木牌一枚

瀑乃襲題頭未朝喜類率六... 煩往人到坐能竟眩悟二... 襟長語下溪為棄文讀月... 癸水率筆月詩帖八書十... 巳語齊沛雷一嗶股過九... 早溪五然我日放率目日... 春養十藻宿友遊二輒幼未... 發晦明思祇社鹵旬誦名產... 行匱清出二師飲五學胤男... 三月有代清句賦頷離舉因... 抵粵一新衆詩山水成災蚤... 崎人天自皆應聲趣又登辰... 兼招塵洗異嗣日率當魏序... 應同不盡嗣後我比三豎... 季海慘拍凡來溪十亂不資... 也快憤不有溪十亂不資

明... 獨... 門... 師... 先... 出... 晉... 戴... 荷... 謹... 撰... 并... 書... 因... 州... 刺... 史... 越... 智... 直... 鄉... 君... 章... 父

憤矣事未師崇初以捆峰聯分重刹善師三臘抱集山更善十煉容  
之稍之老書也七覆載禪芳支建昏之無月月素若侍師庵一七貌  
言有輩安賜左日蓋以師軒折也山以妄朔遙懷于從呵托月十七如  
慷志悉得者奉也聖至其鹵泐壑曰為像日奉聘恩唯明而後事六夏玉  
慨氣聯延旌師扁以卜老北委關金圖區殿書極哉護笑和曰也一  
不之翩至其像曰瑾吉師之給曠鳳圖也願見夙矣吾送和即示  
容存而於三以戴壁架默隅庖塾樹曰距言命夜積愧粟骨便今寂  
刊必去此率奠溪匪梁雲有涵樹之平都數入戒途怵業於終為時  
者效抵而坐之堂日翼和地早松林前吾十構顧庚莫已黃下候  
慮觀吾明也題位告僚合即可竭導伊里獨謂寅可四燬山有閣日  
數已止於噫梅供竣東議可就人水玉守外有身二與七有維於午  
十伏一世時不關金正三之而起便川源武源已月計七有維於午  
扁念子乎不關金正三之而起便川源武源已月計七有維於午  
今吾遺回俱主大德楹乃起便川源武源已月計七有維於午  
略師身意需乃士丙間庀昏之控君州為充直詎謂於外於聖壽  
表一率舊上普導申方工住其之信地政選抵謂於外於聖壽  
而生又勤恩照師三之護持子紆綱有聞其武已茲丑空人壽  
出忠老共之國歸月菲木雲院迴之鉅而奈城丑空人壽

他筆非時後特然尚猶如嘗礙時假司才戊流夢落立國甲七軒長  
凍書病健省就而開如書謂其寬還源之戌亞之々號師命月懷崎  
折曰何啖觀山中不豐王正人術三庚重之月曆塵袍下下絕照子行  
梅鑿事猶國起憚餘廣蹟逼物道癸入師出國未並躡間添矢師公正  
花々藥壯師途靜室喘壽益古菩廣卯關住於師八擔雙人即心應負述  
影塵為率至次疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒稟師率脫聘莢請  
接々倒卧此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒稟師率脫聘莢請  
却傷卧此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒稟師率脫聘莢請  
江海匡稍作憇息備邀品含行視八山阻之武侍博可棄月用渡日馳  
南邨林減而回之至駕也芒應方日三不右城普決啣儒八畢大東書  
白不吟衆遺所豐虛乙獲機活也載果執宰門典而歸日殘振不上  
玉忘我勸遣侍自感座春片用施後關治源長書識可酬諱狀威之師  
魂殘自服藥徒扁感座春片用施後關治源長書識可酬諱狀威之師  
書夢娛藥徒扁感座春片用施後關治源長書識可酬諱狀威之師  
罷繞忽不祖曰師以雪紙袒藥居之君者記者計同曰求師歌便  
溢空朝聽命白花而師即字活國擇不幾率信莫萬云者一性易家率率  
而咄坐報書室精輒非珍路稱地灾亥暨嘆元地天風字乃象甲漢  
逝任索身平厥勤翩和襲至神無發病有師率之白芒獨歸六午澹

陳平為用慕否於如踏遭之哉挾藩地身與突天被茨極之統之  
身跡所盛光之耶聲師海時言只勢大中與高忽若半上乎亂昭其  
非因親固吾誠信詩所終亂非此子創妄作法四妖重土冕御下之成足高  
漢使銘微不遺欲推後功方不己字父舉妖事子耶關斯氏體盛乎許皇  
誓曰其安事以乞仰能事業耿於憤萬凶無斯親合廣豈也衣德中今帝  
不生還出處惟義備嘗險難朱家  
然之或鉅讀士少卓地天橫蔓逆而天孫理推以大沈乎皇有有力天  
者弗勸之名文能以而風復公光天兼殺運命當元明統現形於斯世  
不忍將奚碩無為其歷屈論矣兼運命當元明統現形於斯世  
文自不德一莫能慨原以也者  
之乃勉文雅而篇  
繁據生他篇  
之乃勉文雅而篇  
繁據生他篇

多士弄矢河山清宵撫  
顛頂其顛醉爾道範後人  
逍環金鳳攸止碧水潺湲  
事保三季戊戌四月穀旦  
弟子高松李江直芙蓉拜建

當寺の境内を周流する所の水ハ兼應元年野火留新田墾闢の  
時伊豆守松平信綱朝臣二里餘り南の方小川村の地より  
多磨川の水を分るこゝより引しつとつる  
野火留用水を宗岡より引しつ  
りハ秋元侯川越を領せり  
安松山長源禪寺同一西の方安松材おあり洞家の禪林あり八王  
子の乾晨寺に屬せし開山ハ傑用禪師徳英大和尚と号せり  
元龜三年

壬申七月 開基を英岩道春居士と称せり  
精舎中々大石道春公の草創ありとあり  
役卒の年月忌日を詳せしむる  
永源寺の條を合せしむる  
本尊釋迦如来  
座像七八寸計の本佛なり  
作者洋當寺に北条氏照の靈牌あり稱

古色の文字をえりて

飽間齊藤氏戦死墓碑 野口村の中西宿德藏寺と号する禅院の

後園 浄家の禅宗や〜江戸赤坂の種徳寺に属せり相傳へて水縁 竹藪に

中へ建ふり 六七年前までハ當寺より三丁を隔てて狭山の嶺に山の中

改門中興せり 今ハ德藏寺の寺境に 草庵ありて方亮和尚といへる

高廿五尺計  
碑面三尺五寸餘  
幅一尺五寸計

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年未詳進退陀佛  
於武州府中五月十五日討死  
元弘三年五月十五日 致  
同孫七家行廿三同死飽間孫三郎  
窓長廿五於相州村岡十八日討死 執筆扁阿弥陀佛

飽間氏の墓碑ハ實は五百年の蘇苔を帯るといへども三士の雄名を  
今も埋むべく千載不朽なり 執筆扁阿弥陀佛が書ハ暗は元人の  
骨法あるを以て普く風流好古の徒此地に至ると称揚をふとの

必か〜

按は元弘三年ハ 光嚴帝の仁慶二年癸酉なり此年後醍醐天皇隠岐國を出て  
歸洛して重祚の後ハ仁慶の年号を用ひしは元弘三年とて此年新田  
義貞朝臣相模入道と七さんと同年五月十五日武州府中の成徳河原へ押寄入道の  
舎弟四郎左近大夫入道慧性と合戦を義貞打負く終は堀兼とて引退く由  
平記にあり太平記ハ此人の名を注せざれども  
此日はあま〜討死せり此碑はよ〜明〜

將軍塚 德藏寺より四五町を隔て北の方狭山の嶺の終る所ハ

の塚上は老松一株雜樹は交りて繁茂せり 此地ハ余村及び余川

口村に属 元弘三年癸酉五月新田左中將義貞朝臣上州の笠掛野を

此地は屯一歩を隔て東西は塚を築き旗を建て其備へを

越後信濃の勢を集め竟は朝敵を平げたりハ一舊跡たるを

土人其武功を慕ひ將軍塚と唱ふ 西の塚上は義貞朝臣の靈を祀りたる

狭山の池 箱根ヶ崎驛舎の西北の脊に存する所の池水を狭山が池の

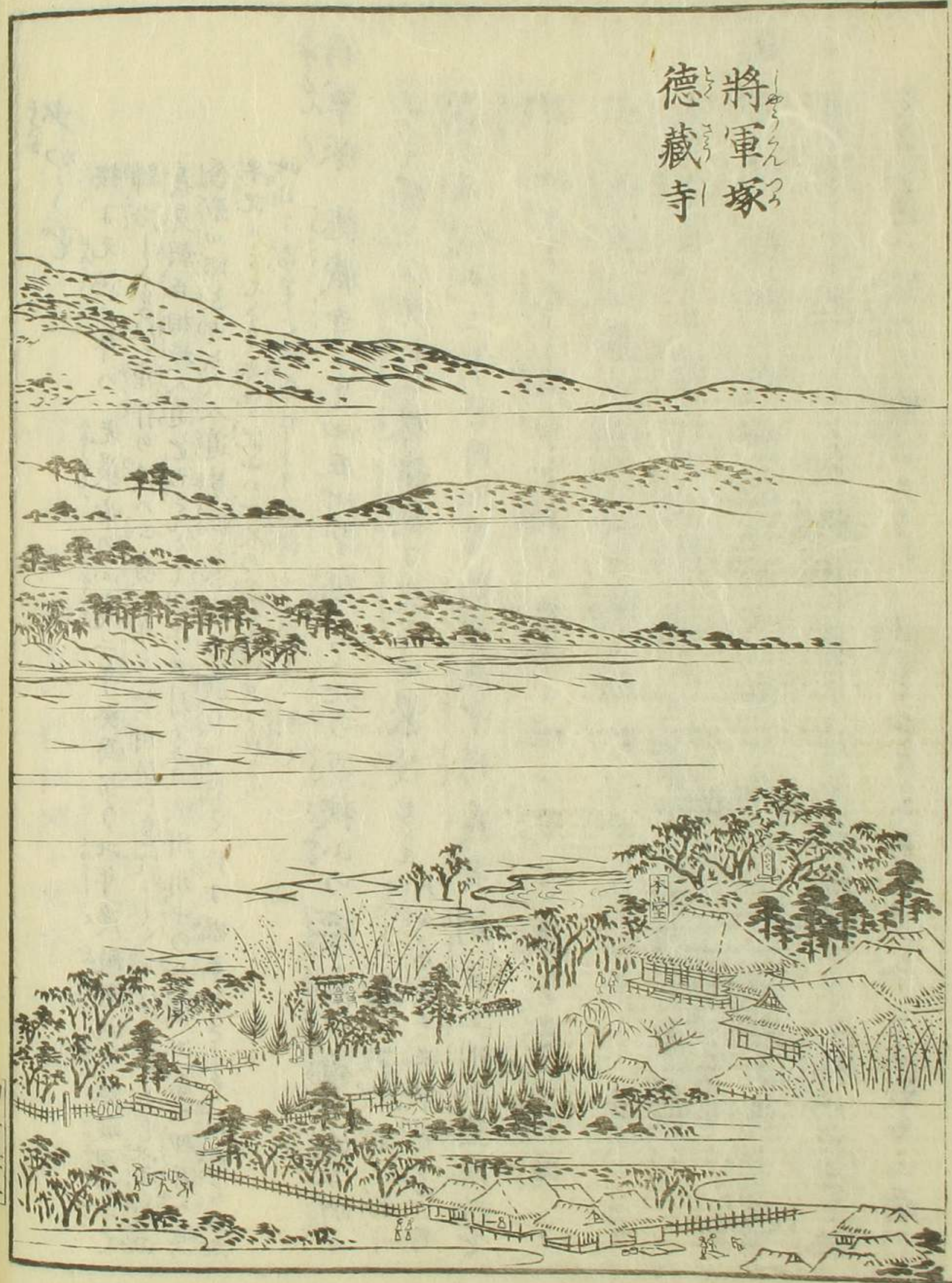
舊跡とす 然もとも箱根跡あるものを箱の池とのハ狭山の池と称

するものハ狭山の麓はありて一所をさそふあり今も亦も三所を





將軍塚  
徳藏寺



この山ありて土人何をも狭山が池と称せり次は奉る所の北國  
記新山の裾といふありてある一清少納言曰池ハ狭山の池みく  
まといひ池のせうく地味ゆるあやあらんなどありてみたりあやめ  
尊菜 ぬなハを名物とそ

奇枕 あやめを狭山池のまき根を足もみなり此の池を引 兼昌

日 みらるる狭山池はたな中ちけいひれぬま柳の糸 隆祐

日 まゆを狭山池の裾ぬかひのまき根を引くもななく雪煙のうね 仲實

松葉集 武花なる狭山池のみらるるまき根を引くもななく雪煙のうね 秀能

新撰六帖 ぬなけい狭山池を埋れて池のまき根を引くもななく雪煙のうね 秀能

北國記行 狭山池のまき根を引くもななく雪煙のうね 秀能

氷のけいの狭山池を埋れて池のまき根を引くもななく雪煙のうね 秀能

狭山 久米村より登る西の方箱根崎近凡三里は餘り連岡を云 將軍 秀能

同東の 土人一名を尾引山と称せり嶺の徑路ハ多麻入間の郡境小  
嶺あり

一と南より北より麓より登る所二百歩あり河を或人云武蔵國  
風土記殘篇は多磨郡北ハ向の岡を限るとあるに於て此長岡を

以て向の岡とて可なりんとす  
土人尾引山の北はあけり綿々なる群山  
あるを以て狭山と号せり依り按じ此地乃

群山ハのりも狭くして堅長きとの数條あり此故に山と云ふは狭山と云ふは  
号たり一ありてある時ハ土人の云へるやぐ此地かての山と云ふを合せたりけり狭山と  
稱し一所は限る名ハあはれず

千載 五月間狭山を登ると山頂ハ雪の絶る所なりとをみる 頭 李

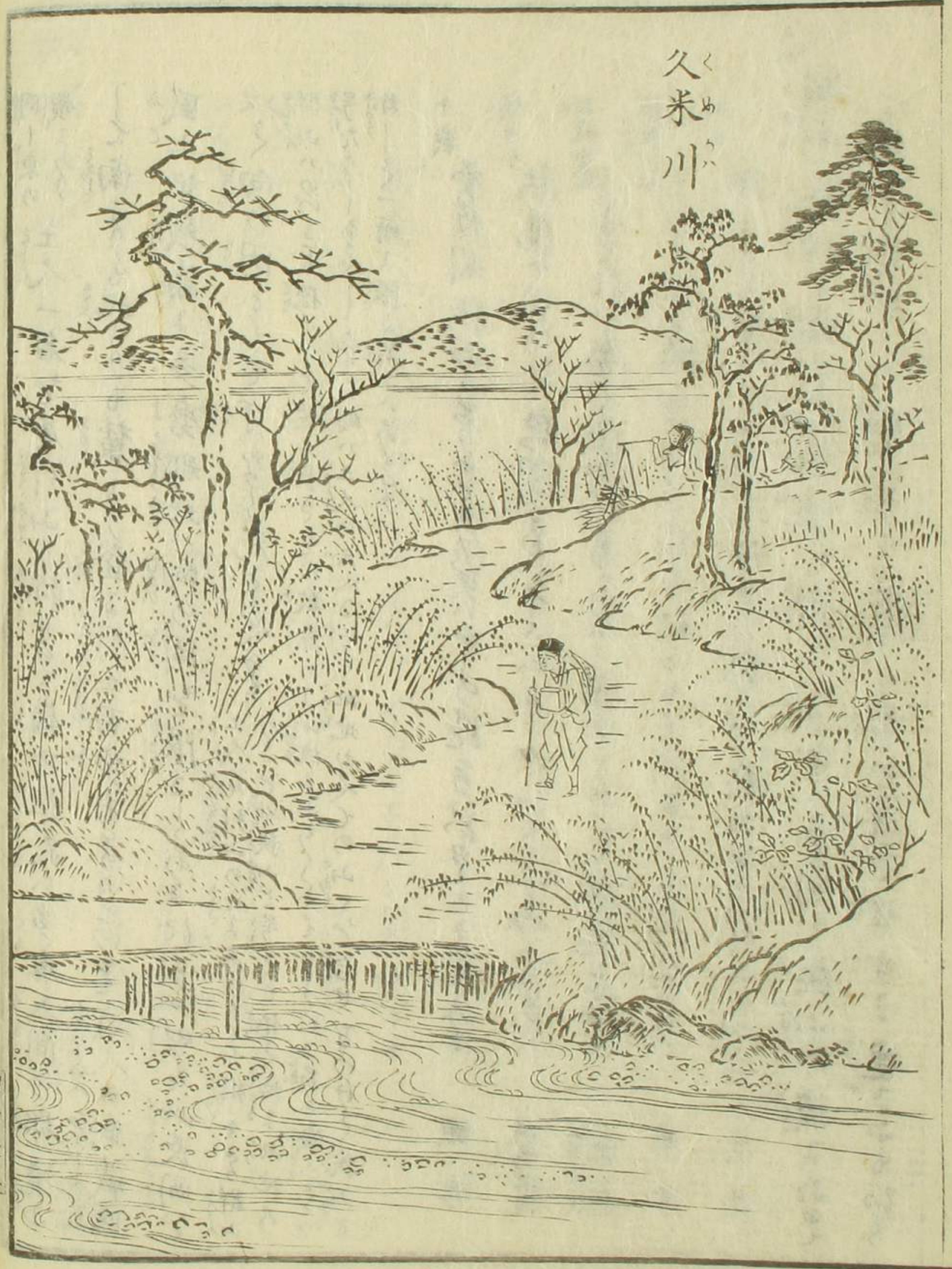
續古今 秋風なひく狭山の暮かつるやいづみり 後鳥羽院

新後拾遺 秋風なひく狭山の暮かつるやいづみり 前中納言 巨房

大木 秋風なひく狭山の暮かつるやいづみり 家隆

八國山 桑村は屬を將軍塚の西十八丁をとりて同狭山の續はあり  
て少く秀出する所を号くされり雲を凌ぎ碧空に連るやもあは

久米川



四ノ四十一

田園雜記

ふめく川と云所  
まへり里の勢く  
み八井 かわりも  
まへり たつ川  
と流て 勢たも  
ひまるとあんまう  
しんれん

里へのふめく  
川と

ゆめくれよ

ありなは  
ふめく

こめり  
こそせあ  
こそ

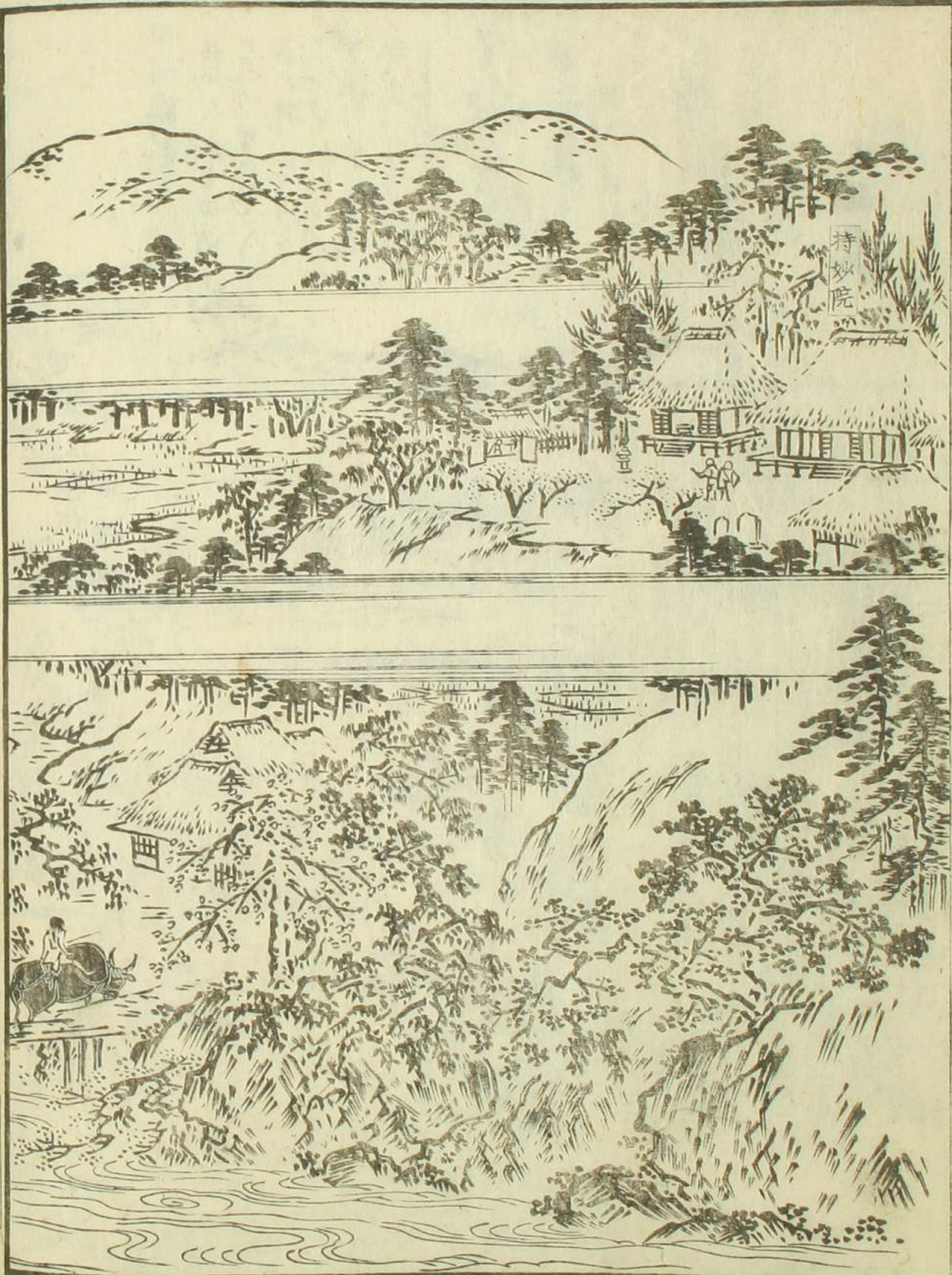
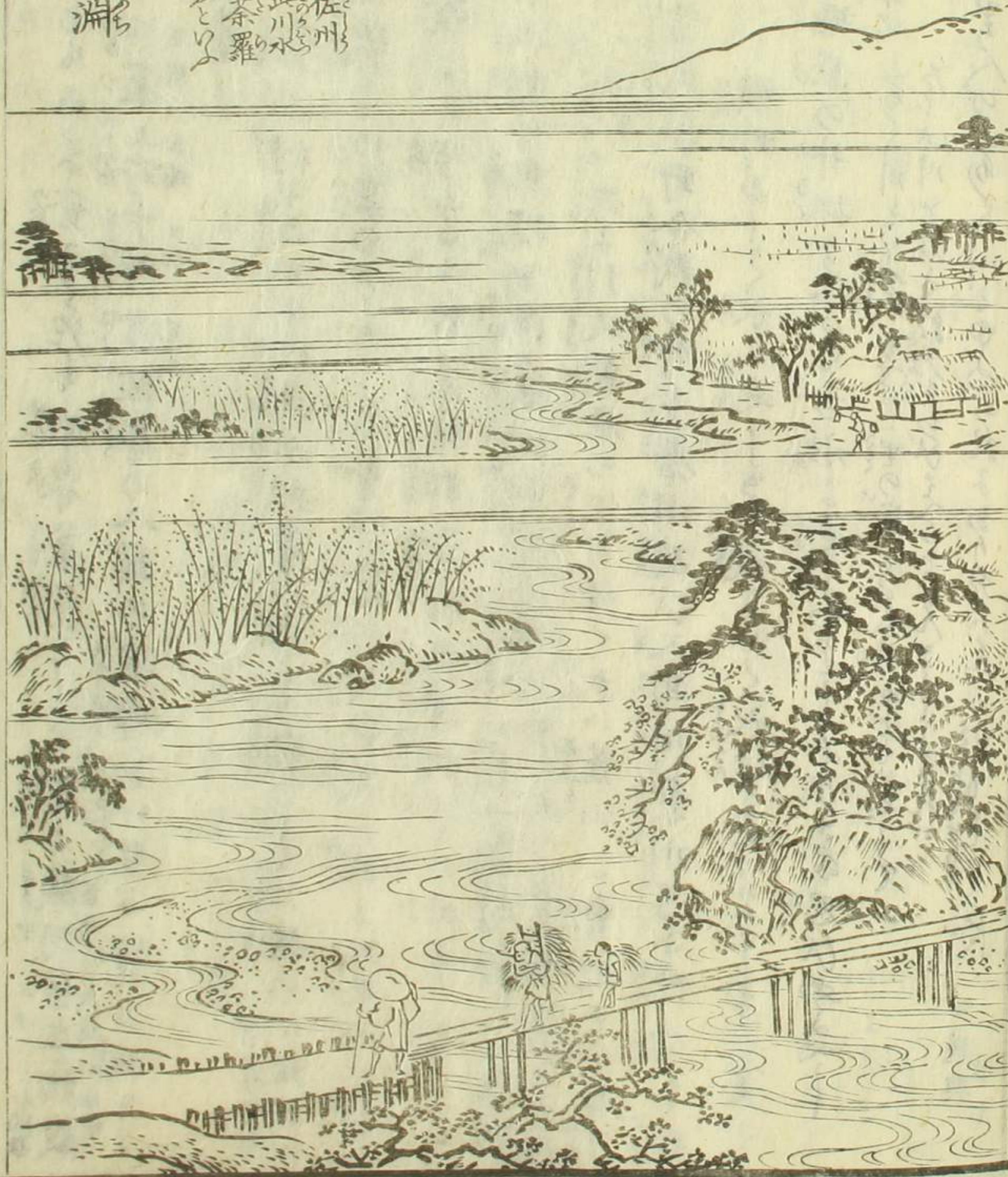
さる

道奥権后



曼茶羅淵

日蓮上人佐州  
配流の時此川水  
を以て曼茶羅  
と書くものなり



持妙院

少もともあふ登りては眼界蒼茫と一實は駿河伊豆相模  
甲斐信濃上野下野常陸等の八國の遠嶂と一望は覽る故なり  
多波山 浅間 吾嬬 日光 筑波

久米川 久米川村の西田村清水村等の地より發して二條の小流野口

村徳藏寺の裏の方より落會ひ糸川村を流る故に久米川と号す  
又二瀬川と号するものも入間郡糸村秋津村等の地より發して

多麻入間の郡境を流糸川村より落合  
夫より一里計未至り川中漸く廣く石川となる久米川より上ハ谷

徳の背武藏野合戦の時多磨川及び入間川糸川を陣營を假  
たりしり曠野ゆき水乏しき故に水辺にたりしり

又云堀兼の井杯よるも古水乏しきありと思ひやるべし  
田國雜記 糸川を沿て餘りありと云ふ井ありと云ふ

里人のとあり川とゆふれありなりハ水もせしむ  
道興 准后

大龍山永源禪寺 糸村にあり八國山より北の方小川の流を隔て

五丁沙ふあり曹洞派の禪林中に龍谷竜隱寺に屬す  
天文年間大石氏開創する所の精舎ゆき開基大石氏法名を

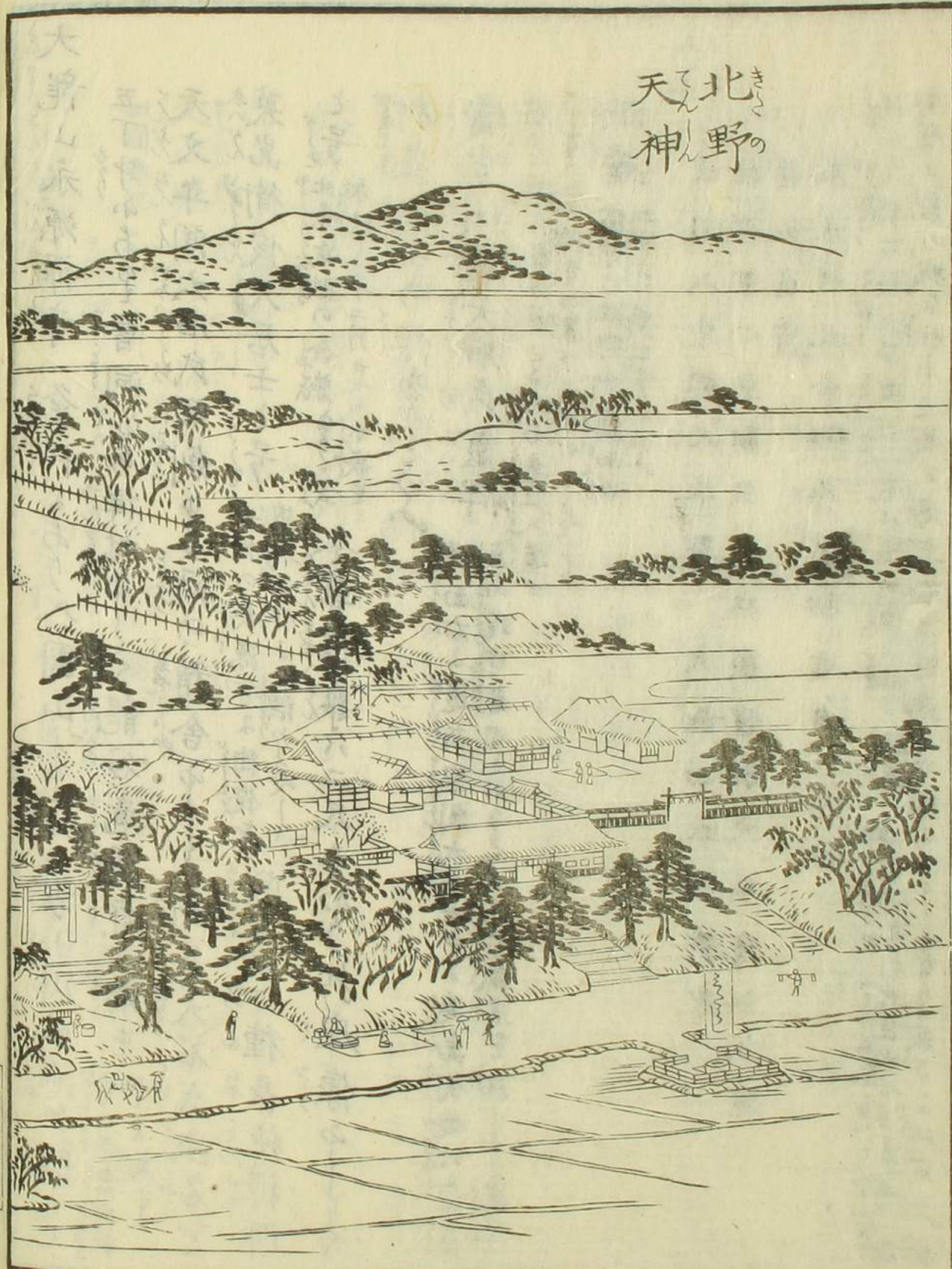
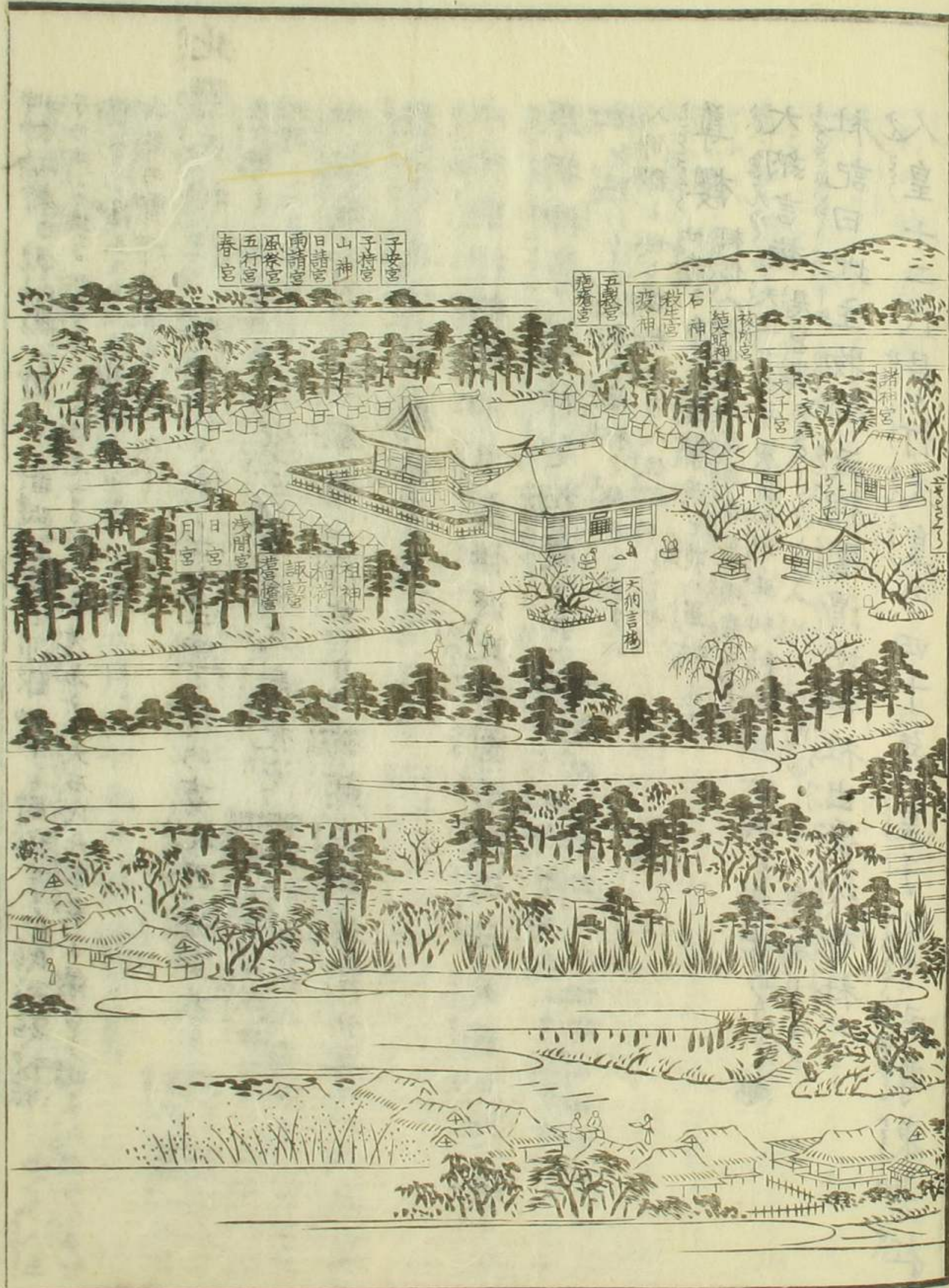
英嵩衛俊大居士と号  
安松の長源寺に衛俊を道春と作るハ洪なるべし 開山ハ一種長純禪師  
と号 北条氏照の舎弟ありと云 本尊釋尊ハ二尺をかり坐像ゆき

行基大士の作ありといふ  
當寺開基大石氏靈牌 牌面右に透岳宗開大居士中に英嵩衛俊大居士左に

當寺鐘の銘は奉る大石速江入道が  
直山道守菴司とあり三人の法名を注し 道守ハ  
洪鐘 當寺の住持雪巖和尚

武州入東郡久米郷 大龍山永源禪寺  
住持雪心叟融立 本願檀那大石速江入道  
直山道守  
應永廿九年壬戌九月初吉日

按文明の頃大石駿河入道二宮の城に住り天文の頃上杉家の老臣大石源左衛門尉  
定重戸倉の城に住り又其父定文一書定文を滝山の城にありなり然るは此定文後



神奈氏康の孫氏照を尊とす苗跡を継ぎ同國由井に居城せしむ氏照後本姓に如く八王子の城に移る此等の人の祖先なるべし依考する大石氏北条家も縁あり故に氏照の合葬を當寺に居らしめ又長源寺也  
氏照の靈柩を置く所あり

北野天神社

永源寺より二十三丁西の方北野郷にあり

花洛北野天神を祭る此号あり

又北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を

相傳天見屋根命二十六代大中臣朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔

北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を  
每歲正月十七日奉射二月廿一日ハ物部天神祭同廿五日ハ天満宮の祭めく遠近より群奉せし

本社祭神物部神出雲伊波比神國渭地祇神天満天神篁手差

原明神等の四神を相殿とす

續日本紀神護景雲二年戊申秋七月壬午武蔵國入間郡の人物部直廣成等六人

尊櫻

社前あり枝葉繁茂花ハ單瓣あり

大納言梅

天正十八年庚寅加州亞相利家卿當社を再興あり一頃

社記曰地主物部天神國渭地祇社出雲祝神社ハ

人皇十二代景行天皇の四十年皇子日本武尊東夷征

罰の時武蔵野に入賜ふ諸軍大に渴を井泉を穿り小堀兼井といふを是なり此所より時ハ老翁忽然とて来り

尊と導く此地に至らむは清泉ありく諸軍の勞を救ひふ

尊其時天神地祇劍の義神を祭らば戦はば

自伏しなるとなり物部天神國渭地祇社出雲祝神社等ハ是を武尊

是なりとの佩せる草薙の御劍ハ元出雲國八岐の大蛇の

尾より出るとを以て出雲祝神社と稱しまるとなり同四十一年辛亥正月

十七日土人集り方八丁の地ハ三神の社檀を經營す

此遺風 同年二月二十一日ハ遷宮あり

欽明天皇の十二年辛未十一月十五日武蔵野小手差原の靈神

及び日本武尊を合祭し小手指明神と崇むる又一條院乃

御宇管丞相五世の孫管原修成武蔵國の國主なり時管公の

靈ルある後長徳元年乙未二月二十五日勅許よりり花洛北野

天満宮を始く關東に移し奉らる依坂東第一北野天神也

稱しなる源義家朝臣奥州の朝敵追討の時も宿願ふよつて  
 惣社建立あり其後建久六年乙卯九月十九日源頼朝卿正  
 八幡宮一字を勸請ありてまへに本宮九社共修造せられ  
 社領二百貫文の地を寄附しあふ此時式内の諸神勸請神宮中  
 稱先大宮司上毛野元重の時よりハ  
 領地二十貫文ありしをまへに  
二十三百貫俗つりたり時建武延元の争戦社頭兵發は罹り  
 夫より後大に荒廢せり然も延文元年丙申尊氏將軍諸社と  
 建立しひびが又應仁の火に破りたを天正十八年庚寅加州の  
 大守利家卿再興あり殊も忝も御當家よ於て伊崇敬社  
 餘も社領を添もせし慶長十三年戊申伊造宮あり大久保  
 石見守  
是と司とありありし武門擁護の伊祈禱意もろかり  
慶安二年中も又四十二名の  
 社領を増しあり  
 源氏満證狀一通社司栗原氏の家も蔵せ  
 斯文左のごとく  
 寄進 武花園山野天虫食

同園山口郷内北野宮殿 虫食  
 并田島在家 在別命虫食

右任先例致伊法可律もろり狀也件  
 寛永口辛八月廿五日

右兵衛督源 虫食 在判

按此古文書源氏満なり虫食其名あるべし其とていも其花押を以て  
 考ふも小花押藪のつりなり氏満の判疑ふをろり也  
 大石源左衛門 古文書 虫食 在判  
其文左の如し

北野宮神主職もろりなりを御  
 系均其もろり也を御

天文十一年二月十五日

道俊在判

北野宮 神主殿

按道俊大石源左衛門のつりなり系村の永源寺及び安松の長源寺の系下  
 大石源左衛門のつりを詳し此二通の外も小田原北条家の朱草あり其文を  
 こつと見せり



小手差原北野神社より西北の方十三四町を隔て河越入間川等の邊  
をへく小手指原と号せり 豊島郡下徳馬村に小手指差原の舊地残り由  
其土人云傳ふと之ども證とかりあこし新井白石先生  
云く小手差原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふと今ハ觀田と云く  
終り七百餘石の地とならむと云く  
新葉集

むさしの原へ打ち懸く小手指差原と云ふはあつた  
むさしをへくはりしはあつたむさしをへくはりしはあつた  
むさしをへくはりしはあつたむさしをへくはりしはあつた

中務卿  
宗良親王

太平記曰正平七年 北朝の文和 徳元 閏二月二十日の辰に尅武蔵野  
の小手差原へ打臨み一方の大將ハ新田武蔵守義宗五萬餘  
騎を五ふ分ち一方の中を新田左兵衛佐義興を大將めく其勢都合  
二萬餘騎四方六里を扣へり一方ハ脇屋左衛門佐義治を大將  
て二萬餘騎是も五箇所を陣を張敵小手差原ありと聞えられ  
將軍十萬餘騎を五ふ分ち中道よりを寄られ去程小新田  
足利西家の軍勢二十萬騎小手指差原に打臨敵三聲時を作とバ

御方も三度時の聲を合を上ハ三十三天迄も響き下ハ金輪際迄  
聞ゆんと震し略中饗庭の命鶴生年十八歳容貌無雙は兒  
なるが今日花一揆の大將なるは殊更花を以て出立花一揆真先  
小懸あつと見玉黨七千餘騎と戦ひ揉立ち一返も返さず  
その引程を有るれ將軍は十萬餘騎混引し引立ち曾て  
後を顧む新田武蔵守義宗旗より先に進むて天下の為ゆを  
朝敵なり我ぬるハ親の敵に只今尊氏が頸を取る軍門は曝さむ  
むハ何の時をり期を過ぎとく自餘の敵共の南北へ分れ引をバ  
少も目みかけむ只二引両の大旗の引み付く何く迄も追蒐たふ  
引も策を奉追も逸足をせむ小手指差原より石濱まで坂東道已ふ  
四十六里を片時が間をぞ追付く將軍石濱を打渡ぬひる時略中  
近習の侍共二十餘騎返し合せ追蒐敵の河中迄渡懸くを  
引組く討死し其間將軍急を遁き向の岸へかけ上りあふ

落後敵ハ三萬餘騎追蒐る敵ハ五百餘騎河の向此岸高く屏  
風を立てたるが如くある小數萬騎の敵返し合せし此を先途と支  
つり日已よ酉の下ま小成之河の淵瀬もええ分む新田武蔵守義  
宗續つて渡ま小母のいさず跡つて續く御方ハな安ろぬ者哉と  
身を嚙く本陣へと引返さる新田武蔵守將軍を討漏しぬ今日ハ  
日已暮ぬもバ勢を集く明日石濱へ寄むとて小手差原へ打  
兵衛佐敷何所より扣へぬぬと相令め兵共は向まへバ兵衛佐敷と  
脇屋敷とを一所よ扣へし御渡を候つるが仁本殿小打負て東の方へ  
落ませぬ候へしとて答るるさそ差小見えぬも篇ハ敵を御方  
と問まへバ此辺小御方ハ一騎も候まは是ハ仁本殿兄弟の勢を白  
旗一揆の者共が焼くる篇を候らん小勢もく此辺は御座候とん  
るハ何と覚え候へバ夜小份もく笛吹峠の方へ打越させぬ候て  
越後信濃勢を待調へらも重て御合戦候りと申るが武蔵守

暫思案してかや此義然るべしとて笛吹峠ハいつごとと問て夜中の

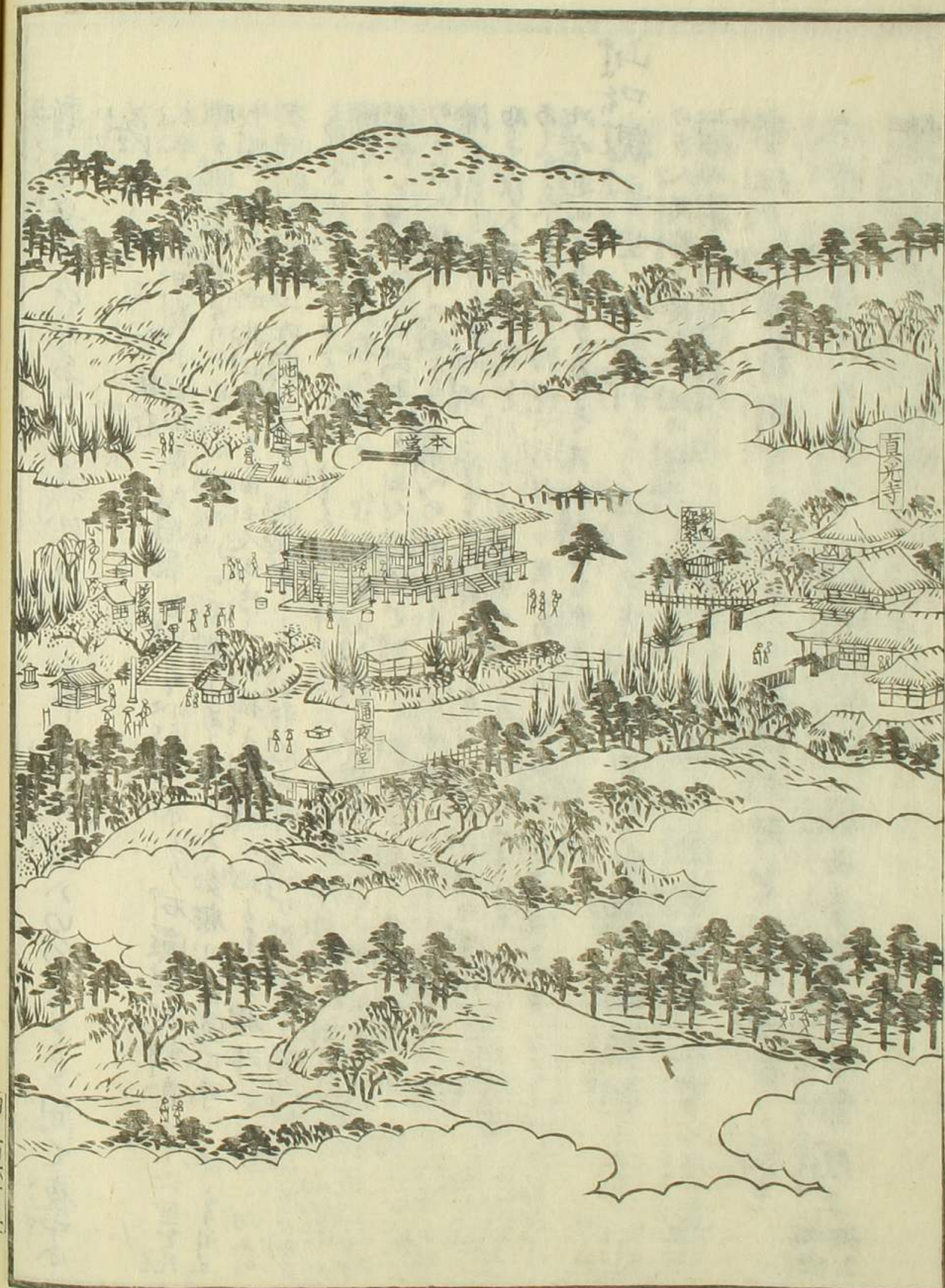
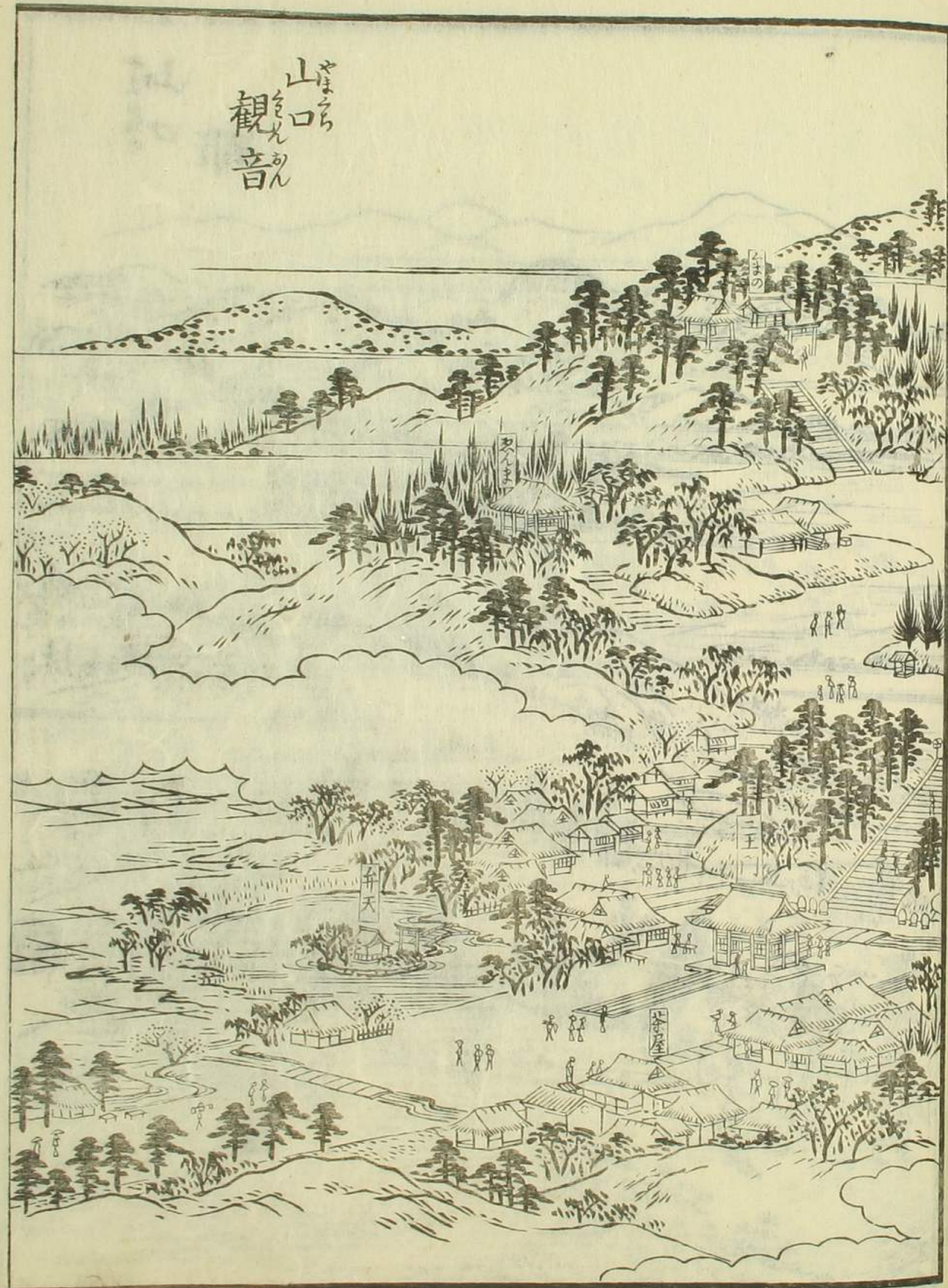
落後云々以上其要

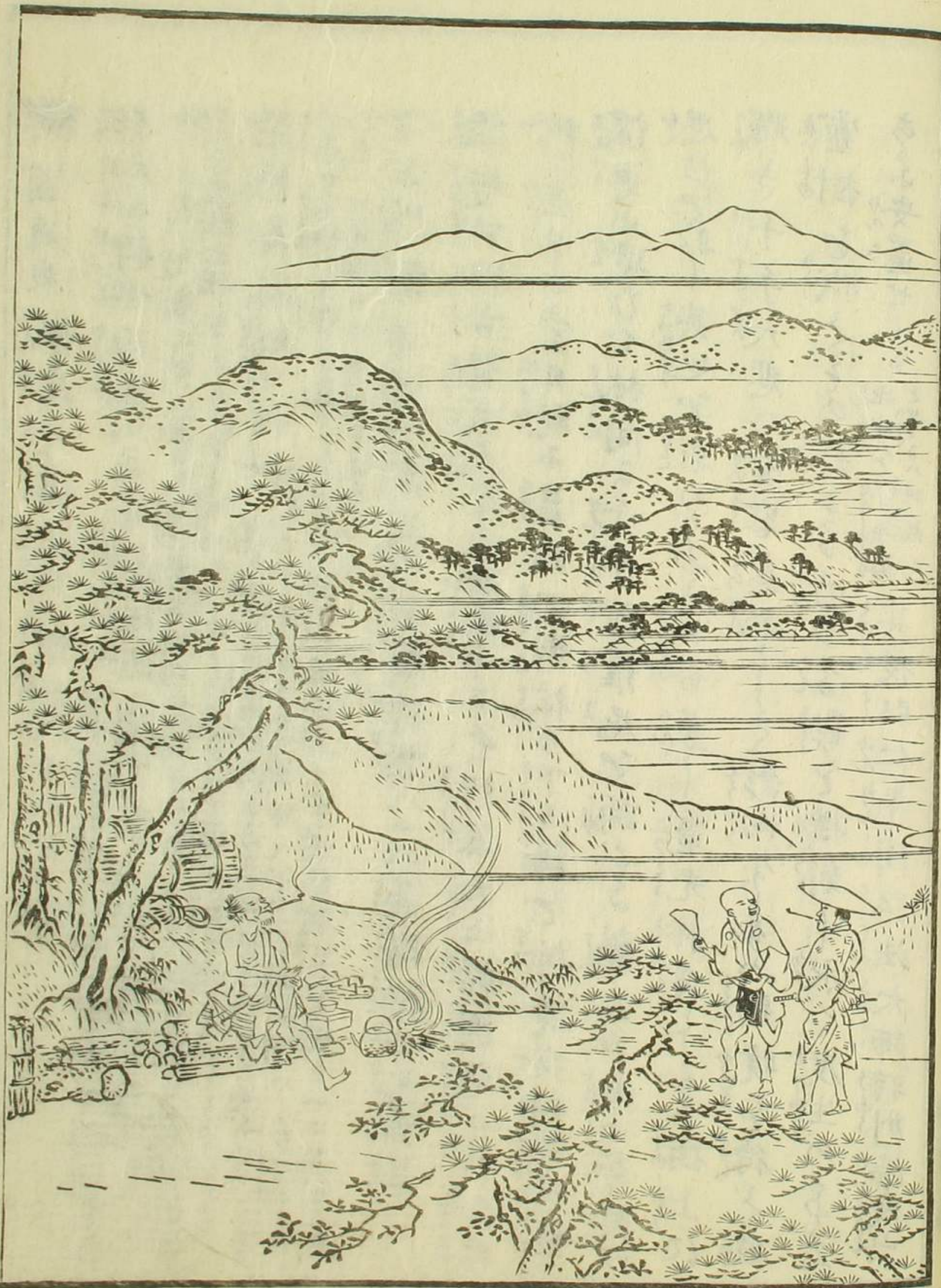
山口觀音堂北野村あり西南の方半道をかりを隔く新堀村あり  
宗江戸大塚護國寺は屬せし弘法大師を以て開祖と稱す  
本堂本尊千手觀音立像二尺三寸あり脇士多聞天不動明王  
三尺あり行基大士の作なりとも  
或ハ同大士感得の靈像ともいへり

太平記ハ新田義宗朝臣尊氏將軍を追く小の差原より石濱迄東道四十六里を片  
時之間は遠付たりとあるが隅田川の石濱あり多麻川の濱日野の津あり川上  
牛養と唱ふる地其旧地なる由土人云傳へ依據は牛濱の地より多麻川を隔て向ふ  
於西南の地と二の宮と強く絶壁なりと太平記ハ河の向の岸より屏風を立てるがや  
この小地勢相なり又同書小笛吹峠芋吹峠と書く宇須伊と訓し上野と信濃の  
國東とをさるる証者の誤り也當國此郡將軍澤村といふ地ハ古田村將軍東松の時  
陣營を布あり田路中上州へ通路あり今市宿といふより西北はあり其軍  
のこハ入間川の辺より上州への通路あり今市宿といふより西北はあり其軍  
澤と前は當く笛吹峠と号する山あり義貞朝臣分倍の軍破まは上州信州の國界ハ  
ゆつて入間川へ陣を引し其夜笛吹峠へは義貞朝臣分倍の軍破まは上州信州の國界ハ  
此峠追四里ありとあり其夜中も至りつべしと思はる

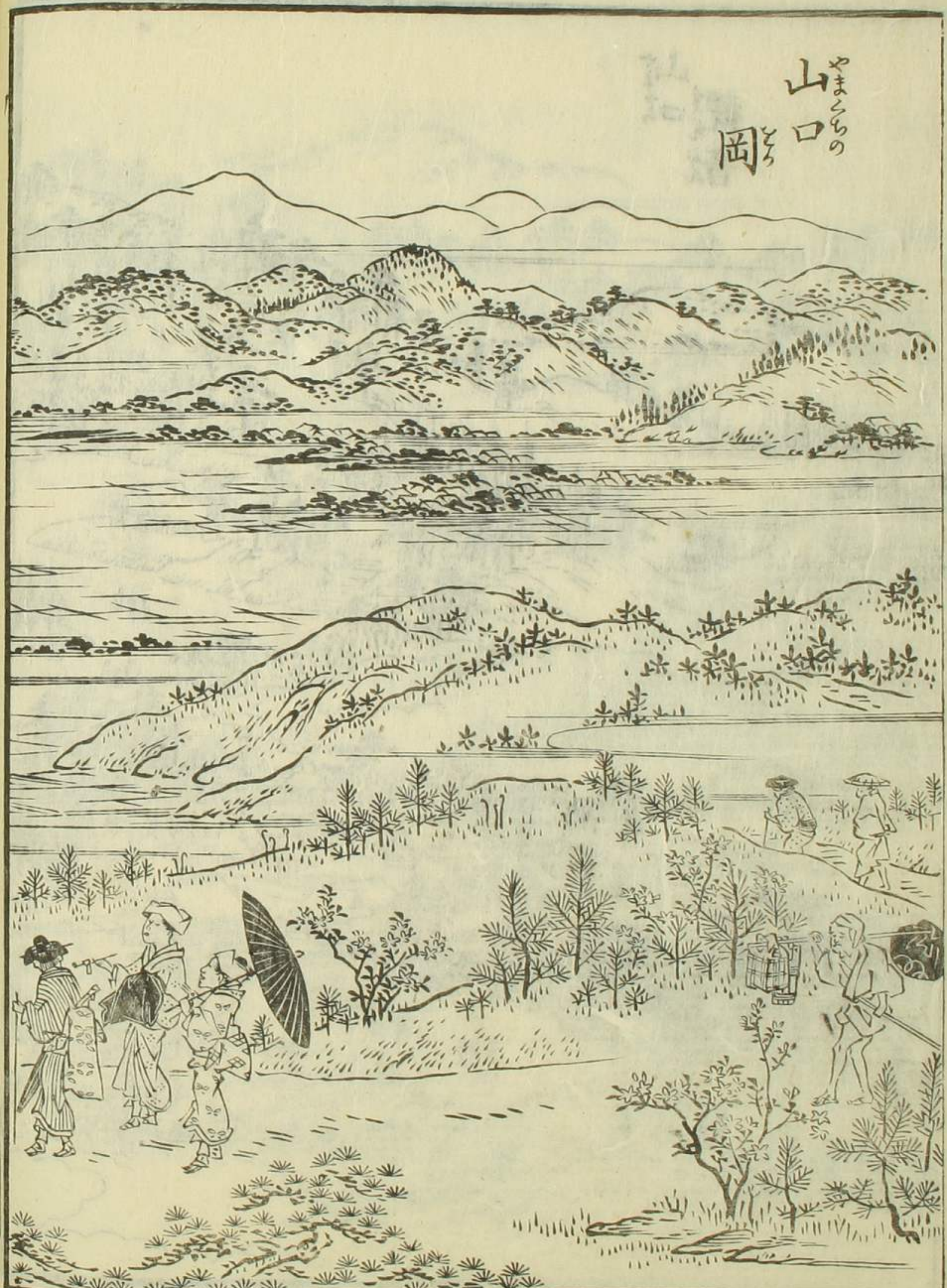
山口觀音堂北野村あり西南の方半道をかりを隔く新堀村あり  
宗江戸大塚護國寺は屬せし弘法大師を以て開祖と稱す  
本堂本尊千手觀音立像二尺三寸あり脇士多聞天不動明王  
三尺あり行基大士の作なりとも  
或ハ同大士感得の靈像ともいへり

山  
観  
音





山  
口  
岡



額 圓通殿 根嶺大傳法院僧正八十八翁筆

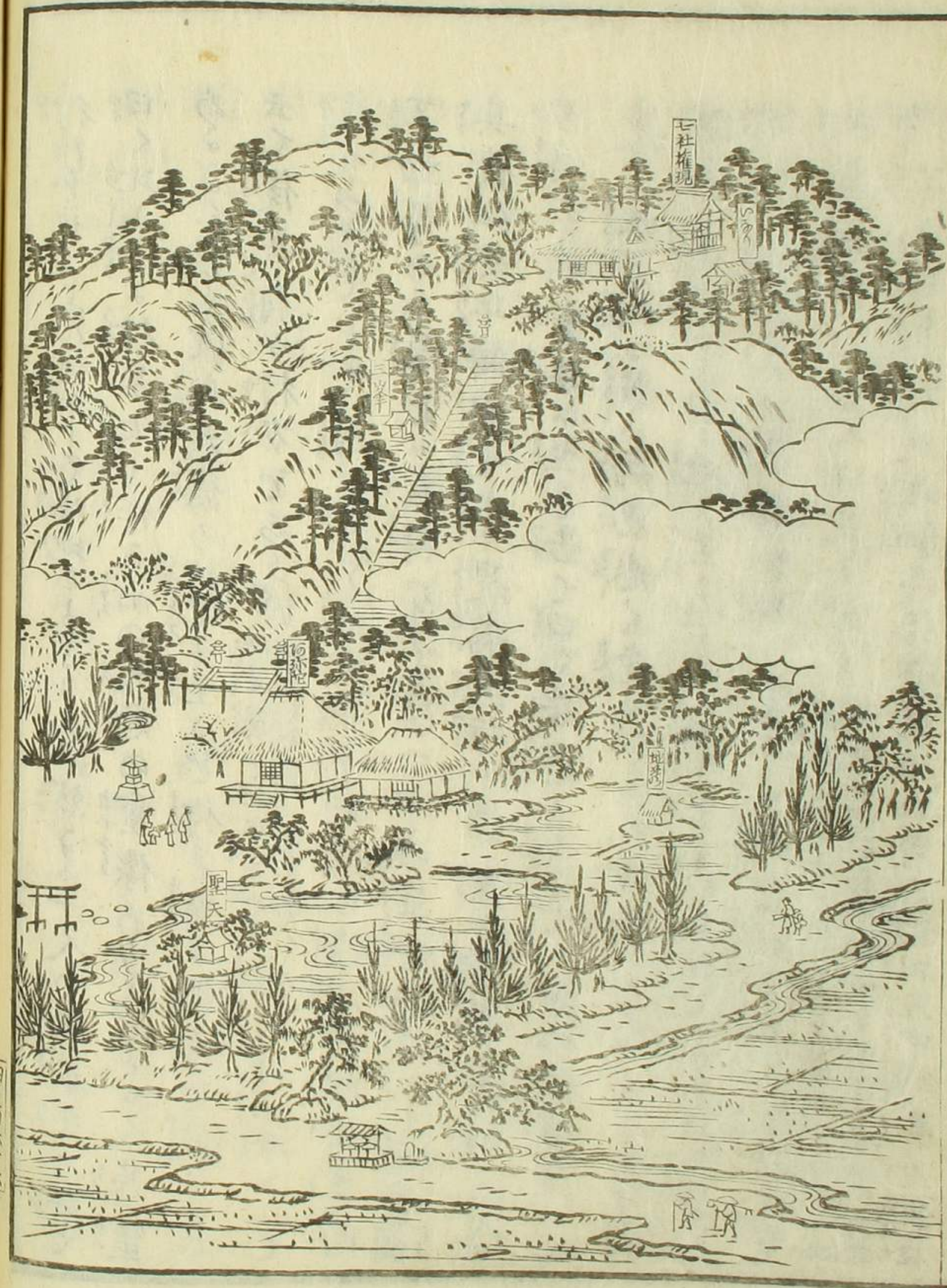
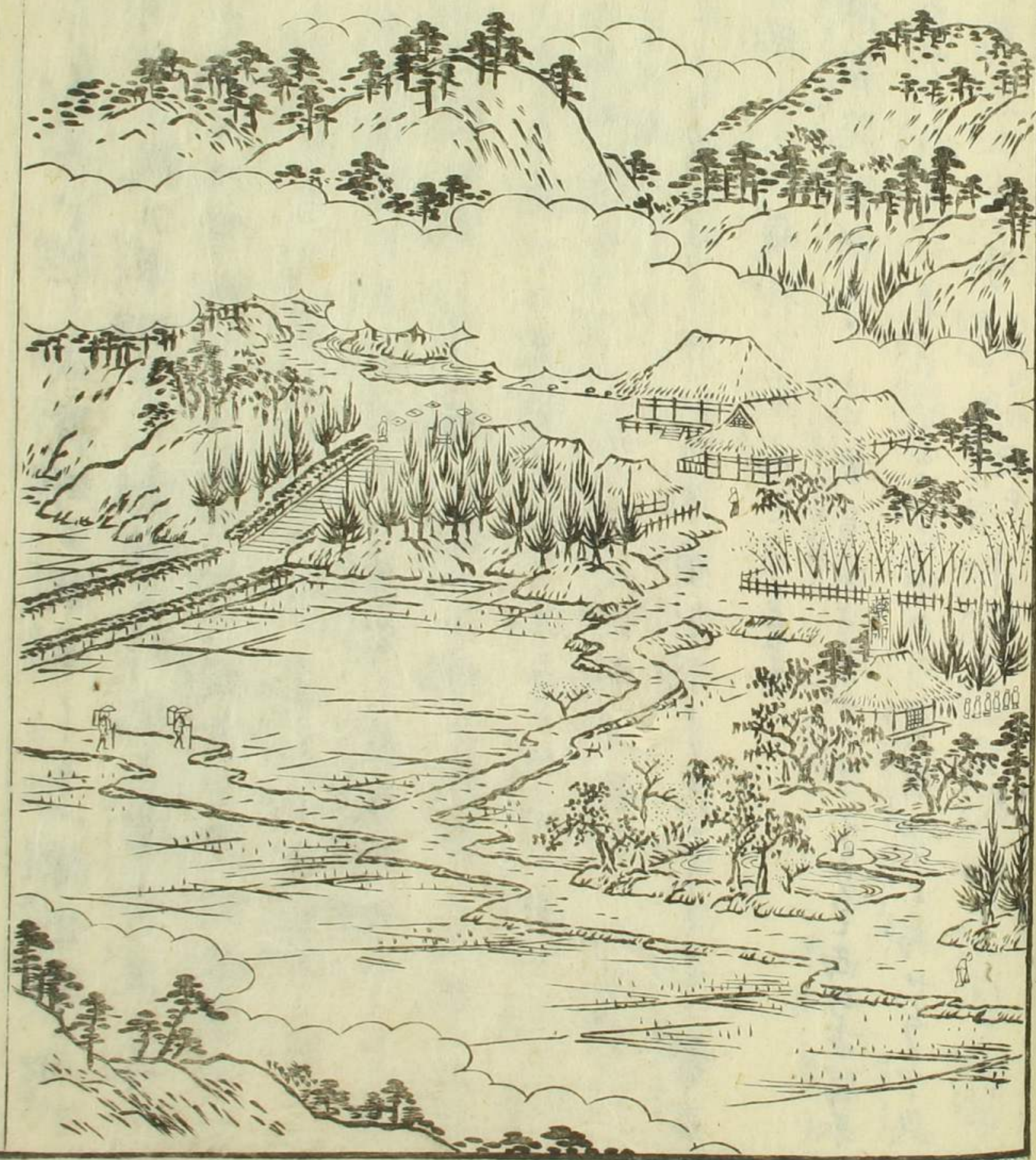
影向加持水西谷小あり 社古弘法大師一夏の間に千座の獲摩供修行あり  
ありしあり 後歲の今に至りて其靈泉早懸ち酒をうけたり一時有信の人此水中を臨んで  
大悲の影と拜 千手谷の東口の池の中洲あり琵琶の形なる故に号しとす  
琵琶島辨財天祠 室曆己卯夏當寺亮盛師人といひ池と後ハハハ泥中より  
二基の石碑を採り得たりと云 碑面辨財天の字及び年号を銘せ一ハ文敷五年  
己巳一ハ貞治二年癸卯とあり

二王門額 吾菴山 筑波山前護持院八十八翁權僧正光星筆

縁起曰往古聖武天皇の勅願ありて行基大士諸國遊化の砌此  
地に至りしあり日既暮ぬ仍樹林の下に錫を掛通夜誦經禪觀せ  
深更小違むで林間は千手陀羅尼を誦する聲あり大士奇異の  
思ひしなり其辺を求めたり異香薫一靈光赫奕とて樹上に  
輝き千手大悲の聖容忽然とて影向なりと則曉を待て彼  
靈樹を伐くとの拜する所の影を摸刻し永く度生のゆゑ  
あふ安置せし 此地と千手谷と号す此故に 其後弘仁年間弘法大師羽州湯殿宗

行むとせと死途中に此地のよきなりと然る一人の老翁来り告て  
曰く此山中は行基大士作る所の大悲の靈像ありと又一人其靈  
ありしを告げ我大徳の此地に至ると待て過し堂宇を営めんと  
云て後其翁が行方を告げ 此老翁と地主権現と依大師山中へ入て  
求むありとて翁が告ぐる所は千手大悲の像及び脇士多聞  
不動等の二尊をも感得なりと一宇の草堂を建立せ 當侍の権  
其後弘安年間國中大小疫癘流行し死に至る者少くは時二人の  
老僧ありて家毎小至り告て曰く吾菴は昔き大悲の尊像たせ  
多し来り祈る輩は病患悉く免るべし又吾庵をあらんとす  
深夜山中光あり地に至るべしと云く里民其教よきなり夜光と  
標し此地に至りて此靈像を拜しなりと病を祈り大に靈驗を  
歡喜踊躍し諸人日夜絶む 老僧の言語は就く山を吾菴と号け大師  
院と号く光明を放する 後禪の地と金剛衆嶺と稱せしを以て金衆  
地ハ山口の袂手堂なり 又元弘三年癸酉の五月八新田左中将義貞朝臣

勝樂寺



上州より義兵を起し武蔵野に旗竿一あり鎌倉勢と府中  
 分倍河原に戦ひ軍敗れて糸川に引退き當山の東の峯に  
 陣營を構ふ此時義貞公觀世音へ願書を捧朝敵退治の  
 軍功を祈らせし其夜義貞公の夢に千手大悲馬上に現し  
 親手は弓箭を与へあやむる夢覺て後感悦淺く庭  
 前の櫻枝を策とす盟て開戸の陣を發向し然る後  
 信濃の方より數万の軍勢差加る不日は相州一家を亡し  
 地を今將軍塚と号義貞誓の遙の後天正年間泰も御當家  
 櫻と云との今猶榮ふとあり  
 崇敬なりありあり寺封の朱壘を下しありあり繁昌  
 古は百倍一人天護持の靈場とありとあり  
 辰爾山佛藏院勝樂寺 山口觀音堂より十二丁をとり西の方勝樂  
 寺村あり新義の真言宗あり中戸の真福寺に屬せり中興  
 開山の真惠上人と号 元和九年正月十四日化誕也 本寺は近頃火災を亡びて新小

座像二尺をわきの十一面觀音を安置す此火災を仍て悉く日記  
 と亡たりとて草創の時世等詳なり 中興開山人とあり  
 洪鐘 當寺大方の前左の方あり銘文高麗郡とあり元禄年間災に罹り  
 之り其銘云く 銘文の後より再興の旨趣を注し添く改鑄とありと  
 武州高麗郡山口郷勝樂寺村奉新造立鐘銘曰  
 諸方空相 寂滅異名 常樂我淨 箇々圓成  
 奉日侍講供養 奉庚申講供養  
 奉念佛講供養 奉誘奉加供養  
 願主 藤原重信  
 奉修山王七社大權現御宝前依 尊海上上人  
 辰爾山別當佛藏院勝樂寺大方 法印推大僧都 奠榮上人  
 住寺中興開闢 奠海上人  
 延久三年辛亥九月十九日 本願 莫宥順說  
 初響 二見相覺妙性  
 明曆三年丁酉九月吉辰 日敬白 御大工 推名兵庫頭吉縄

此寺境の地ハ八間郡小属一ノ再ハ按ニ高麗郡也勝樂寺ト号スル寺ありク後高麗山  
聖天院ト改ヒトシ此寺の舊蹟ナルヲ考ルベシ  
七社権現宮 勝樂寺より百歩ノ東ノ方山の上ニあり山王二十一社の中七社の神ト  
古當社の一の鳥居あり一曰跡なりといひ傳ニ每歲九月十九日に祭禮修修

開山塔 七社権現の塔と彫山塔と稱されども唯其唱のりやうと塔の形と存スルニ  
あらず開山の号も旧記亡びてあれどもハ中興ノ海ノ廟塔あり地也

當寺往古ハ大伽藍ありて鎌倉將軍家累世の祈願所たり  
となり其頃ハ十二員ノ坊舎ありて魏々たりし物換星移

マシク今ハその名ノ存スル悉ク田園ノ字ニ残スリ 勝樂寺を大方  
小對ノ稱と覺シ又大坊ノ西南堂地入トシテ所小古瓦と穿ツルニあり古伽藍の  
證ニ著シ又文永嘉元文正等ノ古碑數枚と存セリ

按ニ日本紀小敏達天皇元年壬辰夏四月高麗の使人來リて表疏ト上リ其表疏  
鳥羽御書リ諸ノ史を召聚ヘテ讀シテ三日ハあつても皆讀ムあり其文字を  
爰小船史の祖玉辰爾ト云とのありて羽を鐵氣ノ蒸ク帛トリ羽ヲ印シ其文字を  
写シテ詳ク讀ム當寺山号辰爾山ト稱ス尤もこれあるべし今日記亡び其古蹟ヲ  
あつて遺蹟少クナリ

新堀玄蕃居住地 山口新堀の地ニ住セシト云太田道灌の家臣に  
して江戸谷中ニ新堀ありて故ありて少時此地ニ移住シ太田

家ニ傳ふる所の稻荷の神像を以テ一社ニ勧請シ今當寺ニ  
護法神トシ 天文稻荷ト稱 玄蕃後小豊島の新堀小飯住セシト云

よリ此地ニ新堀の号ありト云

山住彦三郎旧趾 七社権現より艮の方三丁をかりて隔々小岡を

云土人ハ山住彦三郎某の城壘の跡なりといへり 方三四丁の間と云  
山住彦三郎進テ考

此地小田家十四五軒ありて其中二見家の古文書及び旗幕の  
注文書等を藏スルものあり 鐵冶職と業とスル儀ありといへるハ二見石監

又此岡の根ニ諏訪の神祠ありて石劍と神體とを 其家ニ藏ス  
其古文書曰 其質青く銅

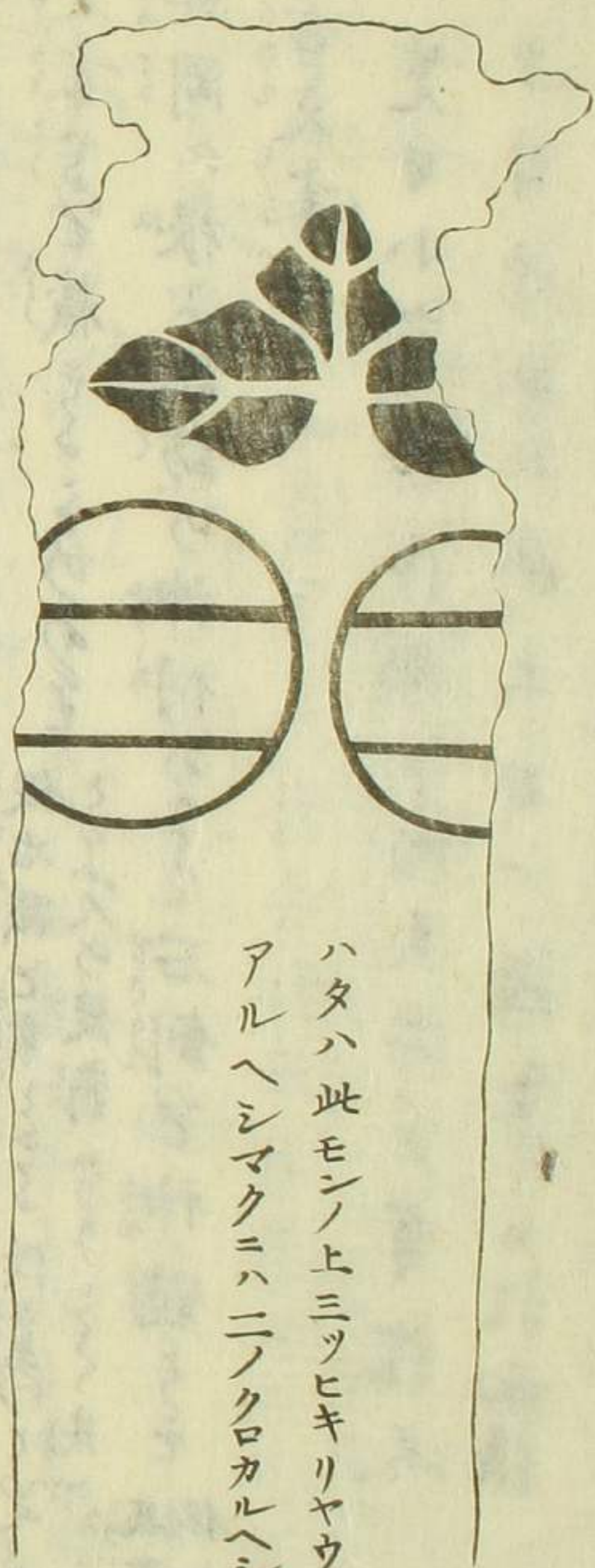
先日小室御所働々時迄也有能人  
中有御所仍大刀一腰を以テ向後  
承のお稼者也状也件

十一月二日

空哲判



二見乃盛友



ハタハ此モンノ上ニツヒキリヤウ  
アルヘシマクニハニノクロカルヘシ

箱

の池

箱根崎は驛舎の西北数百歩あり

此地ハ王子より野州日光山

按相州鎌倉松久岡過去帳天文七年十月七日生實御所左兵衛督義明八正院  
空善道也と注したり空哲の二字を分る空善道也とせしむるは古文書を  
義明より二見抄監へひりひり花押と考ふるは義の字のやいそれと  
義明の花押ハ花押教續花押教古押教等の書あるもこもを漏せし故に考ふる  
所なり猶他日訂正せしむる

奥羽等の國々相州大山へ登山とある筆色は此の通略中六七月の間に  
箱根権現を以鎮守とある故箱根が崎と稱しとる或ハ箱根崎

伊神を勧請せしむる古ハ池の周回三十丁ありありとあり今ハ新墾と

悉く耕田となり又ハ林叢と變りて僅ハ四形茂草此地となり松

風の響ハ波瀾よかたりと絶ハ其傍を存するもの今方四五十歩あり此

天の小祠を宮建せり葦菜と此地東北の岸頭より起る所の一峰を則

此地の産とせむ佳味なり狭山の首より東に連るる凡三里餘を

池と土人狭山の池とも稱せり

多ふみ草の池をせりハ水の浅く人そなき 知経

堀兼井 河越の南二里餘を隔て堀兼村あり浅間の宮に

傍もあるが小是を浅間堀兼と号せり此社前古の松金街道の

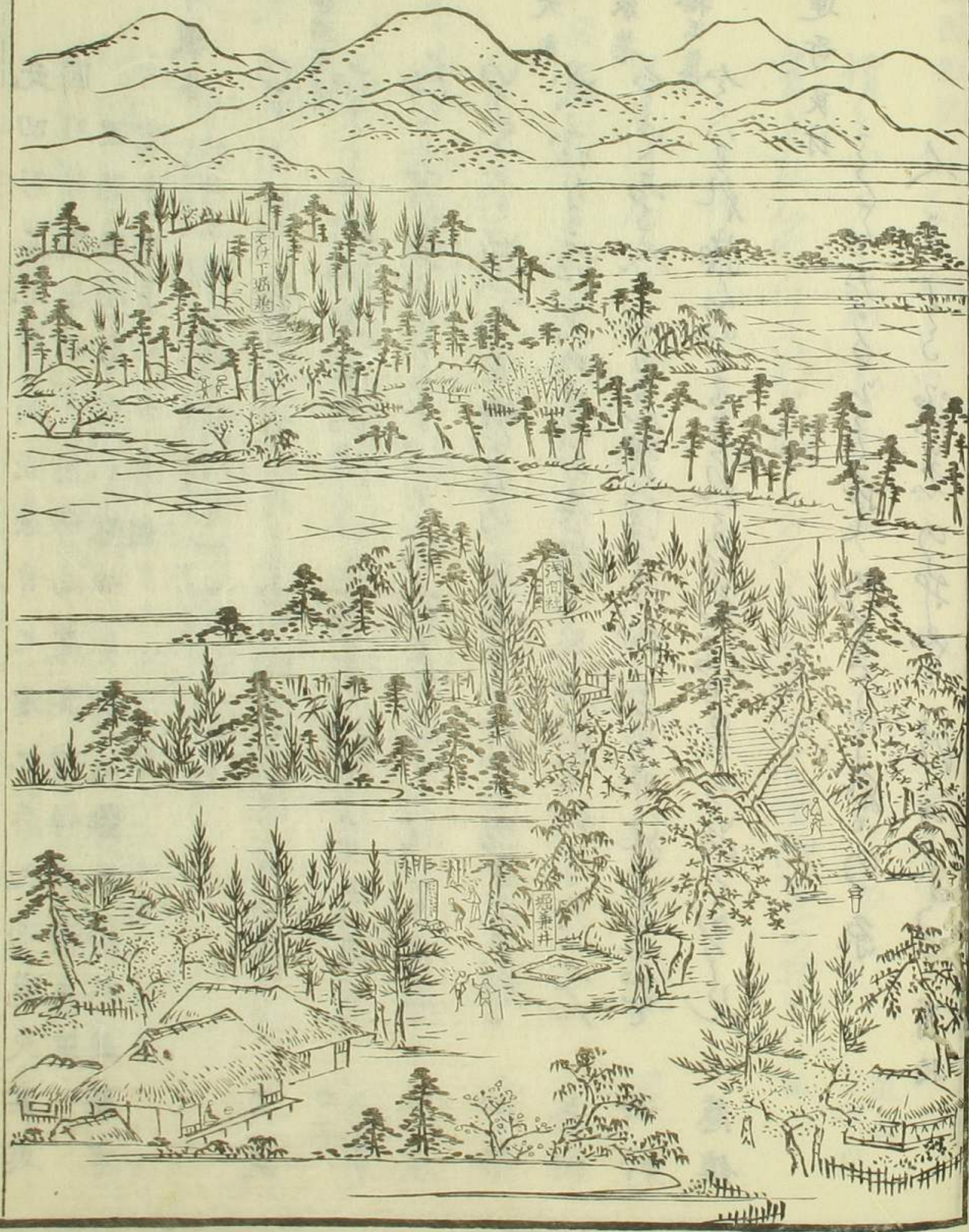
行路なり今の宮ハ慶安中松平豆州侯建立せり浅間の祠の左ハ四地を

より別當を慈雲庵と号河越高林院の持なり中の方六尺むろの石を以て井桁と半土中埋れしもの

あると堀兼の井と稱せり傍に往古川越秋元侯の家士岩田

某建る所の碑あり高と五尺餘其文左の如し

井の兼の堀



千載集

むさし

の

井も

あるもの

うれしく

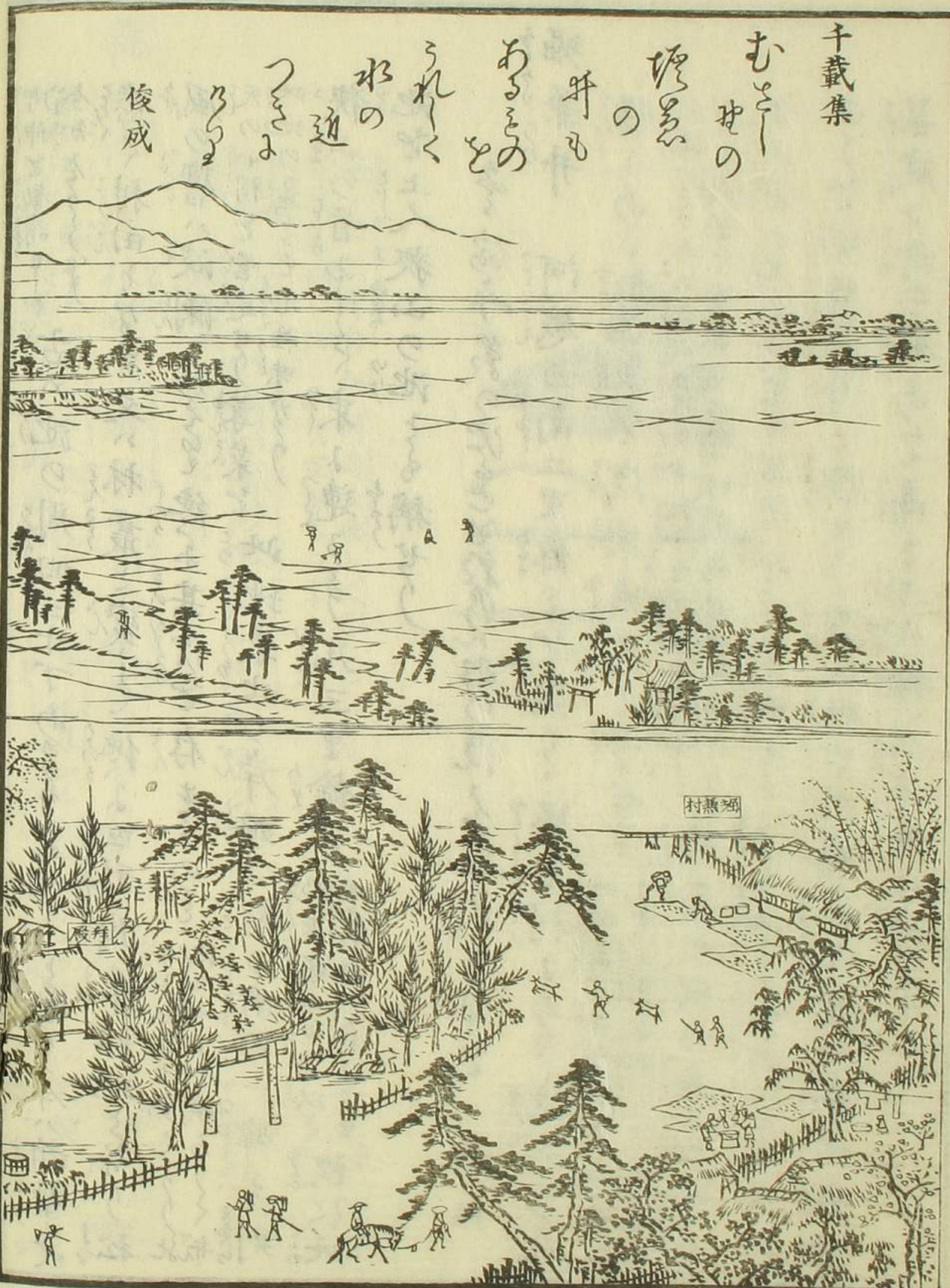
水の

道

つぎ

ら

俊成



此因石井欄之地所謂堀兼井之蹟也恐久而遂失其處  
里語堀而難得水故云亦兼通難未知只從俗耳  
宝永戊子年三月朔

十載集

法師不濁見濕土泥決定知近水のうらと

宇治百首

ひさしに於此堀兼の井もあつたを跡く水の辺のまじり

俊成

ひさしに於此堀兼の井もあつたを跡く水の辺のまじり

俊頼

ひさしに於此堀兼の井もあつたを跡く水の辺のまじり

伊勢

夫本

武藏なる堀兼の井もあつたを跡く水の辺のまじり

為相

家集

今さらぬ海をさそればまじり水のうらと

西行

拾玉集

今さらぬ海をさそればまじり水のうらと

慈鎮

連奇良材

人よもる堀兼の井もあつたを跡く水のうらと

四百七十一

田國雜記

堀兼の井もあつたを跡く水のうらと

道與  
准后

昔さらぬ海をさそればまじり水のうらと

同

里人の居せとのあつたを跡く水のうらと

同

北國紀行

堀兼の井もあつたを跡く水のうらと

竟惠

枕の草紙

堀兼の井もあつたを跡く水のうらと

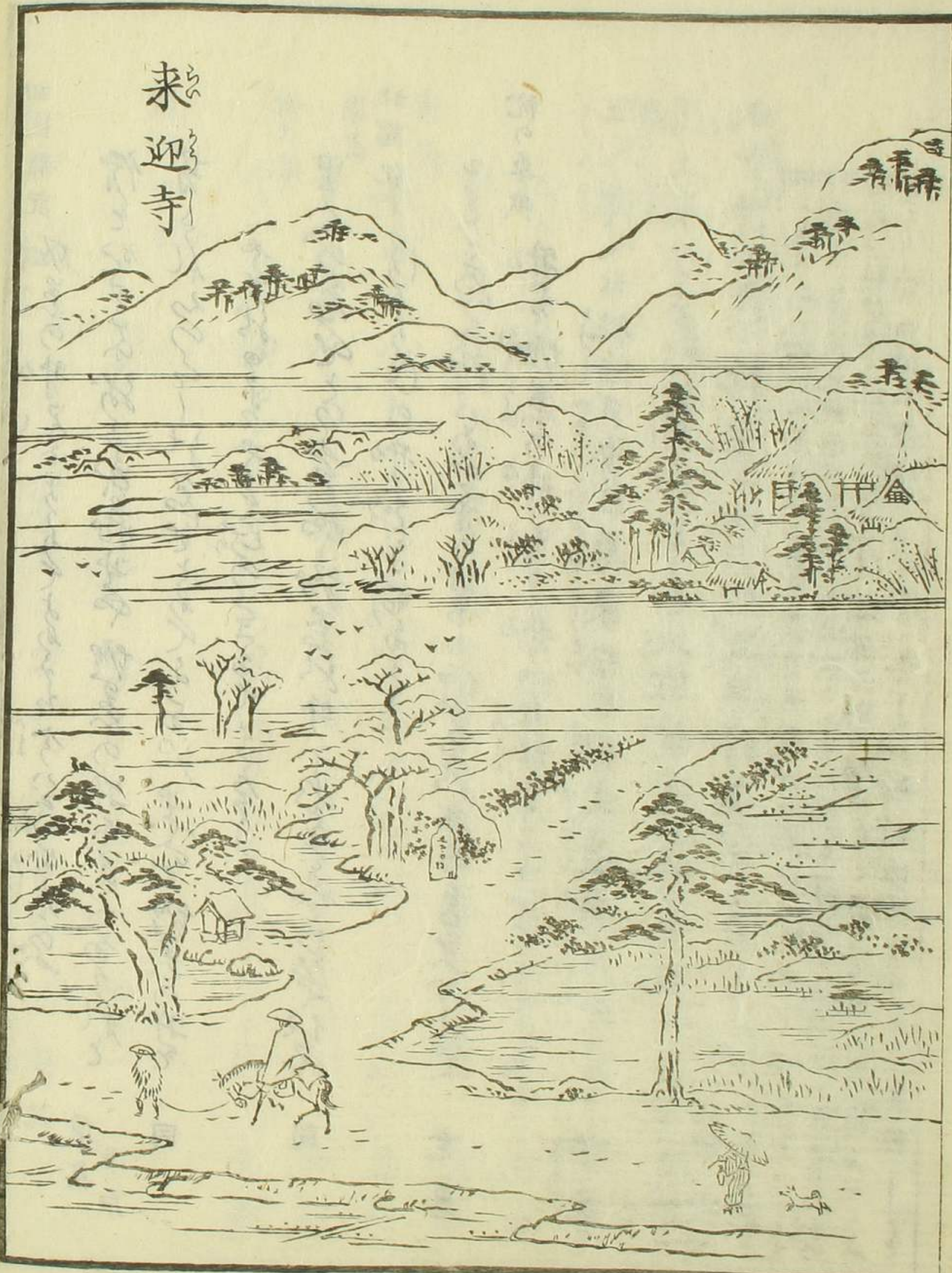
土人傳へ云往古日本武尊東征の時武蔵野水乏しく諸軍

渴及びびられ尊民をて此所彼所を井と堀らひゆるま終よ

水を得ざれば龍神を命とて流を引おひるとあり

按太平記元弘三年五月十五日義貞武蔵野の戦ひに打負て堀兼とてさし  
引退くところハ此地のむとあり又元和十三年の春光廣郷の記に於て三日ハ己の  
端ちぬむは仙波の序堂よ云くがりて此淺間堀兼のむとあり其餘

来迎寺



堀魚の井と称するものあり此地より六町半南の方より二十歩をさすの自産り地あり是とも堀魚の井と呼ぶなり又北へ向て堀魚の井と唱ふるあり字ど七曲堀穿所のものあり古ハ一村の人こゝ此井の水と汲てつとてなりと云ふも後世井路崩れ損へり今ハ所々井とありけり此水と汲てつとてなりと云ふも井の傍に雑樹繁茂して鬱蒼々として又其傍に文永文保寛正等其年号を刻せし古碑を存せし堀魚の井と稱するものあり女新田及び高井戸等の地中ありといひ堀魚の井一所あり再び按て武蔵野の廣莫なる古水よき所なりと云ふ井と堀穿つとも容易に水を得るなりと云ふ可なりと云ふ

還車阿弥陀如来 堀内村東光山来迎寺 曹洞派の

禪寺は安置を本尊阿弥陀如来ハ立像三尺脇士観音勢至

両像ハ長二尺あり各佛工運慶の作なり

龍膽ハ世俗禱と云ふ所の是なり 相傳往古奥州伊達の秀衡佛工

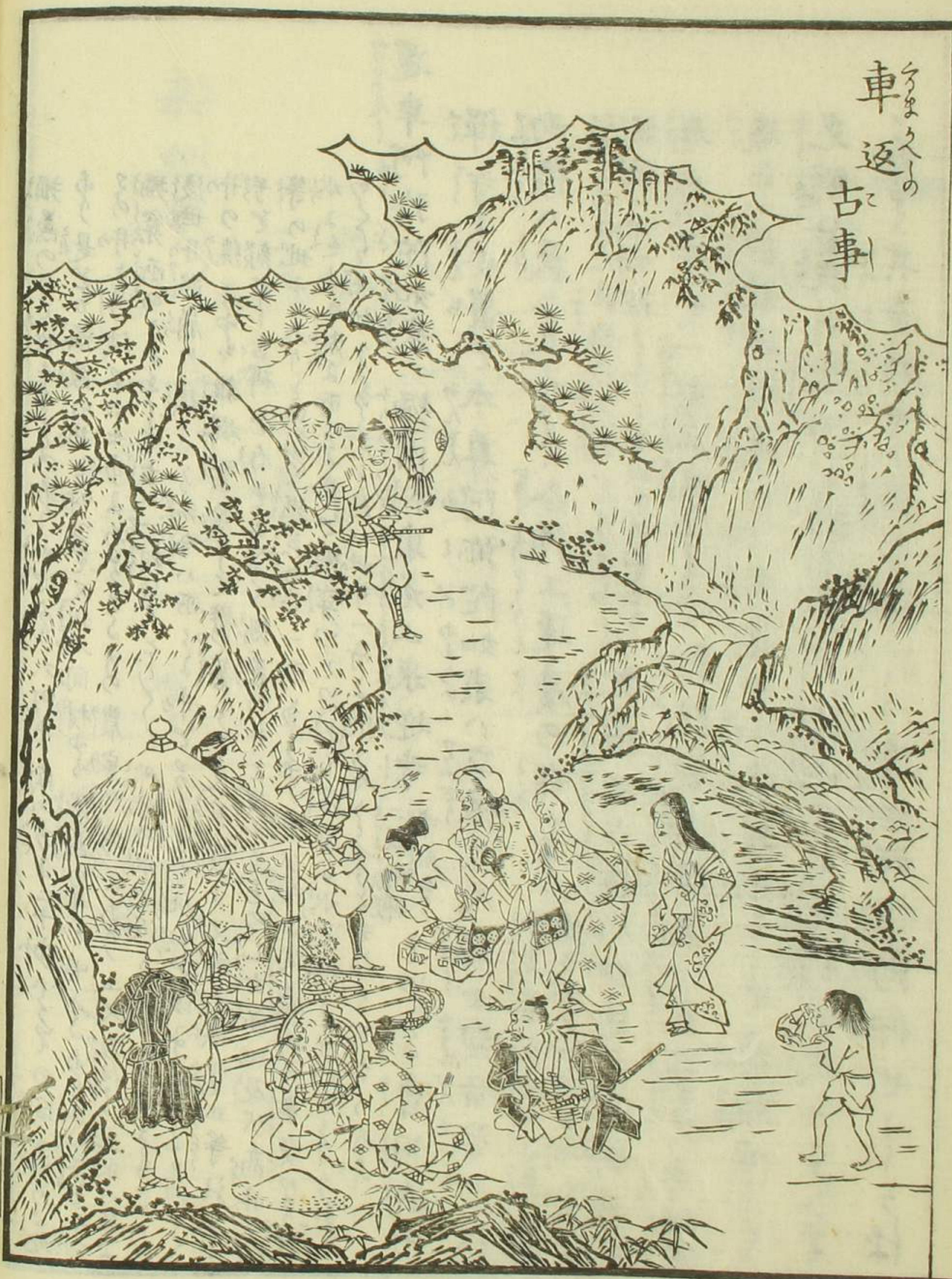
運慶とて一カ三礼あり 弥陀観音勢至一光三尊の佛軀を

造りし點眼供養の日生身の如来現然とて来臨し

光明を放ち新佛を照し新佛も又光明を放ち

其奇特せし著く遠近の道俗皈依渴仰せしは

車返古事

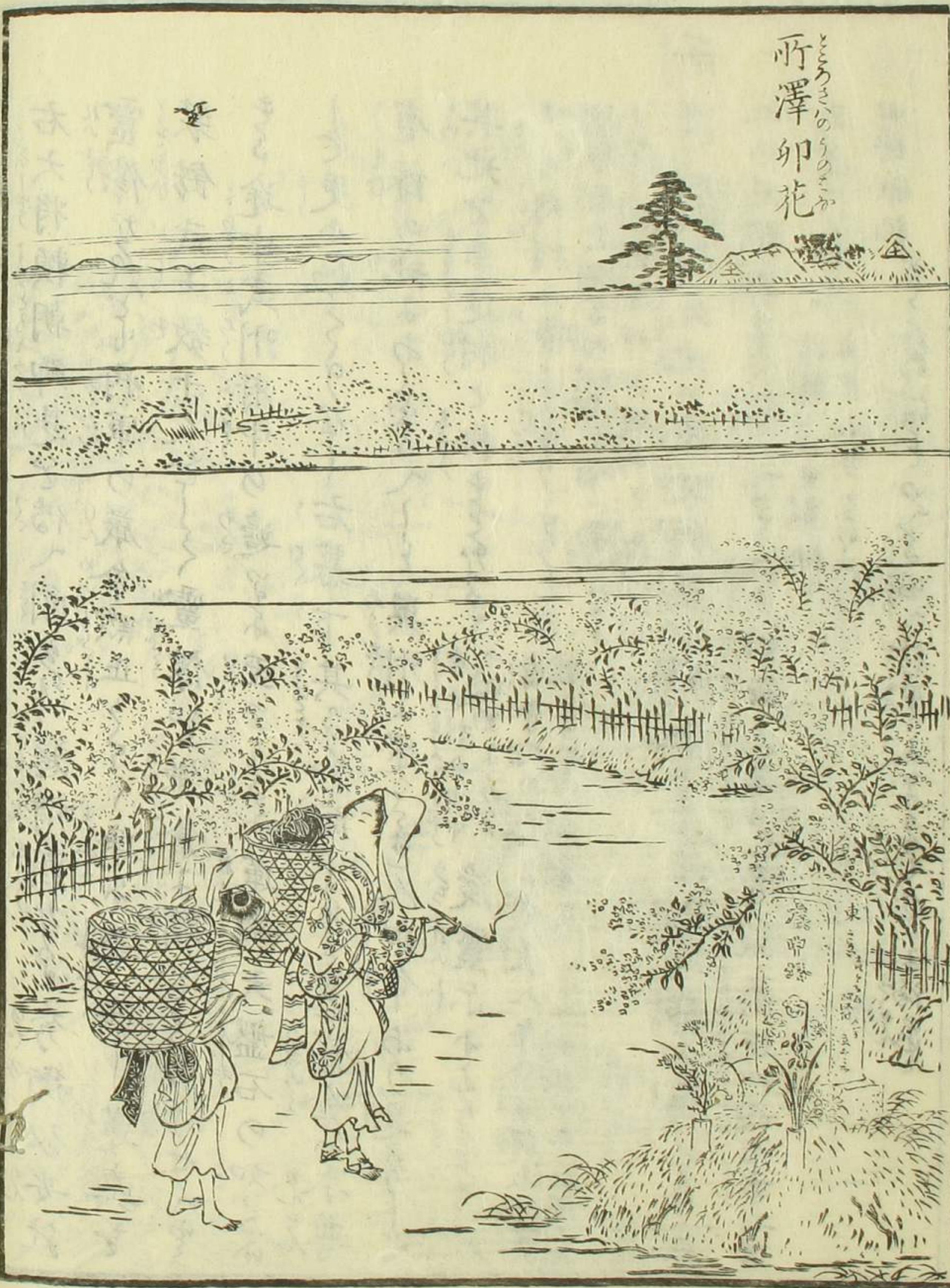


右大将頼朝卿是を傳へ聞ひ懇請願ひて秀衡秘安此  
 靈像なれども將軍の嚴命黙止がごとく速小兼諾一蓮輿を  
 装飾武士數十人をこゝ靈像を鎌倉に贈るもぬらんや  
 途中武州府中の邊に至るも蓮輿大盤石の如くふ  
 しく更小動らざるなり右幕下其を聞しめしめ鎌倉八本尊  
 有縁の地よありざるへいと奥州に還るも人由命あり是よりこ  
 其地を車返村と稱せしめり云々  
 堀の内村小安一せり云々と云  
 禪師榮芝順富大和尚の時一時と稱す  
 澤或野老此地ハ秩父街道の驛舎ゆゑ入間郡に属せり三  
 八の日市ありて賑ハへし江戸四谷大本戸あり此所近ハ西の方七里  
 ありりり  
 河越へ四里青梅へ  
 五里ありとのみ

田園雜記

こゝに海とつる西へ松見よまうららるる海と

所澤卯花

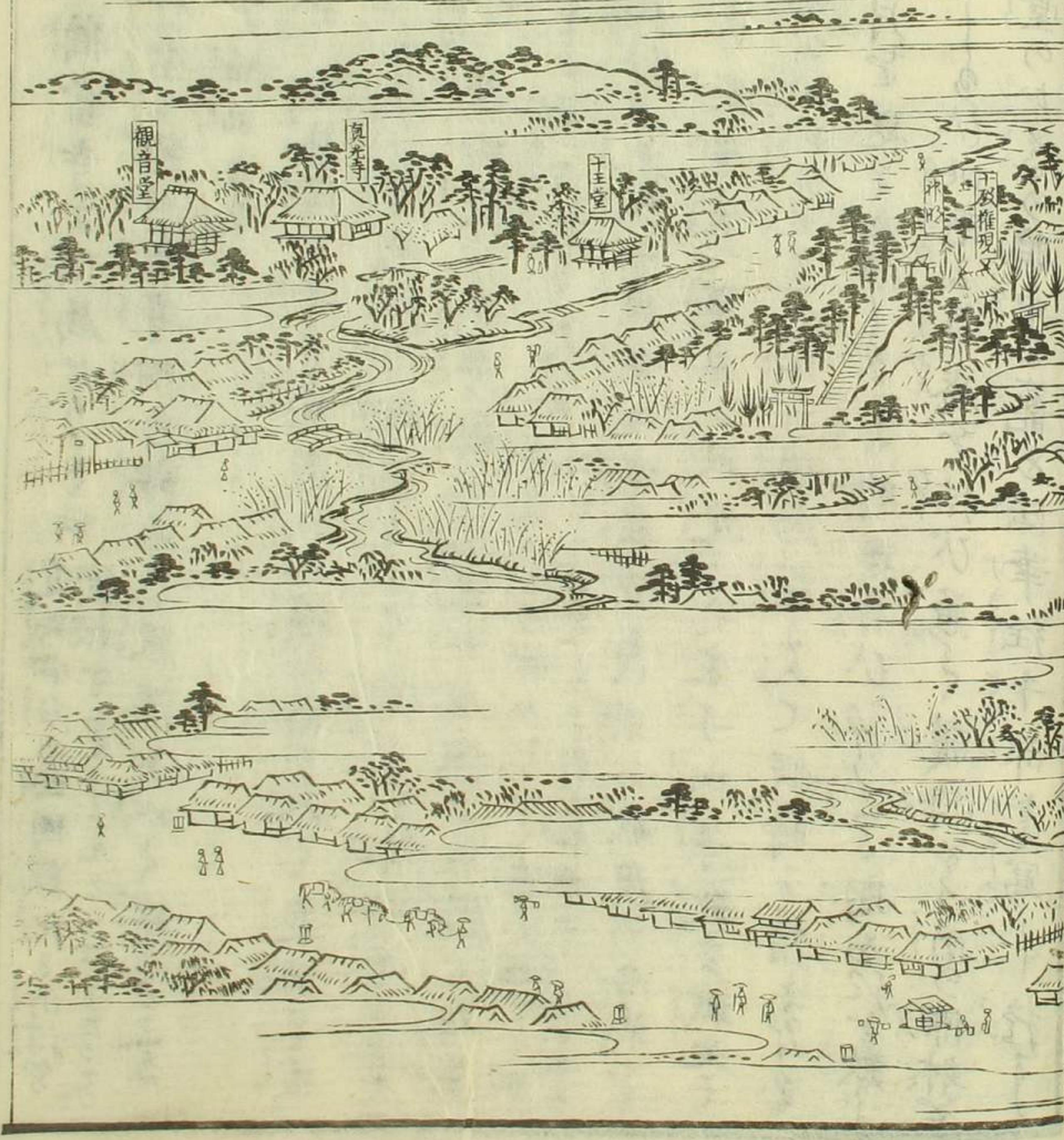


此の地は... 道真  
 准后  
 此地の細の  
 字は残すは福泉塚と号するものも多し土人といふも今ハ其名をさる人  
 されはなりゆき

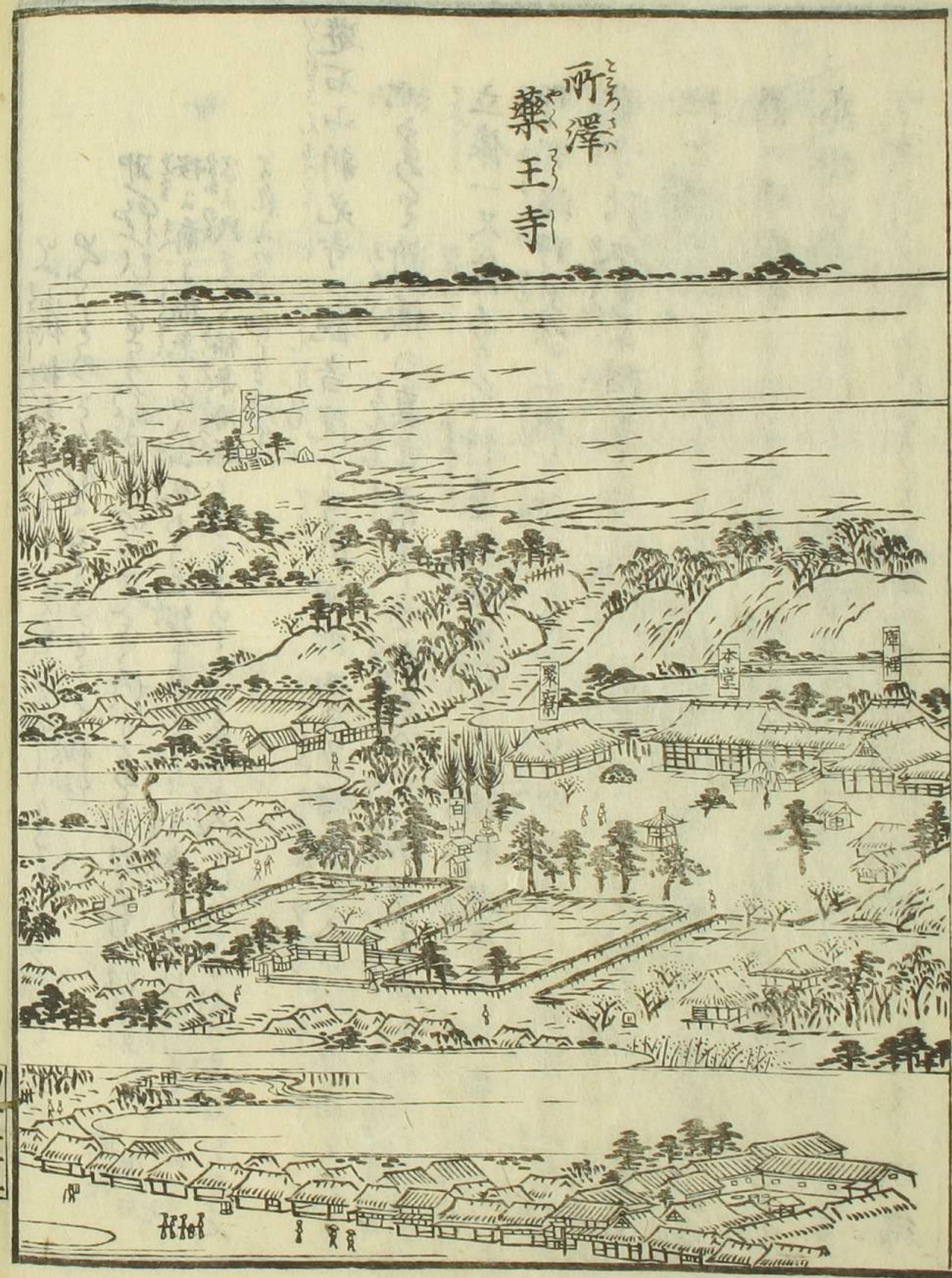
遊石山新光寺

觀音院と号は同所西の方驛舎の入口河原宿といふ  
 地あり新儀の真言宗中々成木の安樂寺は属を本寺正觀音  
 立像一尺餘あり行基大士の作といふ相傳建久年間頼朝卿下  
 野那須野及び三原を狩りし時假らし假家の跡の地を  
 當寺に本寺を附せし其後星霜を経る兵乱の劫其  
 地を他小掠せられし元弘年間新田義貞公北条高時征  
 罰の項當寺に至り本尊を祈願を籠られ後鎌倉を攻入り  
 高時を亡し多し一ふ靈像の加護なりとあり貴み凱奇  
 の後前を掠られし六石の地を再び寄附あり連綿

田國雜記  
 とつろふとつろふ  
 極後よまうり  
 小福泉と云山伏  
 観音寺とささ  
 えとささ  
 小嘉瀬とささ  
 とのささ  
 ささ  
 佐佐  
 珍抄ひの  
 ささ  
 ささ  
 ささ  
 中老深  
 うね  
 道真准后



所澤  
 薬王寺



今猶當寺に附属せりと云  
 道興准后の四國雜記に所澤の  
 觀音寺ありてさきえり四つたると  
 わるる當寺 什宝に新田家寄附の鞍あり黒漆を以て塗るる工ふ  
 中黒の紋を描画あり

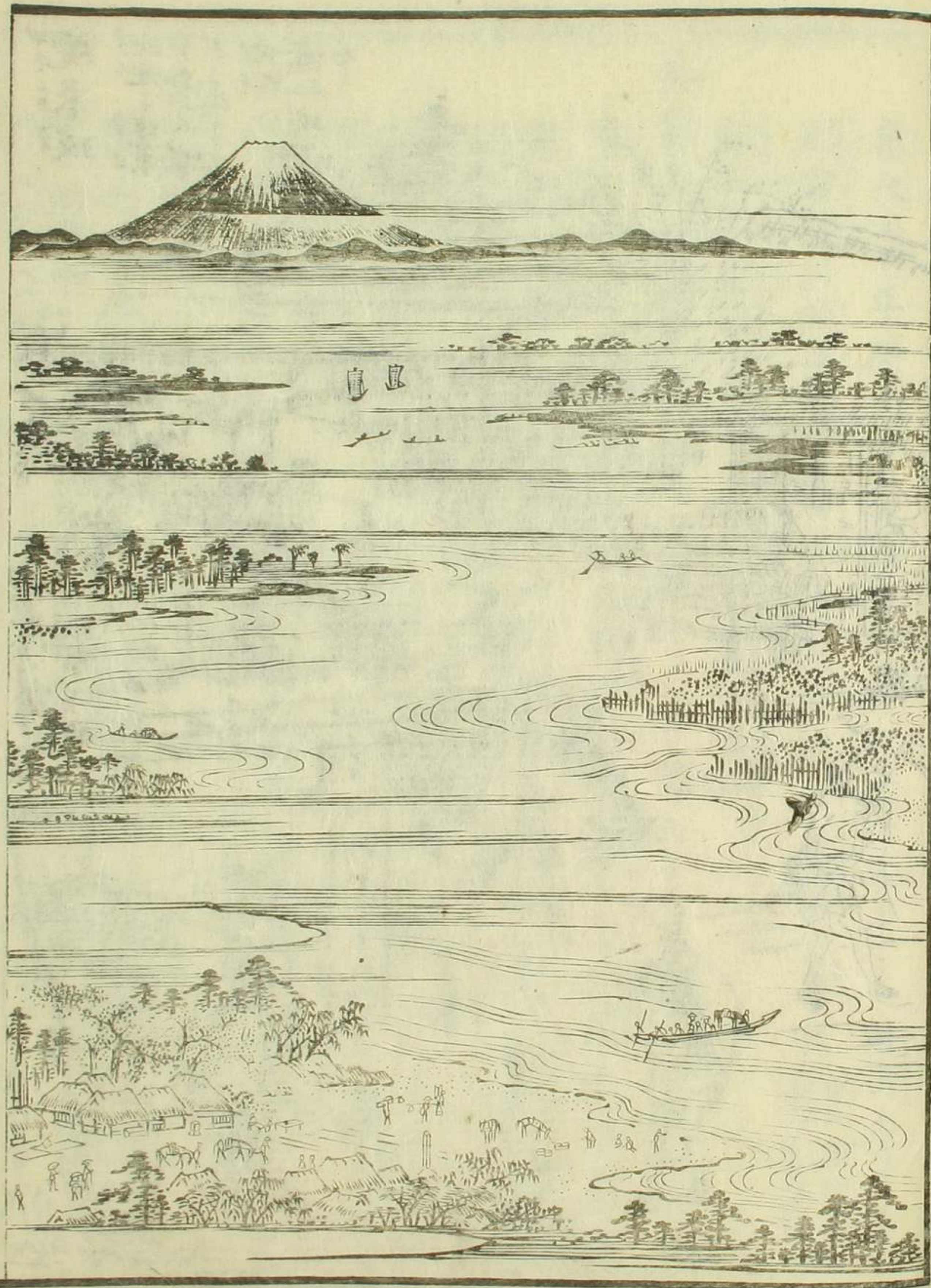
東光山藥王寺 自昌院と号も同所北の横小路を入る裏通と道  
 より向ふ側より曹洞派の禪宗中々々桑村の永源寺に屬も  
 中興洞山の孝山 藥師堂の本尊藥師如來を座像三尺計に行基  
 大舜和尚と号 臺座ハ金の針金を以て造り極め易  
 大士彫造せる所なることなり  
 宝龕を開 相傳ゆ元弘の頃新田武藏守義宗公教度の合戦と  
 企むとつへども家運衰へ軍毎に敗走し家子郎等數多戦死を  
 依て義宗公此地に至り一字の藥師堂に入て假時僧とかりを  
 忍びて年月を送るありし頃も時運再びゆるる期ありと歎  
 終に發心し此所を草庵と結び篤く護持せる所の佛跡と  
 以藥師堂のなるの胎中を籠め法華經千部書寫し終り

戸田  
 羽黒靈泉

椋の木の中  
 間控より  
 靈泉涌  
 出を請人  
 これを汲得  
 て病ある  
 者服飲  
 せむるに  
 驗ありと  
 て近頃も  
 本草綱目  
 半草綱目  
 ありて釋名  
 を上池水と  
 してあり

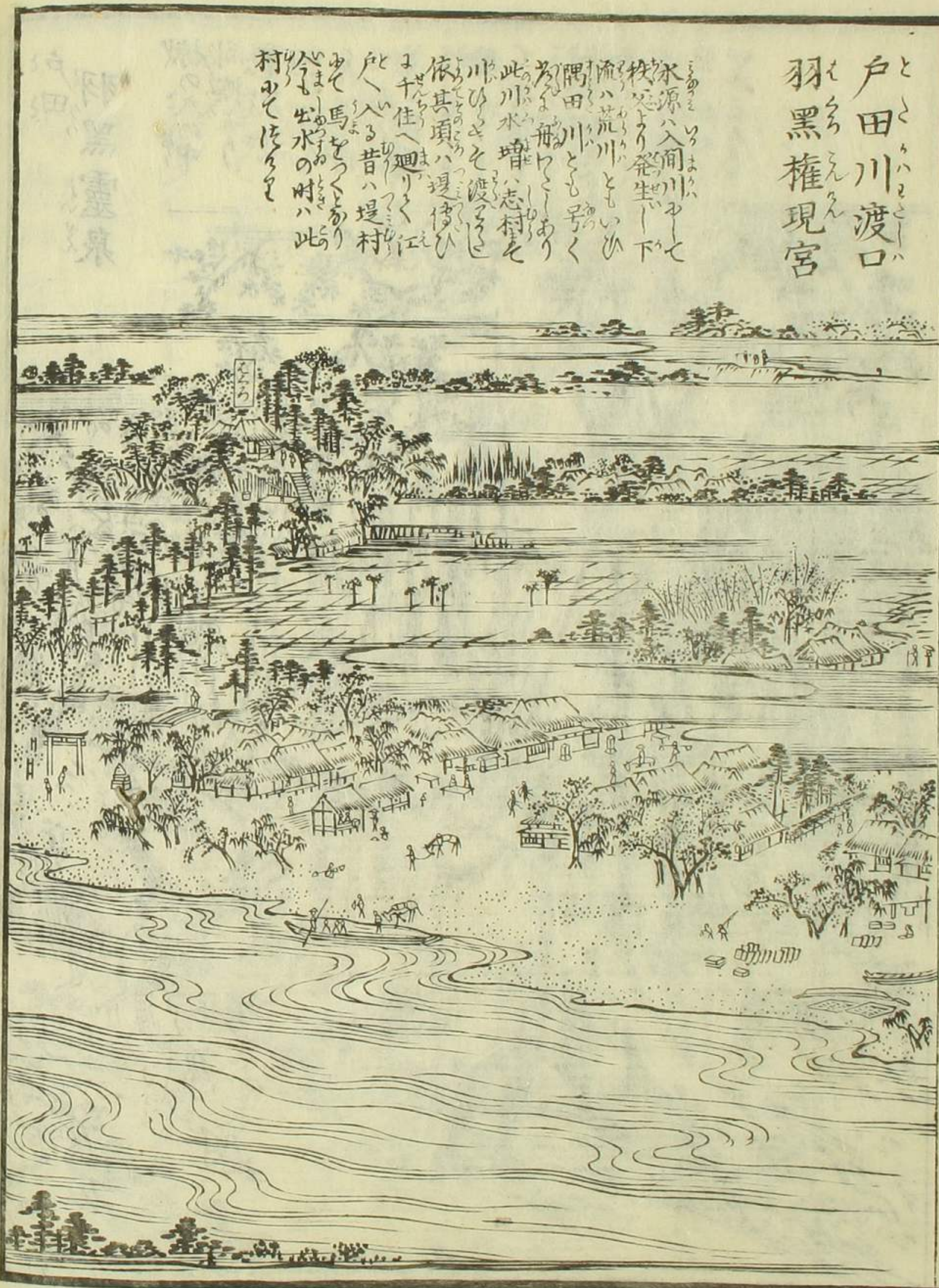






とくは川渡口  
戸田川渡口  
羽黒権現宮

氷源八間川下  
我より発生し下  
流ハ荒川といハ  
隅田川とも号ク  
為全舟ワキアリ  
此川水増志村を  
川ひよを渡すに  
依其項ハ堤付ハ  
子住廻り江  
所ハ昔ハ堤村  
少ク馬をくあり  
今も出水の時ハ  
村ハてはる



燒米坂

此地は燒米と稱す家あり故に名本名ハ浦和坂あり



應永二十年癸巳三月朔日壽齡九十一歳やと逝去ありと云

則當寺に開基やと自性院義英源宗庵主と号に昔ハ藥師堂の存してその世

蘭善と云を知らむとなり寛永の頃やと一字の

長誓山妙顯寺 戸田の渡口より二十町ありを隔て西の方新

曾村あり 戸田の羽黒権現 日蓮宗の本寺やと弘安三年庚辰

當國新倉の領主隅田五郎時光との人開基を寺記云時光ハ

新倉に住む弘安二年甲州身延山に至り日蓮上人を謁して祝髪し 惟康親王に屬し

名を日徳とあり云云二年乙丑十二月十二日寂を當寺第三世と稱せ 岡山ハ六老

僧弟四位民部阿闍梨日向上人なり 宗祖上人の旨に任せ當寺の阿

總州法花谷の草堂に 於て尔寂世壽六十一 中老僧日法上人の作かり世に子安日蓮

本堂日蓮上人の像を安置を 上人と稱せり等身やと物に腰をうけ

釋迦牟尼佛堂 本堂より左の方あり本堂より廊を備く世に子安釋迦

所の念持佛なりと云文永八年其妻難産を愁く頃時光の夢に 告て日蓮上人の妙符を乞ひ安産ありと云靈像なり

寶藏 釋迦堂の後池の中島あり當寺第一の靈室

開山塔 本堂の左あり日向上人及び阿基陽田五郎時光四世日賢尊師の石塔也其並ひくあり何れも當寺三十三世の住侶日統師造立する所なり

寺寶子安大曼陀羅 宗祖上人の真筆なり此曼陀羅の如護あり

慈眼大師消息 身延山三十一世時光上人、墨田五郎時光鞍燈

法華經開結 時光宗祖上人祈念をも自の室の雜座をのれ利益亦依る

鬼子母神影 日向上人常子鬼子母神と云信十三歳の年法花有題の

宗祖上人真骨舍利 上人入滅の時時光の願し應し當寺

日向上人の日蓮上人画像 土佐光信 法華經一卷 室徒は如徳尼と号し

寺記曰文永八年辛未日蓮上人官府の命により法の為は佐渡

鳴子詣せられその年十月十日上人相州とゆく武州糸川は

宿一翌十一日新倉に至るも時新倉の城主墨田五郎時光

其室の難産なると上人は告ぐ救苦の祈念を需む上人是を

と路傍に叢祠を坐を備け邊に清泉を汲く硯水と曼陀

羅及び安産の符を書たまひ是を授く曰く信心深く人必安産

なり又生所の兒も男子なり長あるの後ハ報恩の如く

出家せしめをふく此地を立退り其日時を隔てて安産

あり生る所の兒も又男子なり一ハ時光悦ぶ限り殊に

大士は曰ふ符節を合せたるが如きを奇とし其兒を徳丸と号く

其時の曼陀羅今猶存へて當寺の什宝なり又安産の時光是より宗教を

其項上人の憇ひあり地を封し一字の精舎を開創せん

大願を發起し同十一年甲戌上人鎌倉の赦免を得る後身

延山に隱栖あり一ハ弘安二年己卯時光其子徳丸を具し

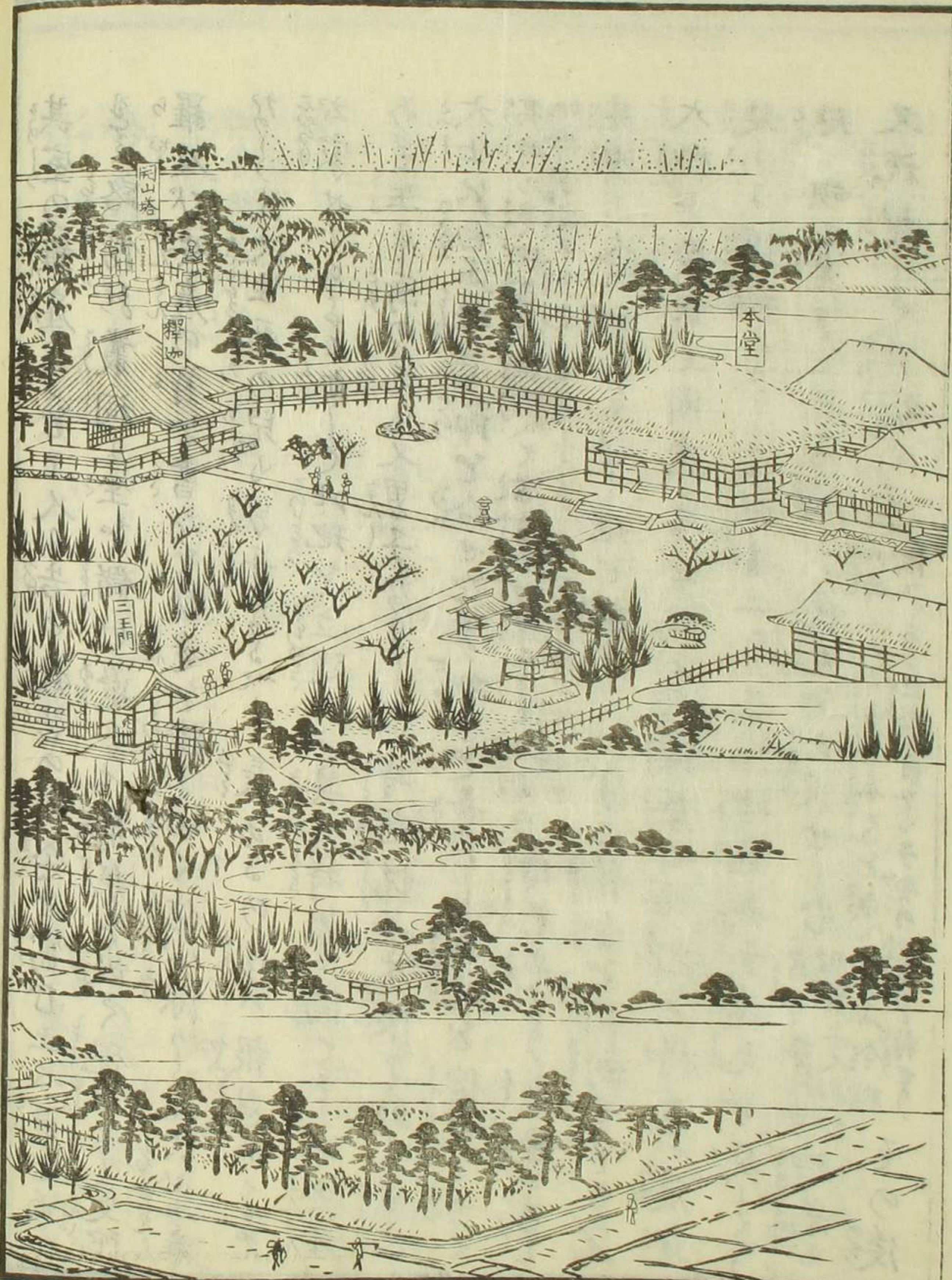
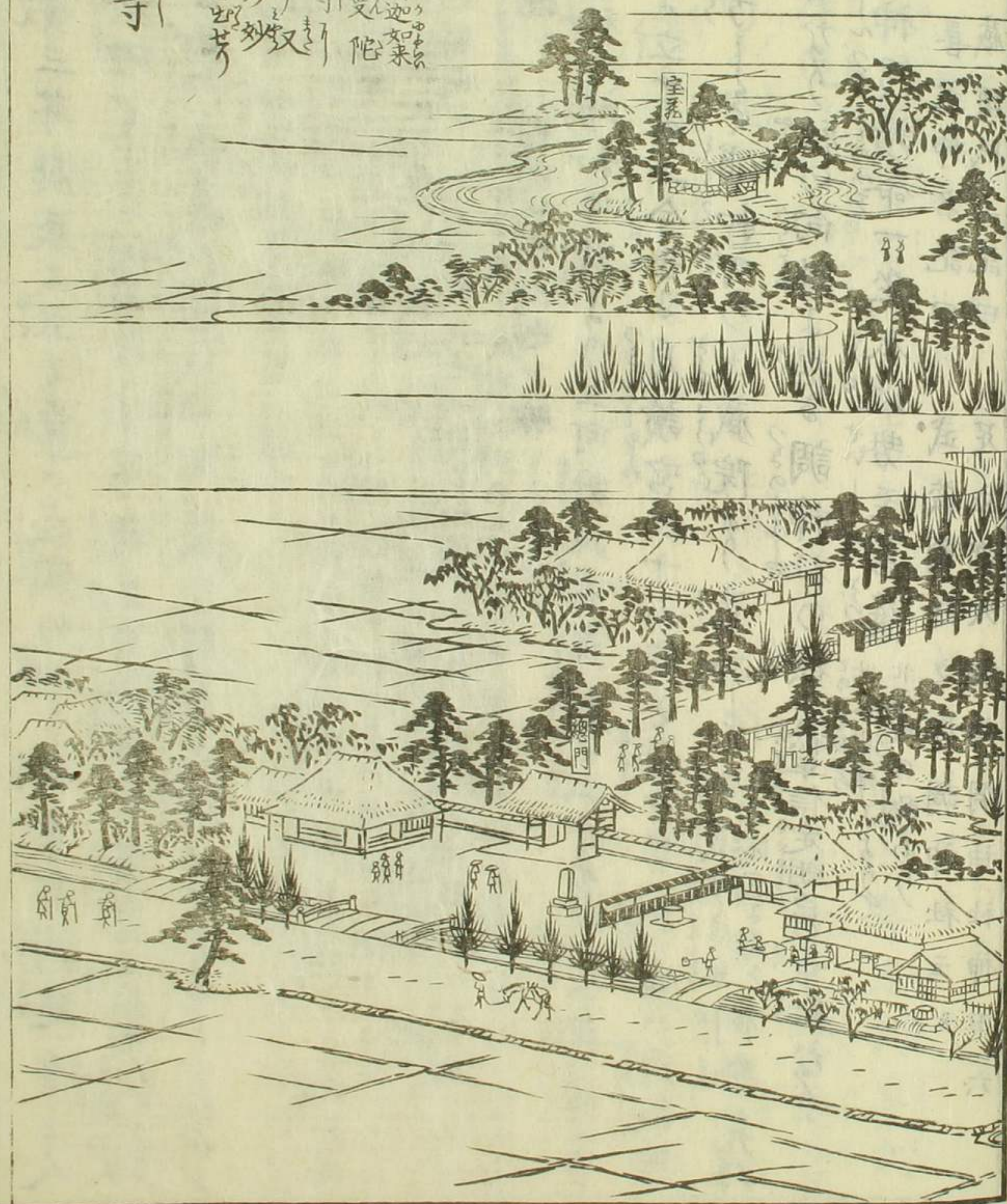
延山嶺に至る上人は謁して徳丸を出家せしむ

又祝髪して日徳と号

此時上人の書の本を子安の如く稱せり

妙顯寺

子安の釋迦如來  
子安の曼陀羅  
子安の當寺  
子安の置す  
子安の安産の妙  
符を此寺



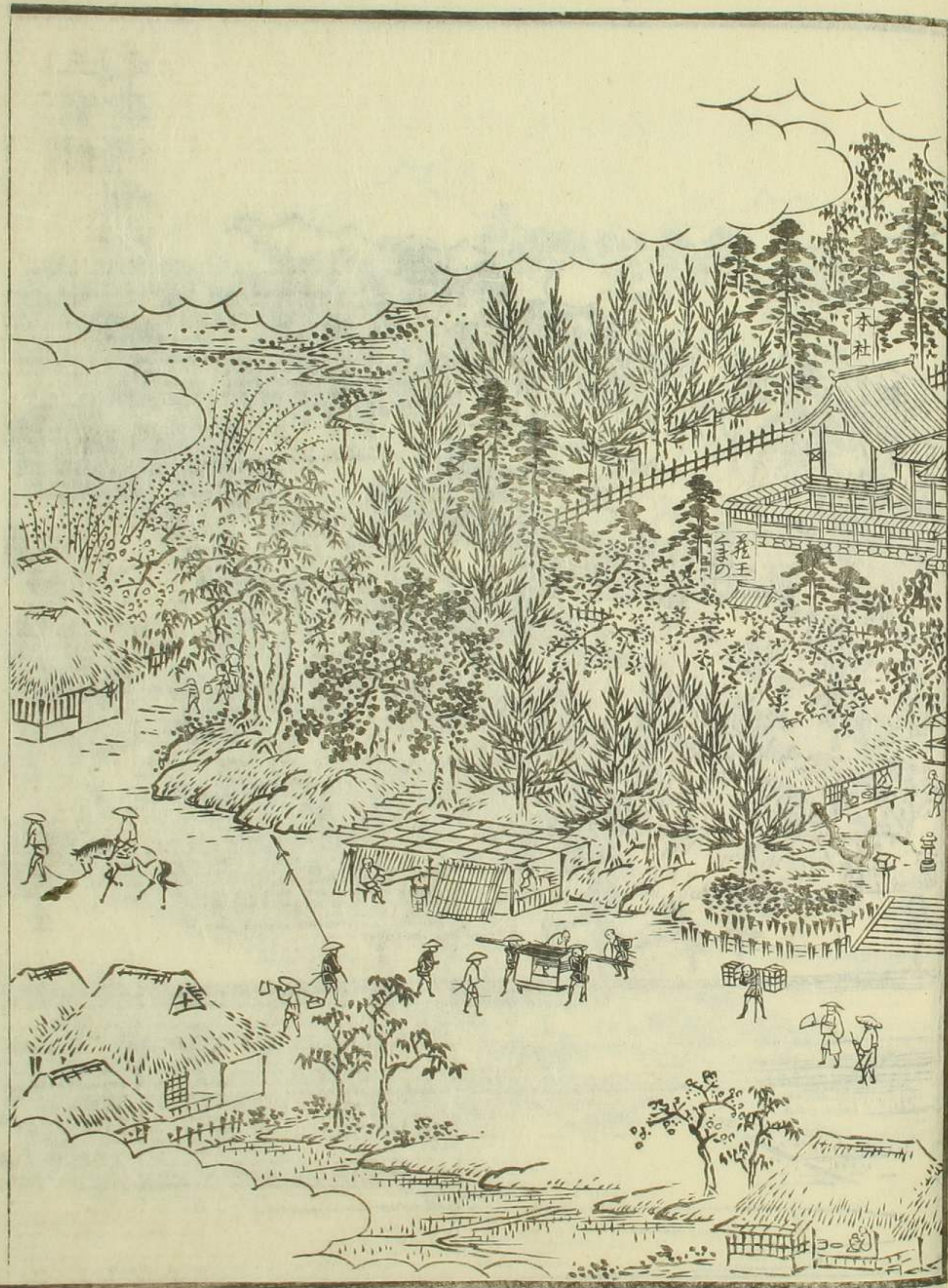
弘安三年庚辰に至り竟り志願の如く當寺を創建を上人  
日向師とて開山たりし時  
日光自相継ぐ當寺に住せり  
淡川左衛門佐義行居城日趾  
蕨の驛舎の邊ありて  
これども今其地をさぐるなり

鎌倉大草紙曰長祿元年六月廿三日淡川左衛門佐義鏡を大将として武蔵國  
比叡下野ハ公方の近親ゆき九州探題の家なれば諸家も重き事ありし  
より祖父を助けて佐義行ハ久しく武蔵の國司あり足立郡に居りし  
取立居城中に今に至る迄此所を知れり  
管領として關東と可治郡とを  
管領として關東と可治郡とを

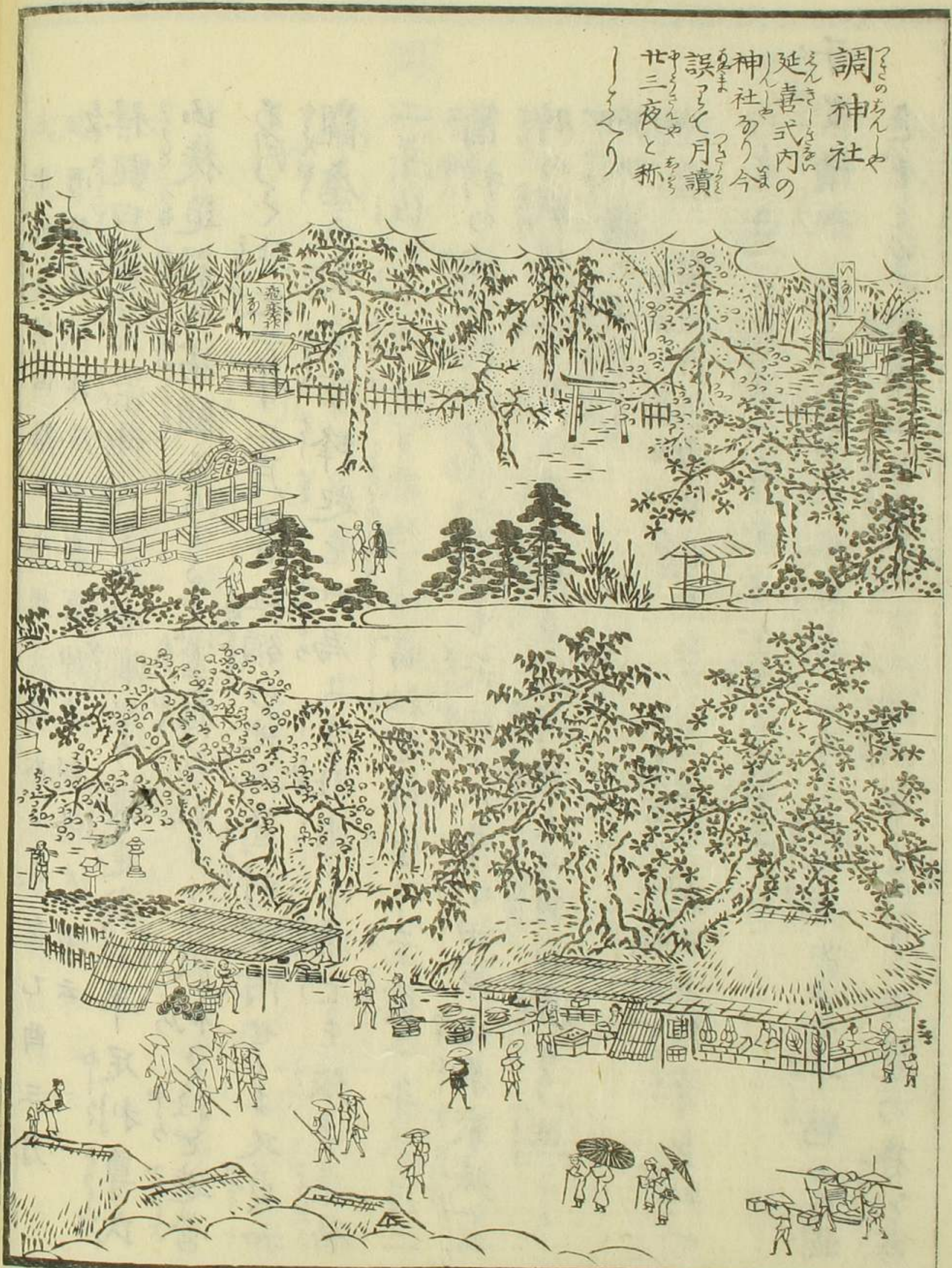
調神社 浦和の驛より三町計此方岸村と云ふあり社ハ街道より  
右に立せり今世は月讀宮二十三夜と稱せり別當八月山寺  
と号し浦和町の玉蔵院より兼帶を  
廿日なり社の向拜は掲る調神社の額ハ松平信定朝臣の筆跡なり  
祭神月讀命一坐本地勢至菩薩  
延喜式神名記曰 武蔵國足立郡調神社云云  
武蔵國風土記曰 足立郡大調郷調神社神田六

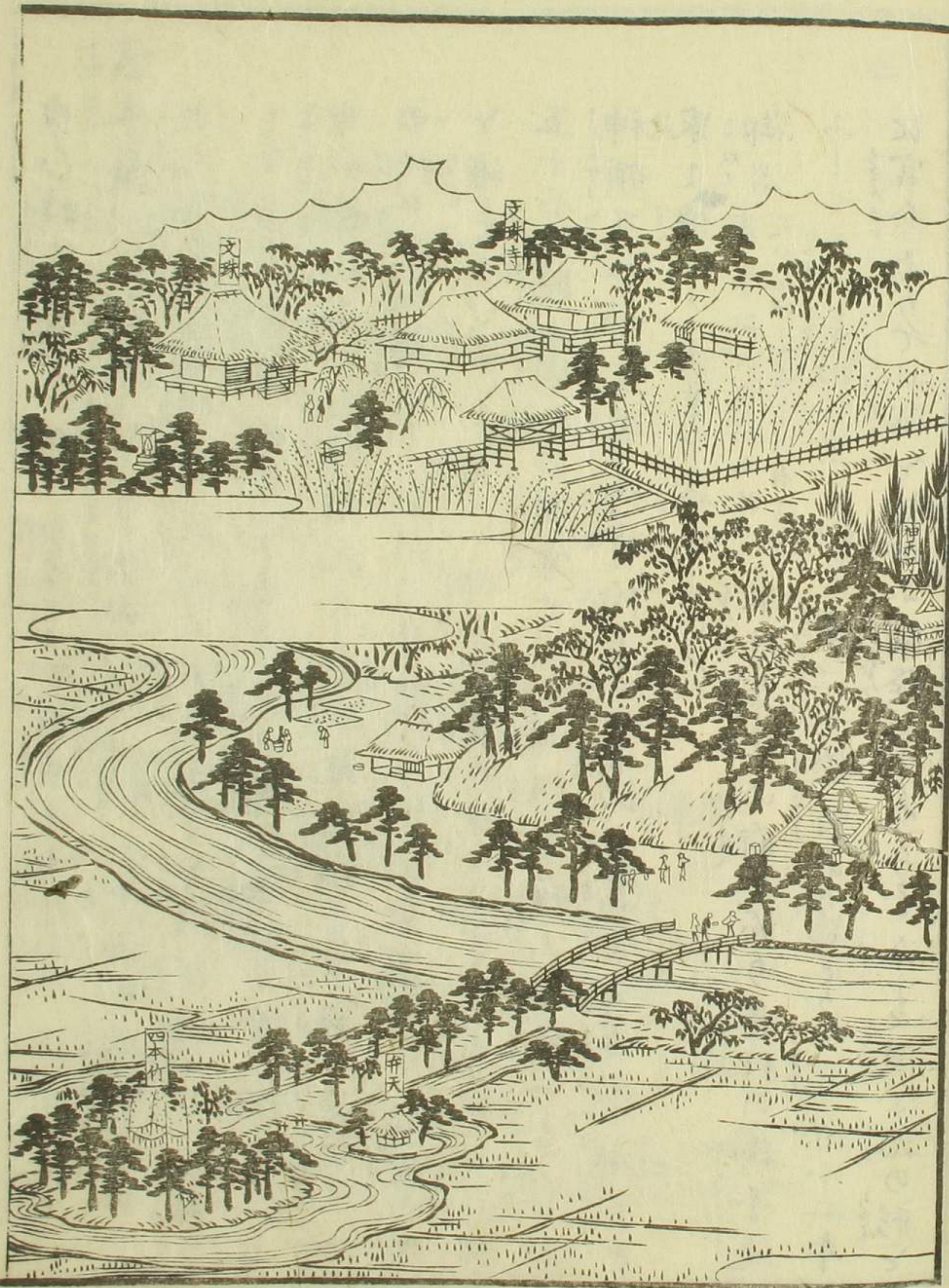
十束二字田雅日本根子彦大日天皇乙酉三月

社記曰當社ハ崇神天皇の勅願なり後建武三年足利尊氏  
凶徒追罰の宿願ありけるが靈應むすべし仍り社を造營  
あつて延元二年二月五日社領の地五箇村を附せり又貞和  
觀應の間宮方蜂起を此為り寺社悉く廢亡を依り康曆  
二年佐々木近江守源持清當社を經營し至徳二年正月二  
箇村の地を附たりとも天正十八年小田原北条家滅亡の  
時の戦ひに神寶も共り散失し神領も又自ら廢せり然るに  
御入國の頃忝くも  
神祖 當社の来由を聞しめり改て美田山林等を封せ  
らる竟り慶安二年朱章を下り賜ふ  
子安清水 同所長光山妙典寺にある所の池を以り早魁の洞  
と名づけて相傳ふ日蓮大士此池水を以りて安産の符を書

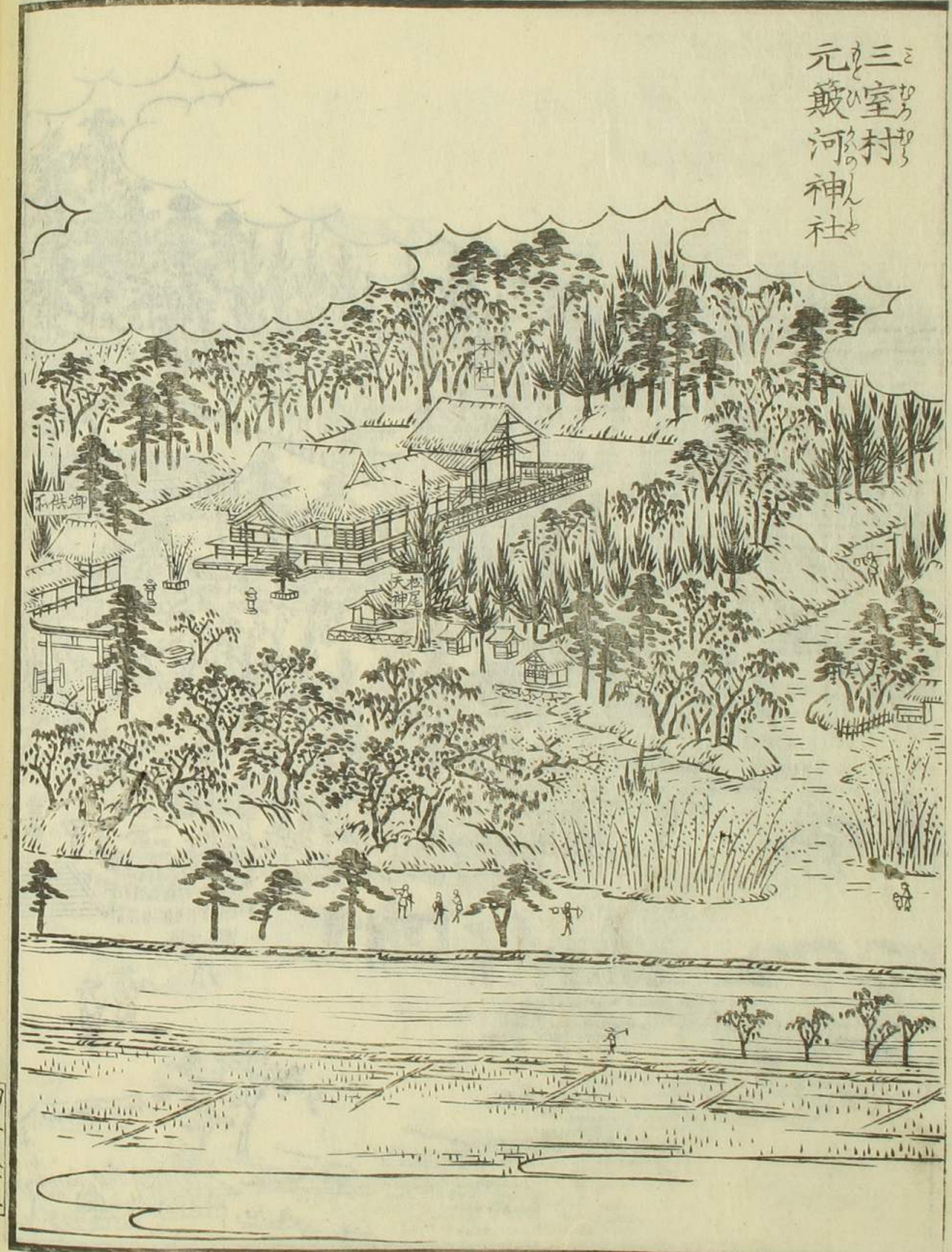


調神社  
 延喜式内の  
 神社あり今  
 誤りて月讀  
 社三夜と稱





三ノ室村  
元ノ殿河神社



氷川宮大門先



のい時光り妻に與へらまゝ一加持水なりといふ

宮本簸川大明神社

宮本郷

大宮駅より二十町程北

三室山の南麓少河と

土人宮本の簸川社と称へ又女躰宮と号し祭神大宮同躰

にて本宮大己貴命右素盞尊左奇稻田媛命と齋ひ祀る當社山

中枚檜神多く社頭巍然として瑞籬葦滑をり現る鼓の音朝

の祈夕の報賽まゝ一めはあま山林にむけくさくさ神感の興

と催まらむひとの貴し神主武笠氏世々まはる奉祀し社領

五十石と賜ふ國初の頃嘗て神祖を神主の家に入れたまひ

神領及び神宝等御寄附あらせり古器古文書等神主の

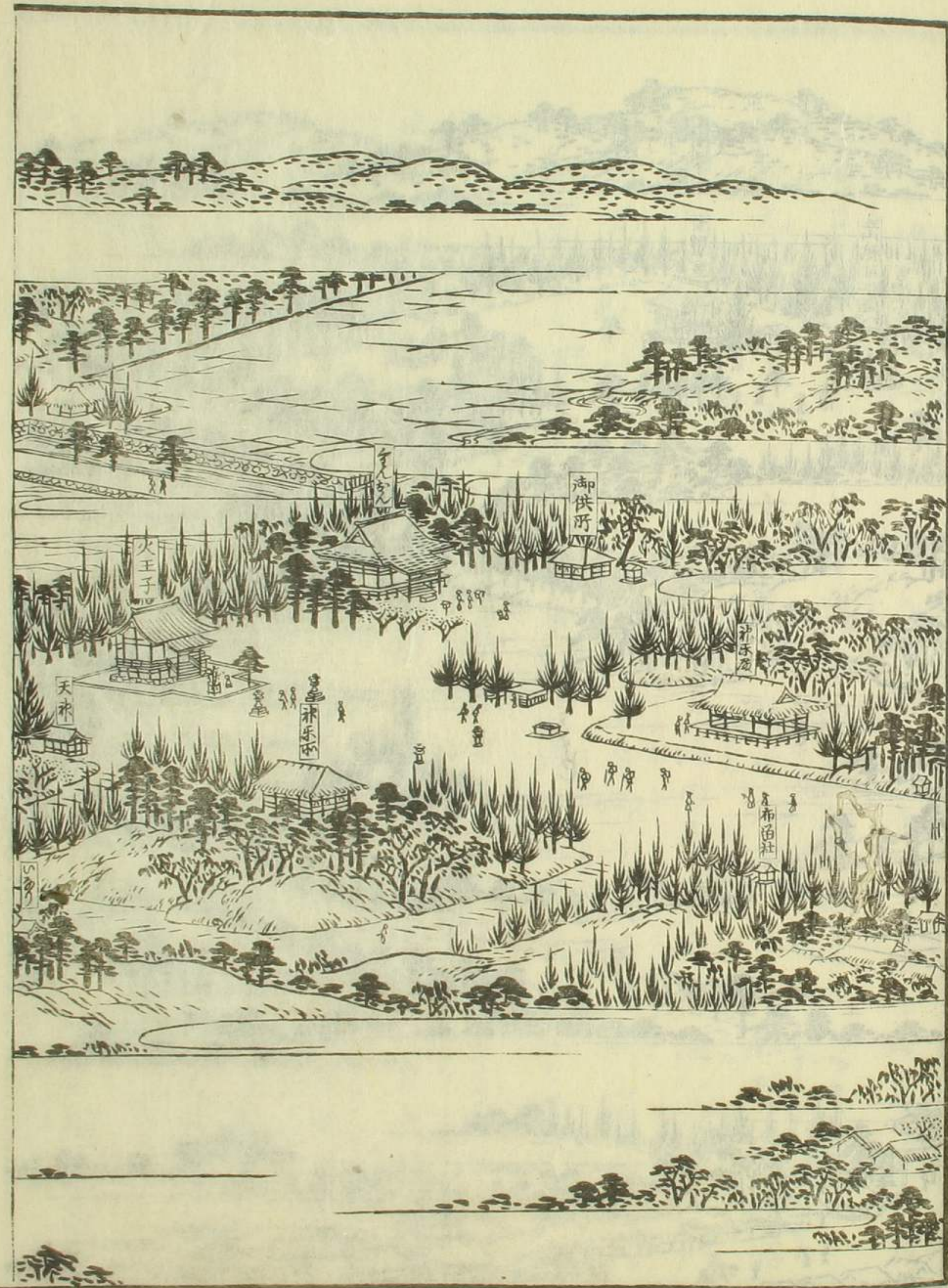
家傳へてまはる蔵まゝといふ

御沼 舊事記に水沼小作り本社鳥居の前あり當社の御手洗

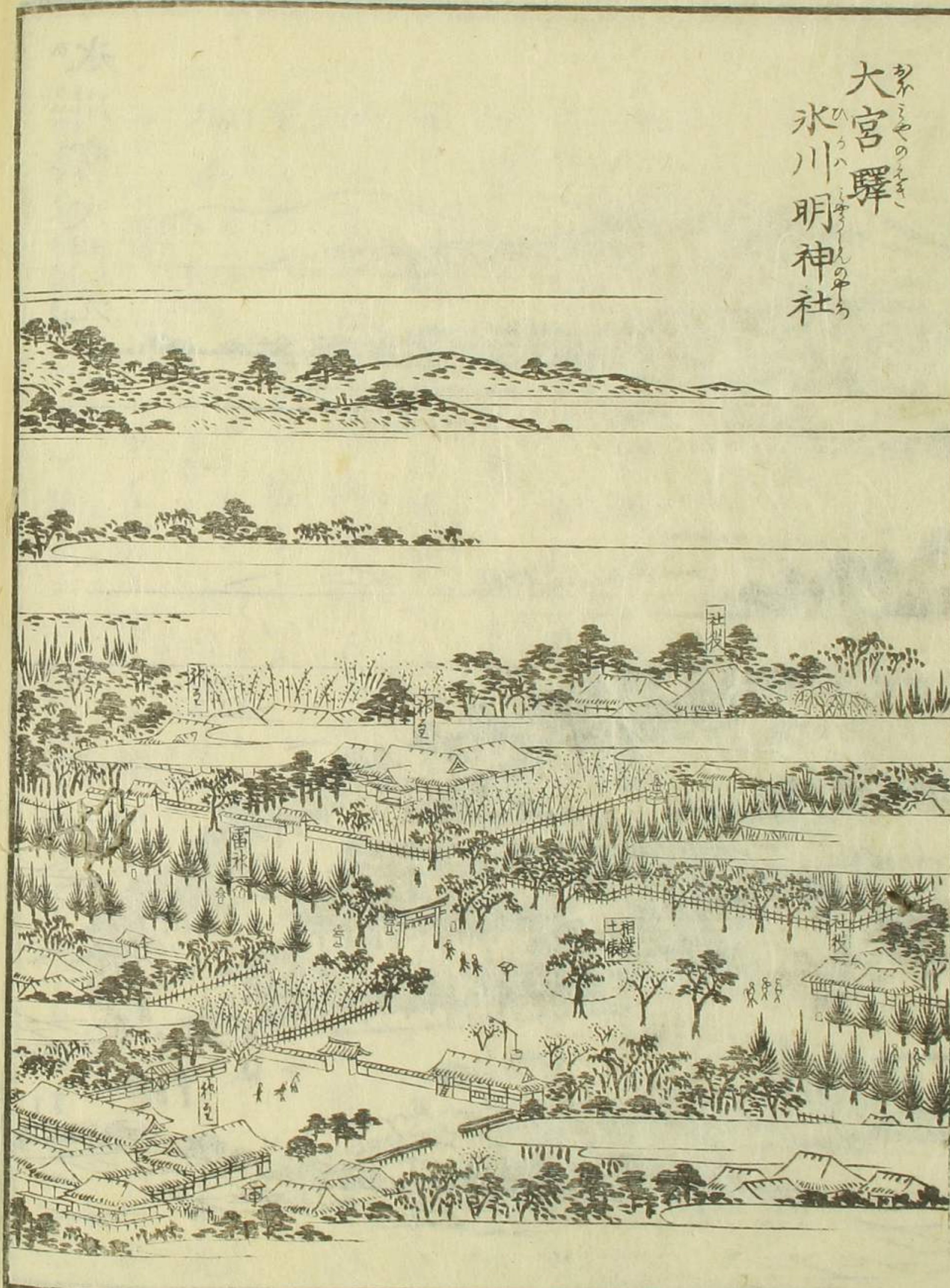
ありて昔ハ長四五里をめぐり廣二十餘町ありしとや享保十二年

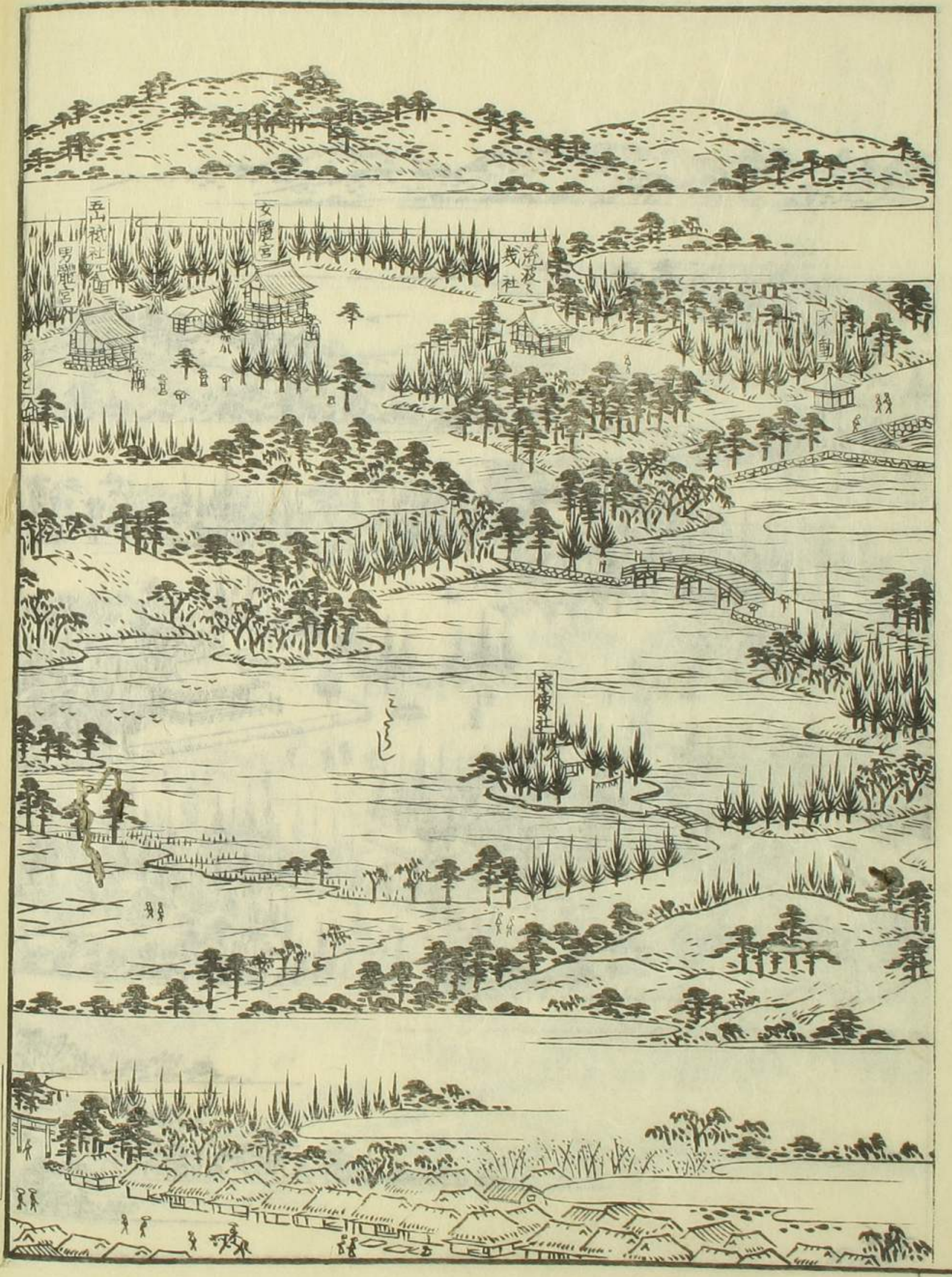
に官命ありて此沼を新田小開發せしめらる今も僅よ沼の形と





大宮驛 おみやのえき  
 氷川明神社 ひがはのあけみのかみ





存も然も猶沼の水中より九月八日大神事なまへ又も十二月  
 大晦日の夜々々時々々龍燈現も事ありといへり  
 例祭九月八日と六月十四日なり就中九月八日を船祭とて御沼  
 の中へ神輿と船めて渡し奉る沼の中々々神酒と供もな  
 儀式あり上代の瓶子今猶神主の家に此日神幸の時午前中々北風に  
 て船あつり沼の中に至る還輿の時ハ必南風よ變りて神輿の  
 船も本岸に到り着此事振古違ふもかゝりともや  
 大智山文殊寺大般若堂と號を社地より壹丁程社寶大般若經  
 一部持統天皇勅りて納め賜ふ所より昔時關東兵乱屢なるも一大般若經  
 一部國守より當社に納め賜ふ所より昔時關東兵乱屢なるも一  
 正月八日天下泰平の御祈禱とて文殊寺に於て般若會修行も至りて毎年  
 武藏國風土記曰足立郡蕨川原出鮎鰻諸鮮芹菜  
 胡香需早水共為民用云云  
 右の御沼の邊水澤の地と惣て呼ぶ見ゆ又大宮の南の方道乃  
 左右三十丁まりの原と大宮原とも唱ふは若くハ其邊まゝ瓜りんかちる

大宮氷川神社 大宮驛の中 高鼻村と氷川戸街 街道の右の方に鳥居立石あり

よりまより十八町入て御本社なり神領三百石 神王角井氏岩井氏

こまこま奉祀を祭神三座本社の右ハ素盞雄尊 男體の宮と稱す 同

左ハ奇稻田媛命 是ハ奥の社と稱す 本宮ハ大己貴尊と齋ひ奉る 蘇王子宮

これ即武藏國第一宮にして延喜式名神大社大月嘗新嘗に列す

第一の宦社なる所なり

荒波々幾社 本社の傍に在手摩乳足摩乳二神と祀る 武藏國風土記

宗像社 同橋の左の方にあり祭神田心姫津姫

五山祇社 本社の後の方より大山祇中山祇麓山祇

本地堂 神池の北にあり觀音と本尊と社僧五宇あり江戸

延喜式 神名帳曰武藏國足立郡氷川神社名神大

一宮記曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

神名帳頭註曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

三代實錄曰貞觀十一年十一月十九日壬申授武

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

武藏國風土記曰足立郡氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

藏國從四位下氷川神社正四位下云云

老らるる身は... 持資

平貞盛願書一通 前太平記に上平太貞盛あり

一筋の願書に... 願書の文

敬白 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

月明 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

瞻品 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

怒卒 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

暴惡 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

暴惡 祈願事 夫以氷川大明神者本地真慮之

鎮山徒自把斧越致一戰之日刺中矢肆於彼戰場  
殞命今貞盛繁兼任等苟雖以不起之身起一舉  
居義兵欲誅朝敵報父仇非神靈加護之力者爭得  
勝於瞬目之玄鑿無誤者先令見之瑞驗願祈  
時丹心誠玄鑿無誤者先令見之瑞驗願祈  
願如件有誠玄鑿無誤者先令見之瑞驗願祈  
天慶三年正月廿五日  
平貞盛敬白

足利將軍尊氏公御教書

小田原北条家神領寄附之狀

社記曰當社之本朝武運の守護神治國利民の神域と

て鎮坐年舊ぬ二千餘年の星霜和光あま新なり利生徳普

一東方八洲乃蒼生ありく神威以仰きまは以て

世々の武將も崇敬と嚴めて却敵勝利國民安泰の祈誓

と掛たまつらるハ稀あり誠ニ神徳乃日々に新に年々小盛

にましまはしと誰人うまきと仰りさうんや何乃輩々利物

乃和光と蒙らさうんやされも景行天皇の御宇日本武尊

東夷征討の趣き多し頃當社は所祈誓ありく程あつて凶徒を鎮

めり其後聖武天皇の御宇諸國一宮と撰定なりぬ

武蔵國ゆゑに當社を以て一宮とあそめ且奉幣使を向らる又

醍醐天皇の御宇ゆゑに神社の大小の社格を定められ當國四十四座の中

當社を撰て大社二座の中此冠たりむ其後朱雀天皇の御宇に

至りて貞盛繁盛兼任等の兄弟將門退治の爲東國は發向を

其時日本武尊の先蹤に准ひ當社は詣りて一通の願書を籠

むる果して靈應を得ると又治承四年頼朝寄願の旨あるふり

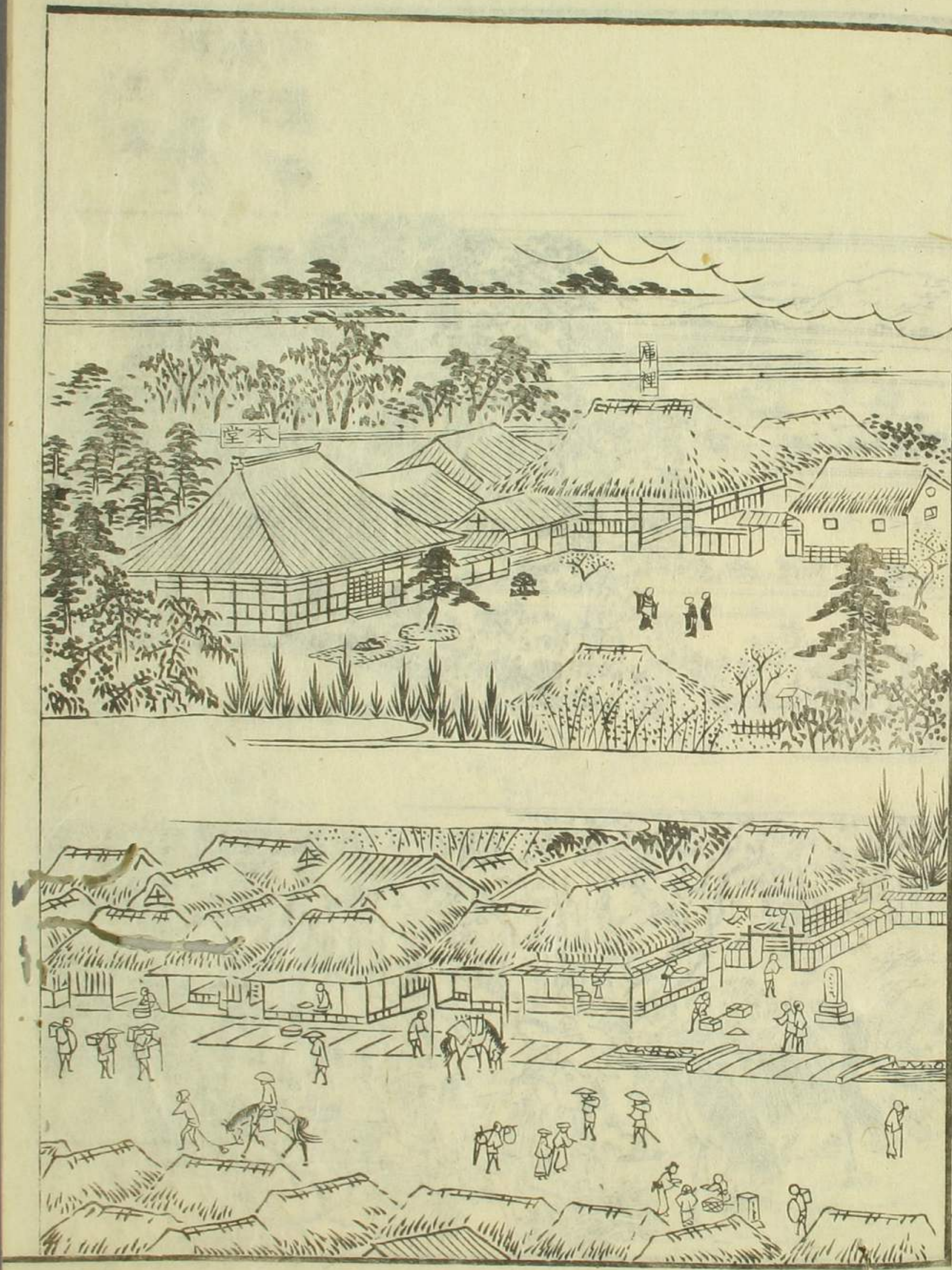
社頭を修營ありて大宮領永三貫文の地を寄附せられ社中

亂妃狼藉なつてべきが爲に制札ゆび所教書を賜ふ然るも

天文永祿の頃東國大に乱れ争戰屢中りて社頭荒蕪しるを

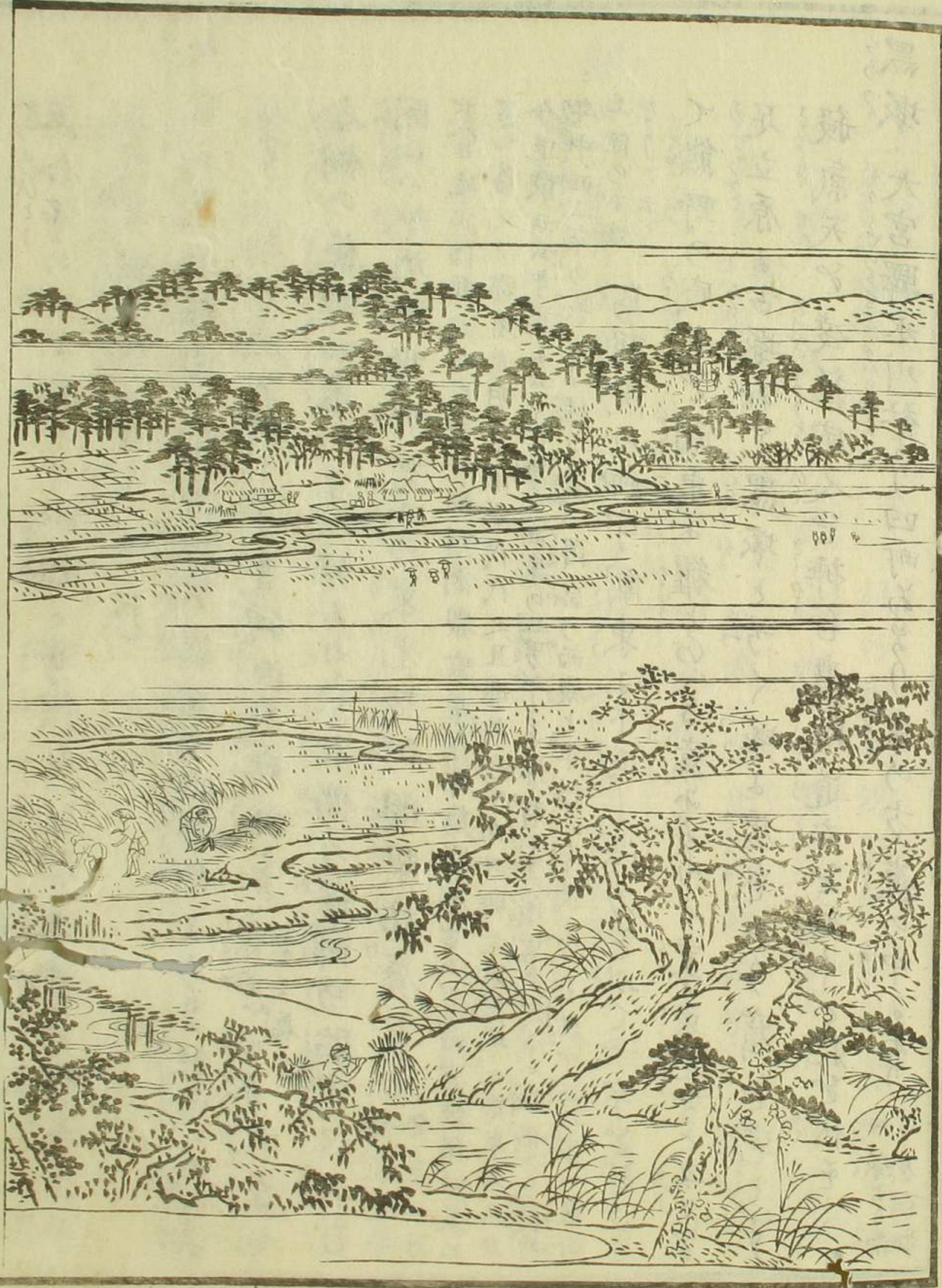
これに天正十九年當社の荒廢を歎き思ひ召れ御當家より

社壇を重修なりし又慶長九年足立郡より高鼻ゆび上

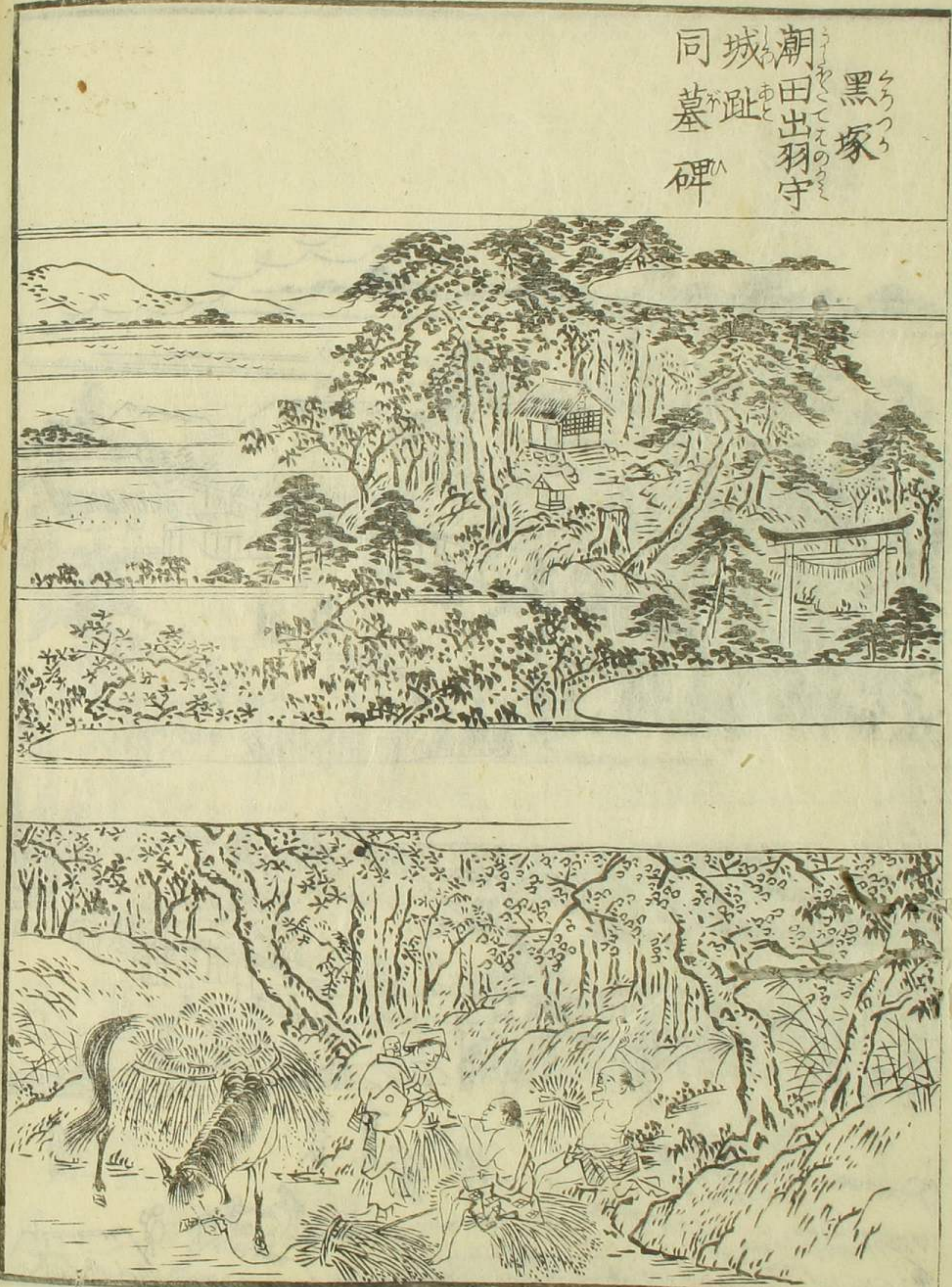


おみやのまき  
大宮驛  
東光寺





黒塚くろつら  
 潮田出羽守うしほのりょうでん  
 城趾しろあし  
 同墓碑どうぼい



落合等の地と合せ社領に寄附なりし章の明奉を下  
され官造宮社に列せしむ

大宮山東光禪寺 同所大宮宿宮町の右側より往古八天台宗

なるが今宗風を轉しく曹洞派の禪林とす 赤谷の常泉 寺に属す 本寺を

金銅の薬師如来一寸八分ありく木佛の薬師の胎中に収む

開山ハ紀州熊野那智山の東光坊阿闍梨祐慶なり 長寛元年 癸未四月

廿八日遷化傳聞天台宗東光坊阿闍梨宿慶法印熊野那智山下濱宮住侶西家三

男之蓋足立郡者光明房依為代代之且那所令下向此時大宮黒塚之悪鬼以法力

令退散云云寺説よ云く祐慶ハ西家の三男なり那智山下濱宮とて住侶なり長徳

年中西三条の家あり継るが濱宮の西殿と申傳へ今猶あるを就中西の家ハ熊野

上經の正嫡 鳥羽院の御宇關東より下向し法力を以て一字と記しき

て熊野の威光と關東に耀とのへる意ふありく寺を東光寺と号す

足立原は古塚あり黒塚と号く塚に悪鬼あり窟を宅とす

殺氣天と凌猛威人と稱ひ慶師道力を勵しこれを伏せし

黒塚 大宮驛水川社より四町あり東の方森の中より 此塚より南の方百歩

半と隔て東光坊の旧跡あり 往古東光坊阿闍梨祐慶悪鬼退

二丁四方の間雜樹繁茂せり 治の地なり昔ハ足立原と唱ふ世俗奥州の安達が原とて誤

なり 奥州の黒塚ハ二本松と八丁 此所も奥州への海道なれば混交へ

ありしなり 足立原の黒塚と武蔵國とてさるハ 紀州那智山の記にもんそり

潮田出羽守源資忠之墓 同良の方十町半を隔り 資忠の城趾に

岡 資忠ハ足立郡大宮壽能城主なり其先清和天皇九代

後胤後三位右京大夫兼兵庫頭頼政十九世の嫡流太田美濃守

三樂齋資正第四の男也天正十八年庚寅四月十八日相州小田原

に討死を因り其家臣北澤宮内なる者恩寵餘澤の深

思ひ私よこのところ塚を営む元文三年戊午資忠六世の嫡孫

潮田氏資方再び北澤某よ命しく墓碑を造らむるの旨其

碑銘よ詳かりし

江戸名所圖會天権之卷

終畢

十三ノ冊 四ノ百九十二



早稲田大学図書館

011688984957